

南相馬市埋蔵文化財調査報告書 第7集

大田和広畑遺跡

— 縄文時代集落跡の調査 —

平成19年3月
福島県南相馬市教育委員会
福島県相双建設事務所

序 文

文化財は、我国の長い歴史の中で生まれ、今日まで守り伝えられてきた国民共有の財産であり、その地域の歴史、伝統、文化などの理解のために欠くことのできないものであると同時に、将来の文化の向上・発展の基礎をなすものがあります。

とりわけ、地中に埋もれている埋蔵文化財は、文字資料だけでは知ることができなかった先人の生活の様子や文字がまだなかった時代の人々の生活や文化について、私たちに多くの情報を与えてくれます。

近年、南相馬市内では広範囲にわたり開発の波が押し寄せつつある一方で、長い歴史を経て保存されてきた埋蔵文化財が一日にして失われてしまう危険性があります。このような状況のなか、教育委員会では、埋蔵文化財の保護のため、開発が行われる前に、遺跡の範囲や性格などの資料を得る目的で、分布調査や試掘調査を実施しております。

開発に際しては、これらの資料をもとに、関係の方々及び機関と遺跡についての保存協議を行い、保存が困難な場合については、記録保存のための発掘調査を実施しております。

本報告書は、平成 17 年度に、県道中ノ内・小高線整備事業に伴い失われてしまう大田和広畑遺跡について実施した発掘調査の成果報告書です。今後この報告書を、埋蔵文化財の保護、地域史研究のために活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、地権者の皆様をはじめ、調査にご協力いただきました方々に、心から感謝を申し上げます。

平成 19 年 3 月

南相馬市教育委員会
教育長 青木紀男

例 言

1. 南相馬市は原町市・相馬郡小高町・同鹿島町の1市2町による市町村合併を経て、平成18年1月1日付で誕生した新市で、旧小高町は南相馬市小高区となった。
2. 本書は、県道中ノ内・小高線の整備事業に伴う大田和広畑遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
3. 発掘調査は、南相馬市教育委員会が福島県相双建設事務所の委託により実施した。
4. 発掘調査は、以下の体制で実施した。

調査主体 南相馬市教育委員会

事務局 南相馬市教育委員会文化課

教 育 長	青 木 紀 男
事 務 局 長	風 越 清 孝
事 務 局 次 長	藤 原 直 道
文 化 課 長	烏 中 清
課 長 補 佐	引 地 芳 典
主 査	佐 藤 友 之
副 主 査	北 原 美 紀
事 務 補 助	萩 原 佐 千 子

調査担当 文 化 財 係

係 長	堀 耕 平
副 主 査	川 田 強
副 主 査	荒 淑 人
学 芸 員	佐 川 久

・整理補助員 牛渡由起子・松崎孝子・松本経子・渡部定子・渡部恵美・玉川美枝子

5. 本報告書に掲載した文章、挿図、図版は佐川が執筆、作成した。
6. 本報告書の編集は佐川・川田がおこなった。
7. 石質の鑑定については、高木和夫氏（小高商業高等学校）に指導をいただいた。
8. 発掘調査、報告書作成にあたり、次の方々から指導・助言を得た。記して感謝申し上げる。

文化庁文化財部記念物課，福島県教育庁生涯学習・文化スポーツ領域文化財グループ，福島県立博物館，
(財)福島県文化振興事業団，福島県文化財センター白河館まほろん，森 幸彦，高橋 満（福島県立博物館）
松本 茂，青山博樹，林紘太郎（福島県文化振興事業団）阿部健太郎，梶原圭介，梶原文子（会津美

里町教育委員会) 嶋村一志 (泉崎村教育委員会) 吉田陽一 (二本松市教育委員会) 三瓶秀文 (富岡町教育委員会) 長谷川 真 (岩手県宮古市教育委員会) 中島広顕 (東京都北区教育委員会) 藤木海 (大成エンジニアリング) 高木和夫 (県立小高商業高等学校) 玉川一郎, 藤沼邦彦, 樋泉岳二, 山田昌久 (浦尻貝塚調査指導委員会) (順不同・敬称略)

9. 発掘調査に際しては、次の機関及び個人から協力を得た。記して感謝の意を申し上げる。
福島県相双建設事務所, 大田和行政区, 大洋建設株式会社, 株式会社あぶくま緑化土木, 佐々木隆慶,
本多和三, 新開重雄 (順不同 敬称略)
10. 調査で得られた資料は、南相馬市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 図中の方位は真北方向を示し、水系レベルは海拔高度を示す。
2. 遺物の断面は白抜きで図示した。
3. 遺物番号は挿図ごとに通し番号を付し、() 内もしくは挿図上方に出土地点・層位を示した。
4. 掲載した遺構・遺物の縮尺率は図中に示した。
5. 遺構の推定線は点線で表した。
6. 後世の攪乱は一点鎖線で表した。
7. 平面図ならびに断面図に用いたスクリーントーンの内容は適宜に図中に示した。
8. 断面図の土層は、基本層位をL I・L II…で、遺構堆積土を $l 1$ ・ $l 2$ で表示した。
9. 本文並びに図作成に使用した記号・略号は、以下の内容を示す。
T: トレンチ G: グリット S I: 竪穴住居跡 SM: 埋設土器 SK: 土坑 P: ピット
10. 遺物写真の縮尺は不同である。
11. 遺物写真の番号は挿図番号に対応している。

目 次

序 文	I
例 言	III
凡 例	IV
目 次	V
挿 図 目 次	VI
表 目 次	VI
図 版 目 次	VI
第 I 章 南相馬市を取り巻く環境		
第 1 節 地理的環境	1
第 2 節 歴史的環境	3
第 II 章 調査概要		
第 1 節 調査に至る経過	6
第 2 節 調査の方法	7
第 3 節 調査日誌	7
第 III 章 調査内容		
第 1 節 調査区について	9
第 2 節 基本土層	10
第 3 節 遺構・遺物	10
第 1 項 土器分類		
第 2 項 竪穴住居跡		
第 3 項 土坑		
第 4 項 遺物包含層		
第 5 項 遺構外出土遺物		
第 IV 章 試掘調査について		
第 1 節 調査成果	45
第 2 節 出土遺物	47
第 V 章 ま と め		
第 1 節 遺物について	57
第 2 節 遺構について	58
引用・参考文献		
写真図版		
報告書抄録		
奥 付		

挿 図 目 次

図1	南相馬市位置図	1	図24	8号住居跡出土遺物	32
図2	南相馬市内地質図	2	図25	9号住居跡実測図	34
図3	南相馬市小高区内の縄文遺跡位置図	5	図26	9号住居跡出土遺物	35
図4	調査地点位置図	6	図27	1号土坑実測図・出土遺物	36
図5	調査区位置図	9	図28	2号土坑実測図・出土遺物	37
図6	基本土層	11	図29	遺物包含層出土遺物①	38
図7	B地区全体図①	12	図30	遺物包含層出土遺物②	39
図8	B地区全体図②	13	図31	遺構外出土遺物①	41
図9	1号住居跡実測図	15	図32	遺構外出土遺物②	42
図10	1号住居跡出土遺物①	16	図33	遺構外出土遺物③	43
図11	1号住居跡出土遺物②	17	図34	遺構外出土遺物④	44
図12	2号住居跡実測図	18	図35	トレンチ・グリット配置図	45
図13	2号住居跡出土遺物①	19	図36	10・12トレンチ断面図	46
図14	2号住居跡出土遺物②	20	図37	10・11トレンチ出土遺物	48
図15	3号住居跡実測図・出土遺物	21	図38	12トレンチ出土遺物①	49
図16	4号住居跡実測図	22	図39	12トレンチ出土遺物②	50
図17	4号住居跡実測遺物①	24	図40	12トレンチ出土遺物③	51
図18	4号住居跡実測遺物②	25	図41	12トレンチ出土遺物④	52
図19	4号住居跡実測遺物③	26	図42	12トレンチ出土遺物⑤	53
図20	5号住居跡実測図・出土遺物	27	図43	12・13トレンチ出土遺物	54
図21	6号住居跡実測図・出土遺物	29	図44	1・2・3グリット出土遺物	55
図22	7号住居跡実測図・出土遺物	30	図45	石器・土製品	56
図23	8号住居跡実測図	31			

表 目 次

表1	南相馬市小高区内の縄文遺跡一覧	4
----	-----------------	---

図 版 目 次

図版1	63	図版3	65
1	大田和広畑遺跡遠景	1	1号住居跡
2	大田和広畑遺跡近景	2	1号住居跡断面
3	A地区全景	3	1号住居跡遺物出土状況
図版2	64	4	1号住居跡ピット1
1	B地区遺構確認状況①	5	1号住居跡ピット1断面
2	B地区遺構確認状況②	図版4	66
3	B地区遺構確認状況③	1	2号住居跡
4	B地区全景	2	2号住居跡断面
5	B地区北壁断面①	3	2号住居跡遺物出土状況
6	B地区北壁断面②		

図版 5	67	3	9号住居炉跡断面
1		4	9号住居跡埋設土器
2		5	9号住居跡埋設土器断面
3		図版11	73
4		1	1号土坑
5		2	1号土坑断面
6		3	2号土坑
7		図版12	74
図版 6	68		1～3号住居跡出土土器・石器・土製品
1		図版13	75
2			4号住居跡出土土器・土製品
3		図版14	76
図版 7	69		5～9号住居跡出土土器
1		図版15	77
2			1・2号土坑、遺物包含層、遺構外出土土器・石器
3		図版16	78
図版 8	70		遺構外出土土器・土製品
1		図版17	79
2			10～12トレンチ出土土器
3		図版18	80
4			12トレンチ出土土器
5		図版19	81
6			12トレンチ出土土器
図版 9	71	図版20	82
1			10～13トレンチ、1～3グリット出土土器・石器・土製品
2			
3			
図版10	72		
1			
2			

第 I 章 南相馬市を取り巻く環境

第 1 節 地理的環境

福島県南相馬市は、阿武隈高地の東側、太平洋に面する浜通り地方の中央よりやや北側に位置し、北は相馬市、西は相馬郡飯館村、南は双葉郡浪江町に接している。南相馬市は平成 18 年 1 月 1 日付けで、これまでの原町市・相馬郡小高町・同鹿島町の 1 市 2 町が合併して誕生した市で、面積は約 398.5km²を有する。人口は約 72,000 人で、相馬・双葉地方の政治・経済の中核都市である。

主要交通は、市内を南北に縦走する国道 6 号線ならびに J R 常磐線であるが、近年は高規格道路と

しての機能が期待されている常磐自動車道の建設が進められており、市内の道路網の在り方が変容しつつある。

南相馬市の地形は、西部を南北に縦走する阿武隈高地とそこから派生する低丘陵、丘陵間に開析された沖積平野とで構成される。阿武隈高地は東西約 50km、南北約 200km の規模を有し、標高は 500 ～ 600m である。阿武隈高地周辺の丘陵では標高 100 ～ 150m を測り、東延するにしたがって徐々に高度を下げ、海岸部では 20 ～ 30m になる。

地質は、阿武隈高地東縁部と浜通り低地帯とは双葉断層によって明瞭に区分される。阿武隈高地は、古生代から新第三紀中新生に至る地質を有し、日本最古の地質構造を形成している。基盤層は、古期及び新期・最新期の花崗岩・変成岩類である。

阿武隈高地裾部から派生している低丘陵は、新生代第三紀に形成された固結度の低い凝灰岩質砂岩・泥岩で構成されている。丘陵部では第四紀洪積世における氷河期と間氷期の海水準変動により、丘陵周縁には海成ならびに河成の段丘が形成され、高位・中位・低位に区分されている。また、低丘陵間には各河川が樹枝状に開析した谷間に沖積平野が入り込んでいる。

小高区では、中位段丘に旧石器時代以降の遺跡が多く確認される。中位段丘の発達は小高川流域で顕著であるが、宮田川流域では一部の地区に限られている。また、宮田川河口は、かつては井田川浦という東西 1.8km、南北 1km におよぶ大きな潟湖が形成されていたが、大正末～昭和初期にかけて干拓されている。潟湖を形成した浜堤は、旧井田川浦南部の堤状の段丘から北に 1.7km に渡って展開している。北に位置する小高川河口でも、同様に浜堤が形成され、小規模ながら前川浦という潟湖が現在も残されている。

大田和広畑遺跡は、南相馬市の南部に位置する小高区に所在する。J R 常磐線小高駅から小高市街地を抜け、西南西方向に約 5km 離れた、小高川北岸の標高 44 ～ 60m を測る低位の河岸段丘に営まれた遺跡である。



図1 南相馬市位置図

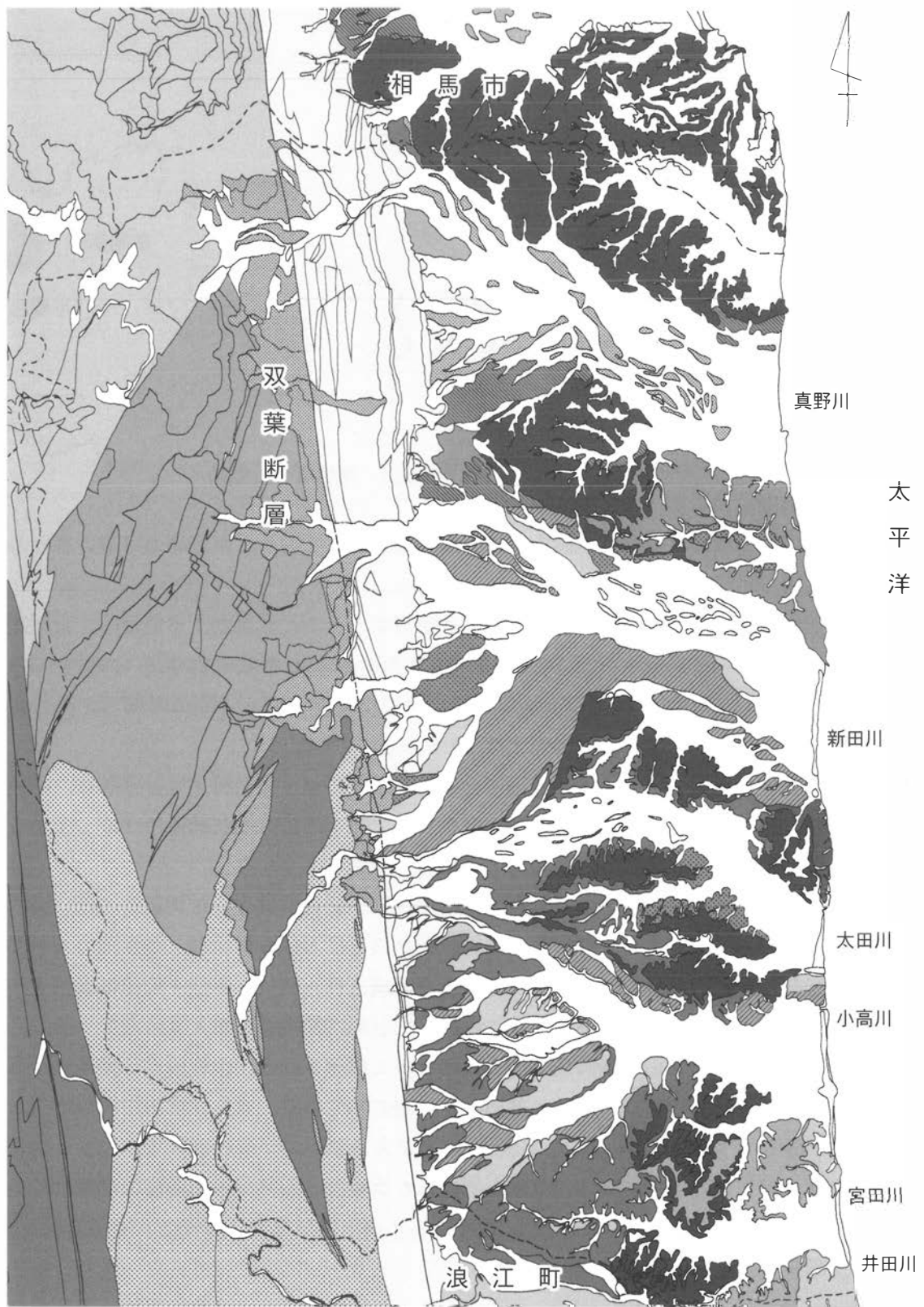


図2 南相馬市内地質図

第2節 歴史的環境

今回の発掘調査では縄文時代の遺構が検出されたことから、ここでは大田和広畑遺跡がある小高区の縄文時代の遺跡について確認しておきたい。

小高区に所在する縄文時代の遺跡の多くは、区内を東流する小高川・宮田川流域の段丘上に確認されている。小高区の縄文時代の遺跡を全体的にみると、早・前期の土器が出土・散布している遺跡が多い。

早期の遺跡は、荻原遺跡・栗成沢遺跡・板木沢遺跡等のように山間部に比較的多く分布する。このうち小高川の支流である北鳩原川南岸にある荻原遺跡では、数回にわたる発掘調査が実施され、合計22軒におよぶ竪穴住居跡等の早期末の遺構が発見され、山間部における当該期の様相が明らかになっている。

前期段階になると、貝塚の形成が始まる。前期前半には、宮田川流域に宮田貝塚・加賀後貝塚・北原貝塚遺跡群、小高川流域に片草貝塚が形成される。宮田貝塚、加賀後貝塚、片草貝塚は現在の海岸線から4km前後離れた内陸部に位置している。これらは、縄文海進に伴い形成されたものと考えられる。

宮田貝塚では、昭和48年に小高町史編さん事業に伴い学術調査が行われ、キサゴを多く含む貝ブロックが確認された(註1)。また、いわゆる「宮田Ⅲ群土器」が確認され、土器型式の地域性に言及されたことは、その後の前期の土器研究に大きな影響を与えた。さらに、ヤス・釣針未製品等の骨角器も出土しており、漁労文化・道具の製作技術等を検討するうえで貴重な資料と言える。

北原貝塚遺跡群では、竪穴住居の柱穴(壁柱穴を含む)と推測されるピット群が検出されている。また、イボキサゴを主体とした貝層が確認されている。平成15年には表面調査ならびに検土杖によるボーリング調査を実施した結果、他の同時期の貝塚と比較すると貝層の規模が大きいことが明らかになっている。さらに、北原貝塚遺跡群の貝層には、多様な種類の魚骨が、極めて高い包含率で含まれており、内湾性の漁労活動が活発に行われていたことが指摘されている(植月・樋泉2004)。

加賀後貝塚では、ボーリング調査によりイボキサゴ中心とした貝層が現水田面下(標高4m前後)の深さで確認された。また、片草貝塚では、現在まで正式な発掘調査は実施されていないが、表面調査により前期中葉の土器等が表採されている。

前期後半以降は前述した貝塚群は収束に向かい、小高川流域には、角部内南台貝塚が、宮田川流域には北原貝塚遺跡群から約500m北側に浦尻貝塚等が形成される。角部内南台貝塚では、形成期が中期中葉と推測される貝ブロックが確認されている。浦尻貝塚では、平成13年から4年にわたる保存目的のための発掘調査が実施された結果、前期後半から晩期中葉までの断続的ながらも長期間にわたる居住域ならびにこれらに伴う貝層が確認され、縄文時代全般を通じた生活様相や自然環境の変遷が把握されている。これらの調査結果により、浦尻貝塚は平成18年1月26日に国史跡に指定されている。

浦尻貝塚より約700メートル東の海崖上にある磯坂遺跡では、晩期末の製塩土器を伴う遺物

包含層が確認されている。北原貝塚遺跡群・浦尻貝塚と併せて東西1kmという狭い範囲内で縄文前期前半から晩期末までの各時期にわたる遺跡が確認できることは、宮田川流域の縄文時代の様相を通時的に捉えるうえで極めて重要である。

この他に、小高川の支流である前川沿岸の低位段丘に立地する大富西畑遺跡では、中期後葉から末葉にかけての複式炉を持つ住居など12軒の竪穴住居が検出され、山間部における当該期の生活形態の一端を窺い知ることができる。また、今回調査を実施した大田和広畑遺跡では、常磐自動車道建設に伴い試掘調査がおこなわれ、縄文時代の土坑が検出されたことから開発予定地の一部が保存区域に設定されている。

(註1) キサゴと報告されているが、北原貝塚遺跡群等の調査状況からみてイボキサゴの可能性が高いと思われる。

表1 南相馬市小高区内の縄文遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	時期	遺構等の有無
1	中木戸遺跡	小高区羽倉字中木戸		
2	荻原遺跡	小高区羽倉字荻原・南沢・川久保	早期～前期	早期末の竪穴住居
3	大穴遺跡	小高区羽倉字君ヶ沢ほか	早～前期	
4	北嶋原花輪遺跡	小高区北嶋原字花輪	早期中葉、前期	
5	堤下遺跡	小高区北嶋原字堤下		
6	片草南原遺跡	小高区片草南原・一里壇		
7	片草貝塚	小高区片草金場台	前期	前期前半の貝層
8	上広畑遺跡	小高区小高字門前・上広畑		
9	東広畑A遺跡	小高区小高字東広畑	早期～	
10	館山遺跡	小高区大井字岩迫		
11	大井花輪遺跡	小高区大井字花輪・東平・松崎		
12	諏訪原遺跡	小高区塚原字諏訪原		
13	荒神前遺跡	小高区片草字荒神前		
14	元屋敷遺跡	小高区小谷字元屋敷	後期	
15	犬塚B遺跡	小高区大富字犬塚	早期	
16	犬塚C遺跡	小高区大富字犬塚	早期末	
17	犬塚A遺跡	小高区大富字犬塚	早期末	
18	板木沢遺跡	小高区大富字板木沢	早期末～前期初	
19	大富西畑遺跡	小高区大富字西畑・東畑・犬塚	早期末～後期初	中期後半～末の竪穴住居
20	玉ノ木平A遺跡	小高区吉名字玉ノ木平	早期	
21	玉ノ木平B遺跡	小高区吉名字玉ノ木平		
22	玉ノ木平C遺跡	小高区吉名字玉ノ木平	早期	
23	飯崎南原遺跡	小高区飯崎字南原	早期末～中期	
24	大和田広畑遺跡	小高区大和田字広畑	中期末～後期初	中期末～後期初頭の竪穴住居
25	北釘野遺跡	小高区金谷字北釘野		
26	一ノ沢遺跡	小高区小屋木字一ノ沢	前期～中期	
27	栗成沢遺跡	小高区上根沢字栗成沢	早期末～前期初	
28	四ツ栗遺跡	小高区川房字四ツ栗	前期	
29	鷹沢C遺跡	小高区上根沢字鷹沢		
30	仏供田遺跡	小高区上根沢字仏供田		
31	小谷津貝塚	小高区泉沢字小谷津	前期	時期不明の貝層
32	角部内南台遺跡(貝塚)	小高区角部内字南台	前期～中期	中期中葉?の貝層
33	藤右衛門屋敷遺跡	小高区神山字藤右衛門屋敷	早期末	
34	長畑遺跡	小高区神山字長畑	前期	
35	宮田遺跡(貝塚)	小高区上浦字宮田	前期～後期	前期前半の貝層
36	加賀後遺跡(貝塚)	小高区上浦字加賀後		前期前半の貝層
37	鹿島館遺跡	小高区行津字鹿島館		
38	浦尻貝塚	小高区浦尻字南台	早期～晩期	前期後半～後期前半の竪穴住居、後晩期の掘立柱建物、前期末～晩期中葉の貝層
39	北原貝塚遺跡群	小高区浦尻字北原	早期～前期	前期前半の遺構・貝層
40	磯坂遺跡	小高区浦尻字磯坂	中期末～晩期	晩期後半の遺物包含層

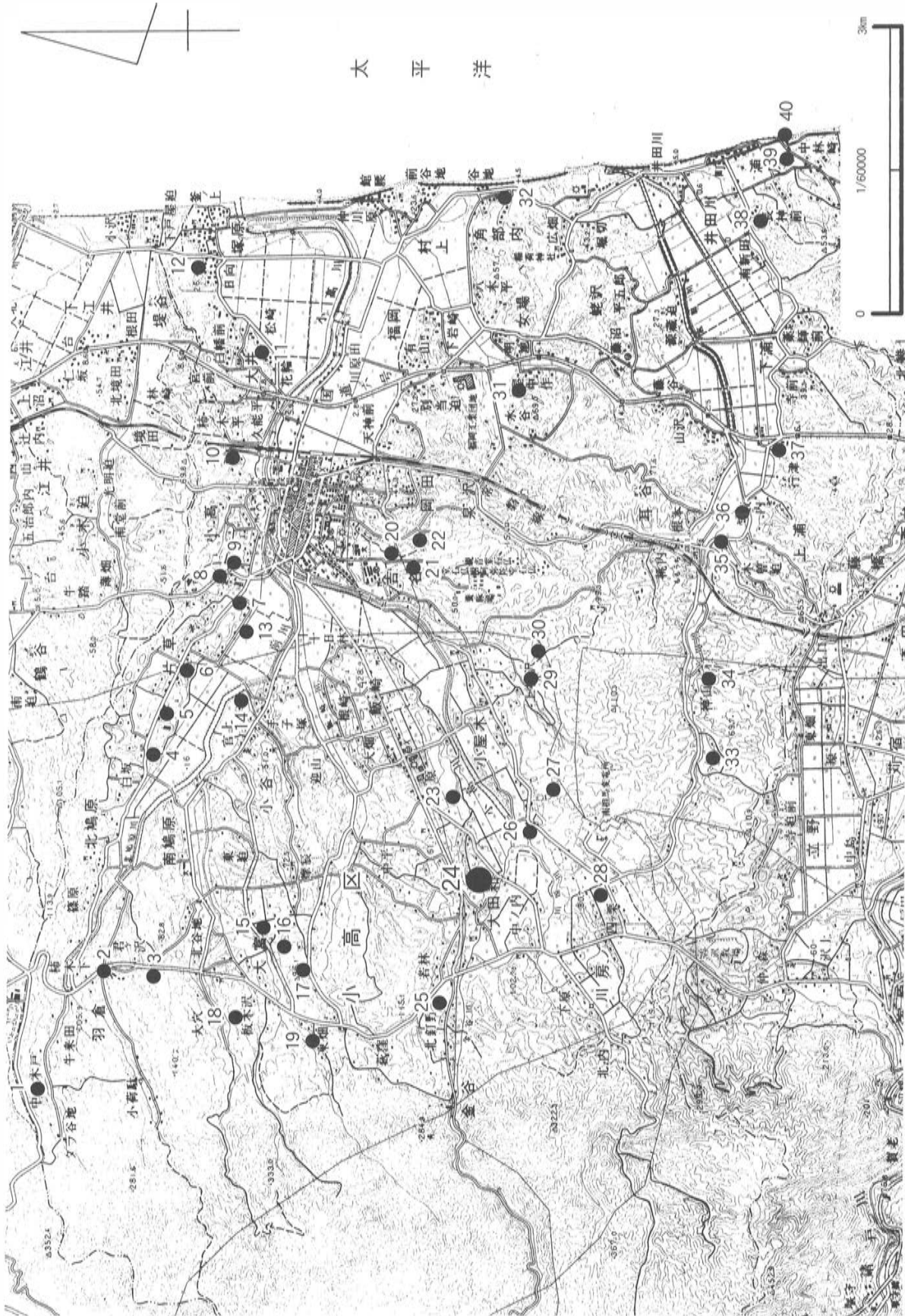


図3 南相馬市小高区内の縄文遺跡位置図

第Ⅱ章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

県道中ノ内・小高線道路改良工事に伴い平成17年7月8日に提出された「埋蔵文化財の有無について（協議）」に基づいて福島県相双建設事務所と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を実施した。本開発予定地には、周知の埋蔵文化財包蔵地である『大田和広畑遺跡』が所在していることから、事前に試掘調査による遺構・遺物の確認と、その結果による保存協議が必要である旨を口頭で回答した。

平成17年7月19日に2回目の協議をおこない、開発予定範囲・施工方法・着工予定時期等を確認した。同7月20日付で相双建設事務所長宛に埋蔵文化財の取り扱いについての文書を発送した。その後、数度の担当者間の協議を経て、平成17年11月14日から試掘調査に着手し、同12月7日に試掘調査を終了した。

試掘調査は、開発予定地の幅が約2mと狭いうえに、法面に面しているために掘削することが困難と判断されることから、開発予定地に隣接する民有地を中心に9箇所の調査区を設けて実施した。その結果、縄文時代後期前半と推定される遺物包含層ならびに遺物包含層を掘り込む埋設土器1基を検出した。

この試掘調査の成果に基づいて再度相双建設事務所と協議をおこない、工事による掘削が遺

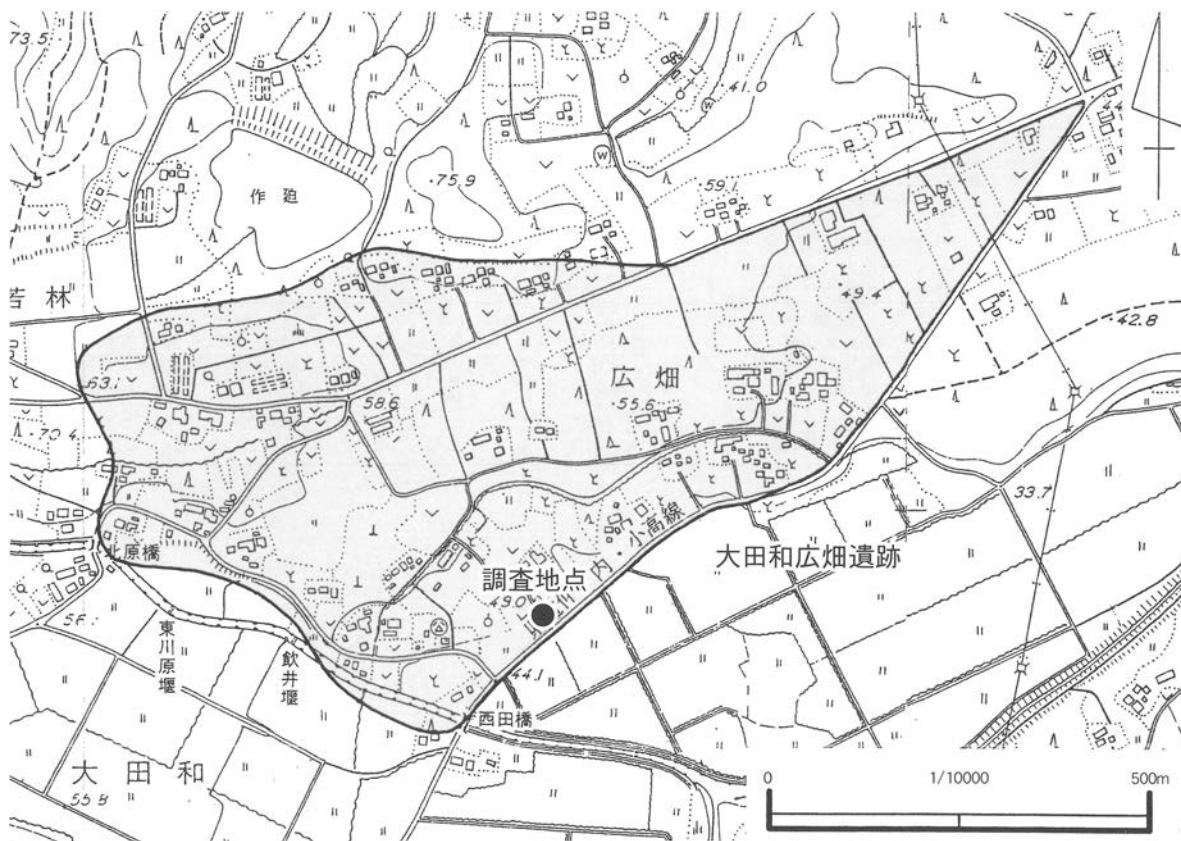


図4 調査地点位置図

構面に及ばず保護層が十分に確保できる開発箇所については、発掘調査を実施せず工事中の立会いで対応し、工事による遺跡の破壊が免れない開発箇所については、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。調査対象面積は、農道を含めた 130㎡ である。本調査の着手は、平成 18 年 1 月 10 日からとなった。

第 2 節 調査の方法

調査対象地内に生活道路として利用されている農道が所在していることから、農道を挟むかたちで調査区を 2 地点（A 地区・B 地区）に分けて調査を実施した。農道部分については、工事中の立会いで対応した。表土掘削は重機を用いておこない、遺構確認作業・精査作業等は人力で実施した。

記録図面については、A 地区については調査区を地形図に図示した。B 地区については、平面図は縮尺率 1/20 を基本として図化したが、遺構の細部や遺物の出土状況を記録する場合には縮尺率 1/10 で実測してより詳細な記録に努めた。調査区の位置については工事図面に図示した。断面図は縮尺率 1/20 で図化した。

記録写真については、35mm 判モノクロフィルム・カラーリバーサルフィルムを使用して随時撮影し、必要に応じてデジタルカメラを併用して撮影した。出土した遺物については、調査区・遺構・層位・遺物番号・日付を記入して取り上げた。

これらの遺物・実測図・記録写真については南相馬市教育委員会で整理保管している。

第 3 節 調査日誌

調査第 1 週（1 月 10 日～ 13 日）

A 地区は表土掘削・遺構確認を実施したが、遺構・遺物は確認されなかった。

B 地区は表土掘削・遺構確認を実施し、B 地区西側で遺物包含層と考えられる暗褐色砂質土（LⅢ B）を、中央から東側にかけて黒褐色土（LⅢ A）を検出した。黒褐色土掘削後、B 地区東側で竪穴住居跡 2 軒（SI01・02）を確認した。

調査第 2 週（1 月 16 日～ 20 日）

A 地区は全体写真・断面写真・平面図作成・レベリングをおこない調査を終了した。

B 地区はカクラン掘削ならびに遺構確認を実施後、黒褐色土の掘り下げを実施し、調査区の一部で基盤層と考えられるローム（LⅣ A）を確認した。また、SI02 の覆土を掘り込んで構築されている複式炉（SI06 炉）等の遺構を検出した。遺構確認状況から、中央より東側に 6 軒以上の竪穴住居跡（SI01～06）が分布すると考えられる。

調査第 3 週（1 月 23 日～ 27 日）

SI01・03・05、SI06 炉の精査および B 地区の西側に堆積する暗褐色砂質土の掘り下げを実施した。

調査第 4 週（1 月 30 日～ 2 月 3 日）

遺構が多数検出されたことから福島県相双建設事務所および施工業者と再度協議を実施し、

2月末日まで調査期間を延長することとなった。

SI01～05、SI06 炉の精査を実施した。SI04の一部で貼床面および貼床を切る黒色土の土坑（SK01）を検出した。

遺構確認状況写真・B地点西側北壁断面写真の撮影、北壁断面図の作成をおこなった。

調査第5週（2月6日～10日）

SI01の精査を実施し、一部で床面を検出した。床面からは底部を欠損した浅鉢が伏せて押しつぶされたような状態で出土した。

SI05断面写真・完掘写真撮影、平面図・断面図作成、レベリングをおこなった。

SI06 炉断面図・微細図作成、断面写真・平面写真撮影を実施した。

調査区西側でSI08を検出した。

SM01・02 検出状況写真撮影、SM01 微細図作成をおこなった。SM02の精査をおこなったところ、平面では焼土は確認されなかったが、断面で焼土の堆積が確認されたことから炉の埋設土器と考え、周囲に住居跡（SI09）が構築されていたと判断した。以降、SM01をSI09内SM01とし、SM02をSI09 炉とする。

SK01・02を半裁した。

調査第6週（2月13日～17日）

SI01の全面で床面検出した。床面でピット2基（P1・P2）を確認後、調査を実施した。床面から出土した浅鉢の微細図を作成した。

SI02の精査を実施後、床面を検出し、ピット3基（P1～P3）を確認した。

SI04完掘写真撮影をおこなった。

SI06 炉断割り後に断面図に掘方断面を追加した。

SK01・02 断面写真・完掘写真撮影・断面図・平面図作成、レベリングを実施した。

調査第7週（2月20日～24日）

SI01～03、SI09内SM01 断面写真撮影、断面図作成をおこなった。

SI01～03・05～09 完掘写真撮影、平面図作成を実施した。

SI04 断面写真撮影、平面図作成、レベリングを実施後に貼床面を掘削して遺構確認をおこなった住居跡（SI07）を検出した。SI07の精査を実施し、2条の周溝ならびにピット群を検出した。P1 半裁・断面図作成後、SI07を完掘した。

調査区全景写真撮影をおこなった。

調査第8週（2月27日・28日）

SI04・07～09 断面図を作成した。

SI03 炉・09 炉、SI04内SM01、SI09内SM01の断割り後に断面図に掘方の断面追加し、各遺構の遺物上げを実施した。

第三章 調査内容

第1節 調査区について

調査対象地は、広大な面積をもつ大田和広畑遺跡の南端、南向きの緩斜面に位置する。現地表面の標高は44～45mを測る。調査対象地内には、生活道路として利用されている農道が南北に縦走していることから、農道を挟むかたちで調査区を東西の2地点に分けて設定した。農道の東側に設定した2×7mの調査区をA地区とし、A地区の西側約10mの地点に設定した2×48mの調査区をB地区とした。

A地区では、現地表面から深さ約1.5mの地点（標高約42.8m）で基盤層と考えられる黄褐色砂質土が確認された。黄褐色砂質土は西から東に向かって傾斜し、約30cmの高低差をもって堆積している。A地区内からは明確な遺構・遺物は確認されなかった。後述するB地区ならびに約12m東側に位置する試掘調査時に設定した8トレンチでローム（LⅣ）を確認していることから、本来はロームが堆積していたと推測されるが、B地区東端ならびに8トレンチのローム検出レベルである標高約44.3mより約1.2～1.5m低いことから、耕作等による後世の掘削を受けたと考えられる。

B地区では、現地表面から深さ約30～80cmの地点で縄文中期末から後期前葉にかけての遺構・遺物包含層が確認された。以下、B地区の調査内容について記述していく。

なお、調査対象地内の農道部分については工事中に立会いをおこなったが、明確な遺構・遺物は確認されなかった。



図5 調査区位置図

第2節 基本土層

調査区断面・遺構断面等から図6を作成し、B地区における基本土層を以下のとおりに大別した。後述する試掘調査で確認されたLⅡとした遺物包含層である黒色土が、B地区では確認されなかったためLⅡを用いていない。

- LⅠ：表土。耕作土ならびに後世の掘り込み等の堆積土を一括した。黒色を基調としているが、土色・土質は地点によって多少異なる。
- LⅢA：黒褐色土。調査区中央から東部にかけて堆積する縄文中期後葉～後期前葉の遺物が出土する遺物包含層である。遺構の上位に約26mの範囲で層厚10～20cmをもって堆積している。調査区東端では堆積が確認されない。
- LⅢB：暗褐色砂質土。調査区西側に約7mの範囲で層厚10～30cmをもって堆積する縄文中期後葉～後期前葉の遺物が出土する遺物包含層である。調査区中央より東側では堆積が確認されない。LⅢAならびに遺構との重複関係がないため、前後関係は不明である。
- LⅢC：暗褐色土。調査区中央周辺に約9mの範囲で層厚10～20cmをもって堆積する縄文中期後葉～末の遺物が出土する遺物包含層である。LⅢAならびに遺構の下位に堆積する。
- LⅢD：暗褐色砂質土。LⅢB下に約2.6mの範囲に層厚10cm前後をもって堆積する。土色・土質もLⅢBに類似するが、遺物を含まず、LⅣCへ移行する漸移的な層である。
- LⅣA：黄褐色土（ハードローム）。調査区中央および東側の遺構の多くは、この層の上面で確認される。調査西側では堆積が確認されない。
- LⅣB：黄褐色砂質土（砂質ローム）。LⅣAの下位に堆積している。LⅣAの堆積していない調査区西側では、遺構はこの層の上面で確認される。
- LⅣC：黄褐色砂質土（砂質ローム）。LⅣBの下位に堆積し、土色・土質が類似するが、レキを多量に含む。一部の遺構はこの層まで掘り込んでいる。
- LⅣAは、調査区東端では標高44.3m前後、SI04東側では標高44.1m前後で検出され、調査区東端と中央部付近では約20cm程度の高低差をもって堆積している。LⅣBは、調査区ほぼ中央でLⅣAの下位、標高43.8m前後の地点で、LⅣCは、調査区西側で標高43.7m前後の地点で確認される。

第3節 遺構・遺物

B地区では、縄文中期末から後期前葉にかけての竪穴住居跡9軒ならびに土坑2基・遺物包含層が検出された。これらは、調査区内のほぼ全域にわたり確認されている。竪穴住居跡ならびに土坑はすべてにおいて重複関係が認められることから、集中的な分布状況を示していると言える。調査区の幅が約2mという狭さであるため遺構の全容をとらえられたものがないことから制約はあるが、以下に概要を述べていく。

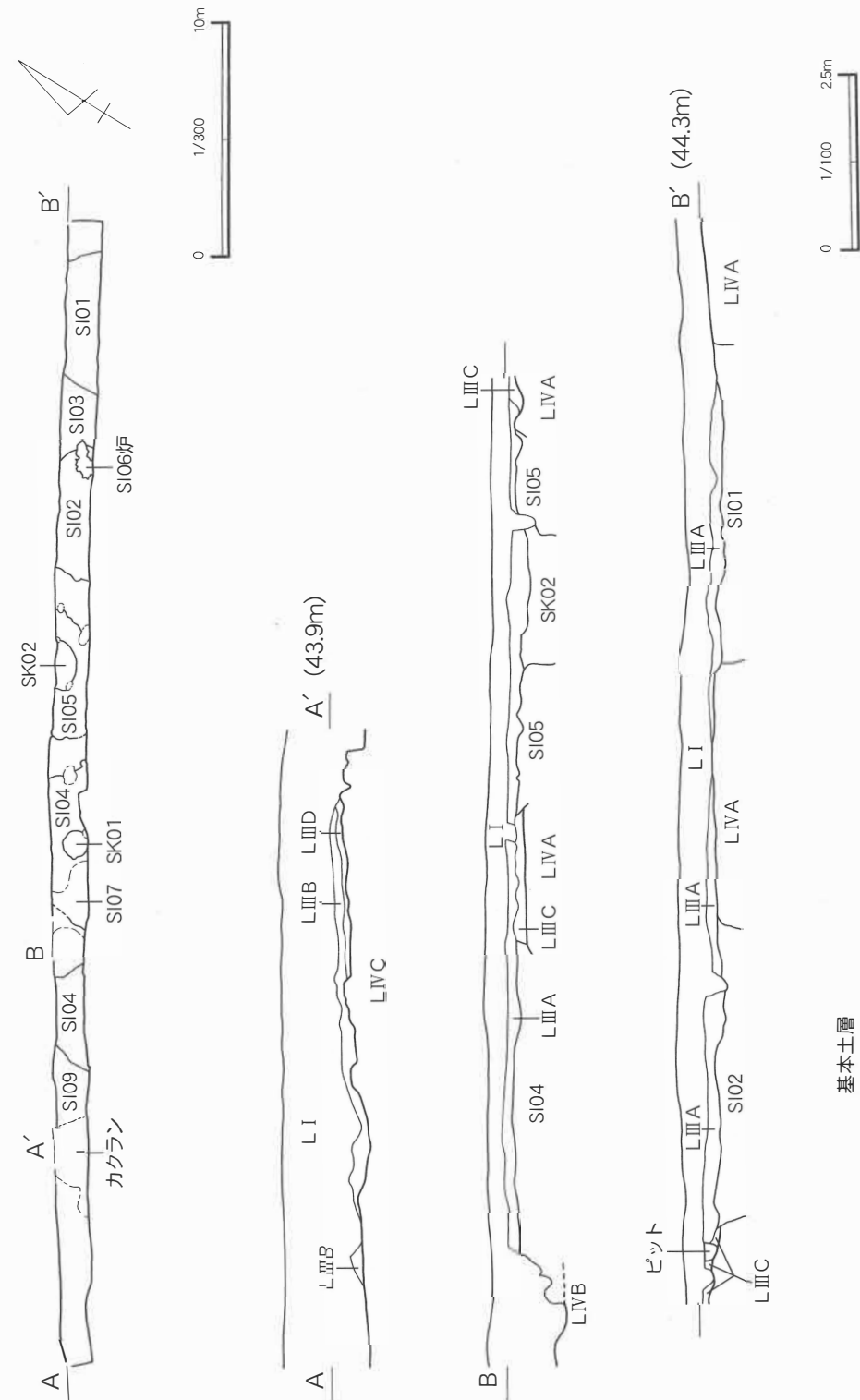


図6 基本土層

基本土層

土層	土質	性状	備考
L I	表土	粘性中	(遺物包含層)
L III A	黒褐色土	粘性中	
L III B	暗褐色砂質土	粘性弱	(遺物包含層)
L III C	暗褐色土	粘性中	(遺物包含層)
L III D	暗褐色砂質土	粘性弱	(遺物包含層)
L IV A	黄褐色土	(ハードローム)	粘性中
L IV B	黄褐色砂質土	(砂質ローム)	粘性中
L IV C	黄褐色砂質土	(砂質ローム)	粘性弱

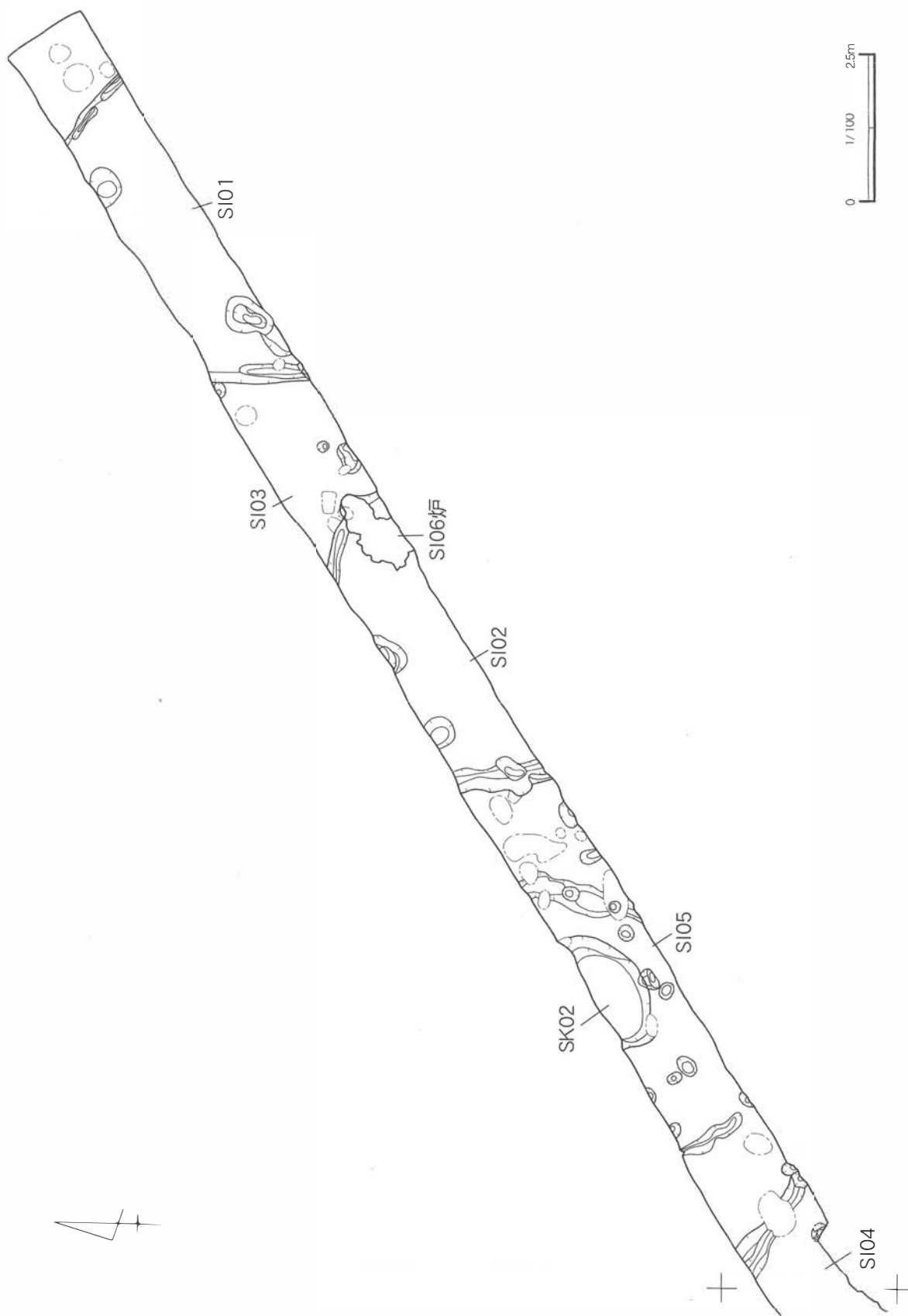


图7 B地区全体图①

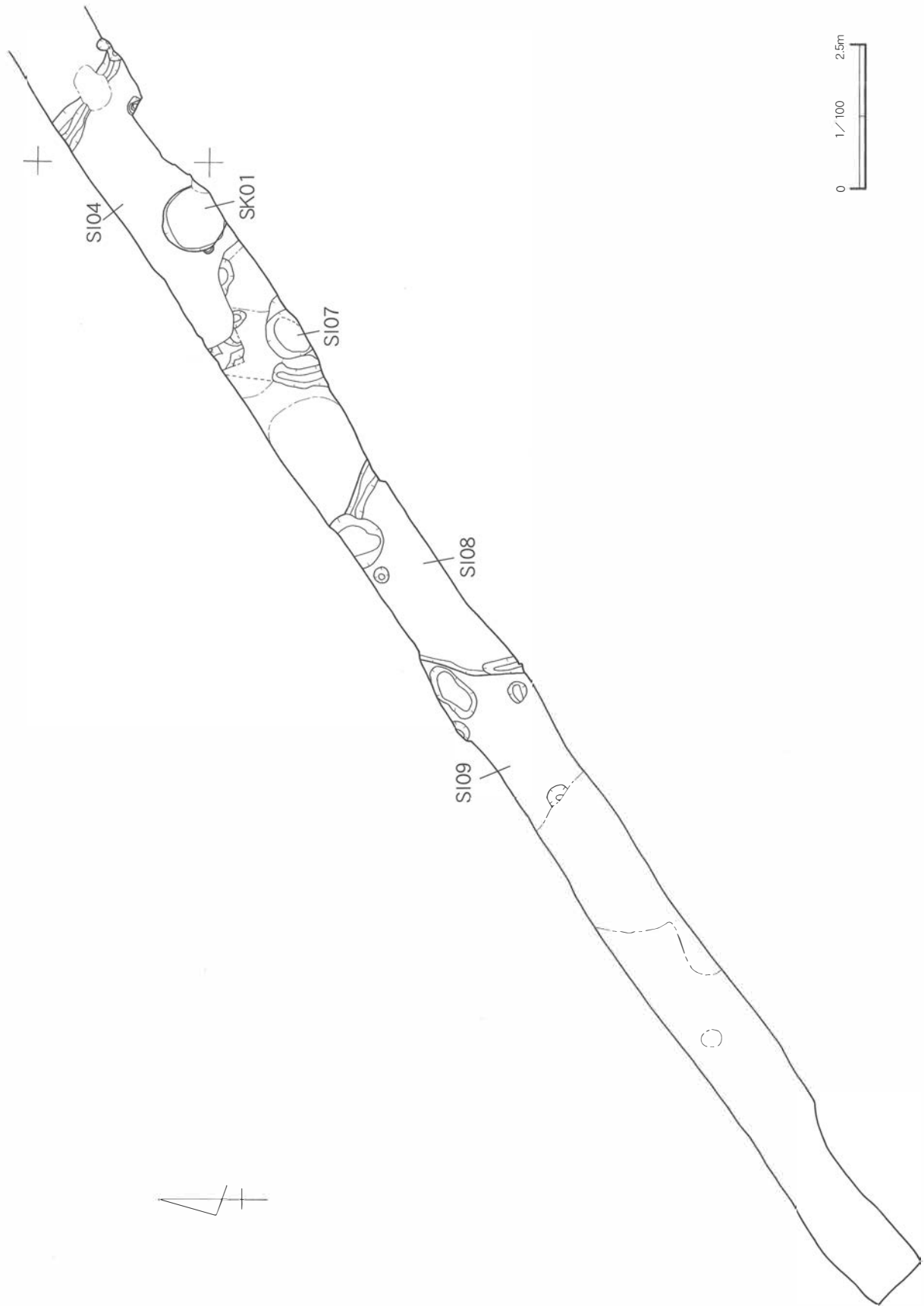


図8 B地区全体図②

第1項 土器分類

遺構内・遺物包含層内をはじめ B 地区からは多種多様の土器が大量に出土した。これらの出土土器については、時期別に I～V 群までの「群」で大別し、土器型式ごとに「類」を用いて下記のように分類した。

I 群土器 縄文中期前葉の土器群

II 群土器 縄文中期中葉の土器群

III 群土器 縄文中期後葉～末の土器群

III-1 類 大木 9 式

III-2 類 大木 10 式

III-3 類 1・2 類に併行する異系統の土器

IV 群土器 縄文後期前葉～中葉の土器群

IV-1 類 綱取 I 式（綱取 I 式直前段階の土器を含む）

IV-2 類 綱取 II 式

IV-3 類 堀之内 II 式

IV-4 類 1・2 類に併行する異系統の土器

V 類土器 III・IV 群土器に伴う粗製土器

第2項 竪穴住居跡

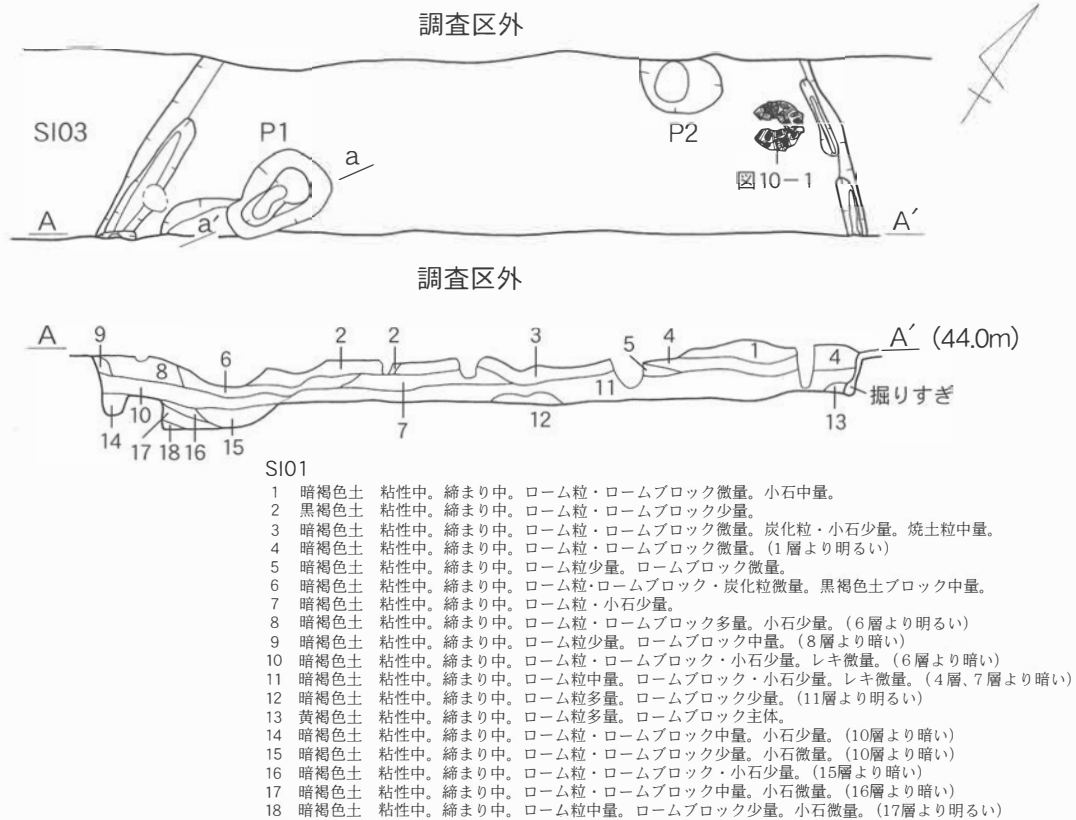
1号住居跡 (SI01)

遺 構 (図9、図版3)

調査区東側で検出された。検出面は L IV A で、後述する SI03 と遺構西側で重複する。調査区の北壁・南壁断面ならびに平面の観察をおこなったが、SI03 の床面・周溝等の住居の痕跡が本住居跡の堆積土の上位に確認されないことから、本住居跡の方が新しく、構築順序は SI03 → SI01 と判断される。

平面プランは大部分が調査区外に延びているため不明であるが、検出部分から推測すると円形に近い形状と考えられる。検出部での最大径は 6.1m である。堆積土は暗褐色土を基調としており、埋土の堆積等が確認されないことから自然堆積と考えられる。床面は明確な貼床ではなく、レキをやや多く含む L IV A を床とし、ほぼ平坦で全体的に締まりがある。断続的ではあるが、東西の壁際に沿って周溝が認められた。東側の周溝は掘り込みが浅く、幅 15cm、深さ 5cm で、西側の周溝は幅 25cm、深さ 15cm である。壁高は、西壁で周溝の底部から 48cm で垂直気味に立ち上がる。

本住居からはピットを 2 基 (P1・P2) 確認したが、P2 は壁際で検出したため完掘できなかった。P1 は長軸 86cm、短軸 59cm、深さ 60cm で段掘りになっている。P2 は、長軸 69cm 以上、深さ 53cm である。径が大きく深さもあることから P1・P2 は支柱穴と推測される。炉跡等の施設は検出されなかった。



SI01P1

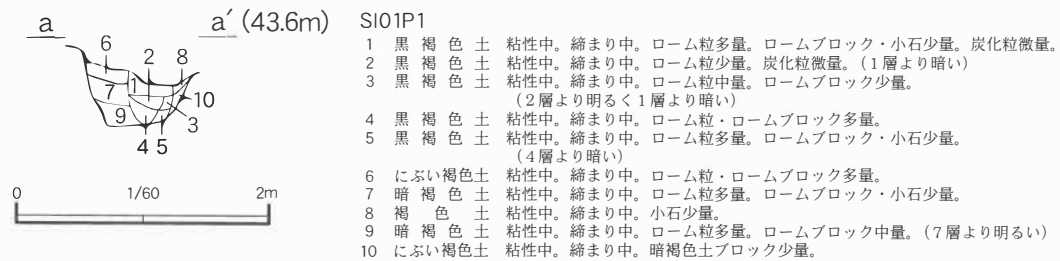


図9 1号住居跡実測図

遺物 (図10・11、図版12)

1号住居跡からは縄文土器204点、磨石1点が出土している。図10-1は底部を欠損した浅鉢で、床面から臥せた状態で押しつぶされたように出土した。その他の遺物については、まとまって出土する状況は確認されず、堆積土・床面から散在的な出土が認められた。遺物出土地点の堆積土上層は、概ね図9SI01の1～9に相当する。

図10-1は外傾しながら立ち上がり口縁部が強く内傾する器形で、口縁部および胴部に4単位の突起が付けられている。胴部の突起を基点にして隆沈線により双頭渦巻文が描出され、双頭渦巻文の間および下部には隆沈線により楕円形区画が施されている。双頭渦巻文・楕円形区画内には縄文が充填されている。Ⅲ-2類である。

図11-1はやや内湾する口縁で、3は直立的に立ち上がる口縁である。1・3はU字文状の沈線区画が認められる。2は隆線縁取られた横位区画が施され、隆線に沿って沈線が巡っている。4・6は帯状の沈線区画が、5・7は沈線で横位に展開する曲線的モチーフが施されてい

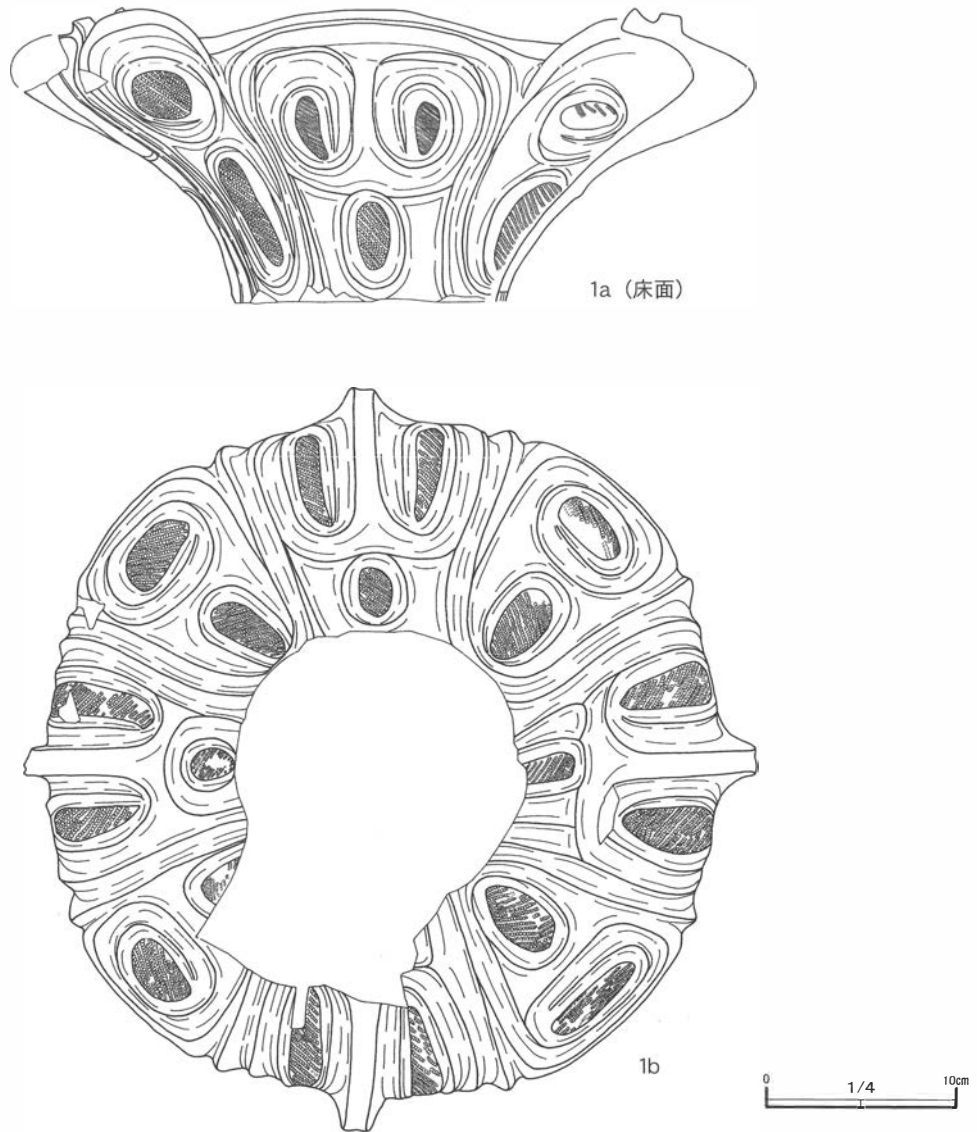


図10 1号住居跡出土遺物①

る。8は櫛描文が、9は縦位燃糸が施文されている。10は磨石で、全面に磨跡が認められる。石材はヒン岩である。

図11-3・6はⅢ-1類、1・2・7はⅢ-2類、4・5はⅢ類、8・9はⅤ類である。

まとめ

本住居跡は、床面から図10-1、図11-1、ピット2から図10-2が出土していることから、大木10式期に構築されたと考えられる。

2号住居跡 (SI02)

遺 構 (図12、図版4)

SI03の西側に位置する。検出面はLIV Aで、後述するSI03・06炉と東側で重複する。SI06炉は本住居跡の堆積土を切って構築されている。また、調査区の南壁断面を観察すると、本住居跡の堆積土がSI03の堆積土を切っていることが確認される。これらの観察から重複関係を整

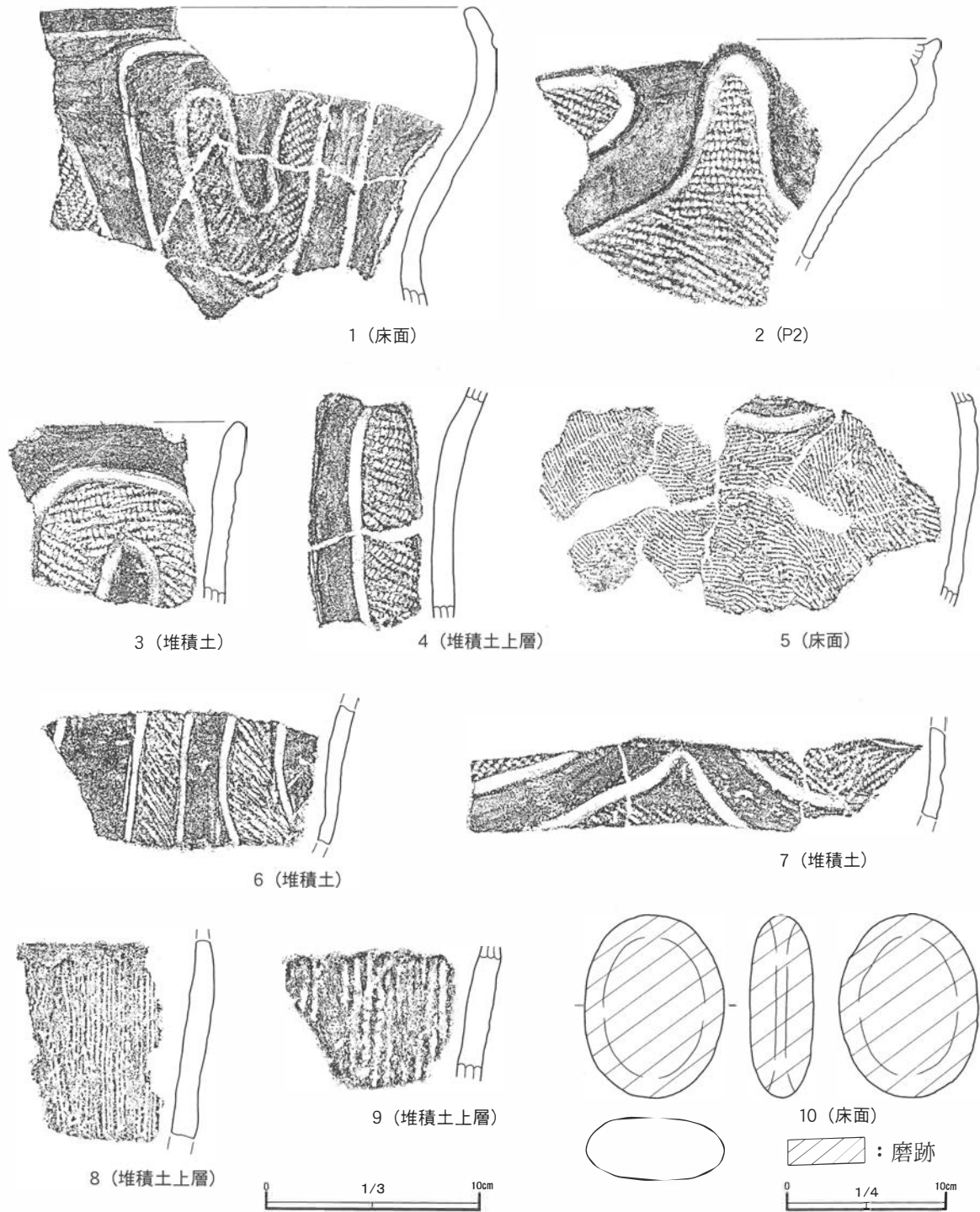


図11 1号住居跡出土遺物②

理すると、構築時期が古い順から SI03 → SI02 → SI06 炉となる。

平面プランは大部分が調査区外に延びているため不明であるが、検出部分から推測すると円形に近い形状と考えられる。検出部分での最大径は 5.8m である。堆積土は上層に黒褐色土が堆積し、下層には暗褐色土が堆積している。これらの堆積土は、レンズ状堆積を示していることから自然堆積と考えられる。床面は明確な貼床ではなく、レキをやや多く含む L V A を床とし、ほぼ平坦で全体的に締まりがある。東西の壁際に沿って周溝が認められたが、東側の周溝

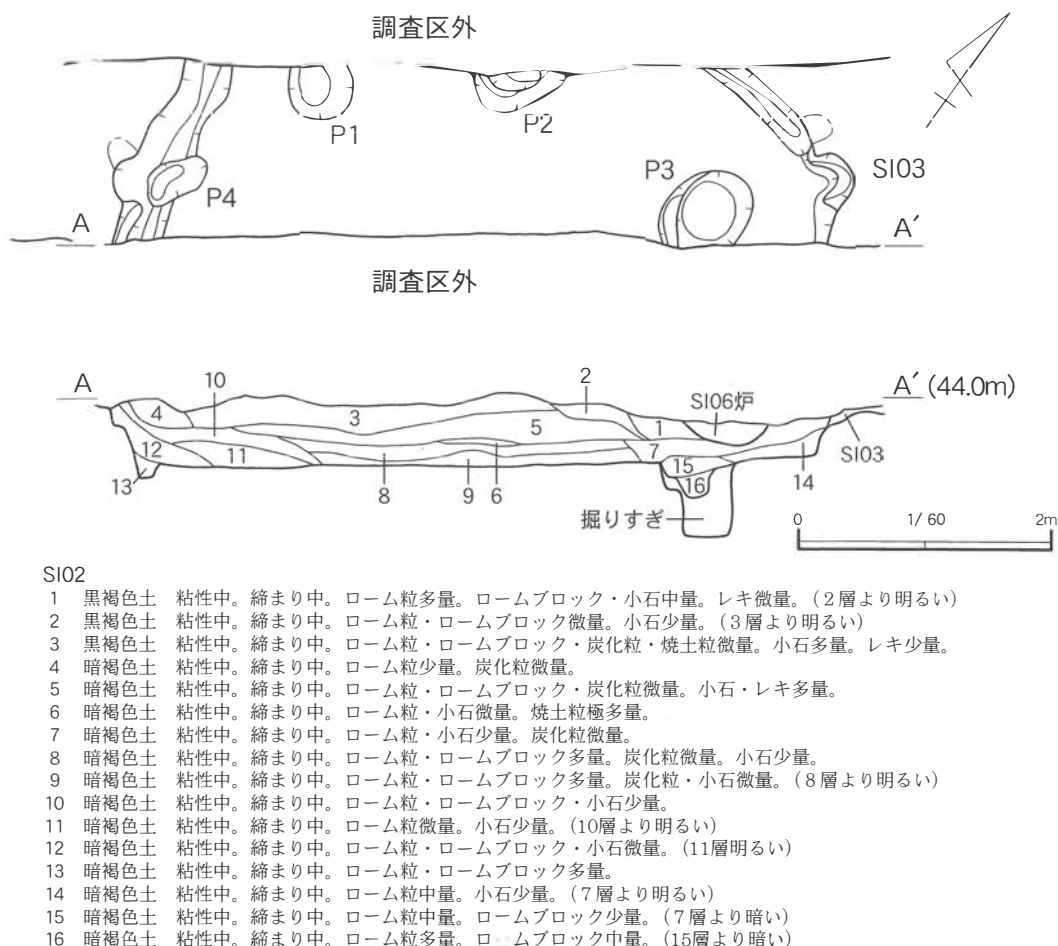


図12 2号住居跡実測図

は南部で途切れている。壁高は西側で周溝底部から 55cm でやや緩やかに立ち上がる。

本住居からはピットを 4 基 (P1 ~ P4) 確認した。P1 ~ P3 は壁際で確認したため完掘できなかった。P1 は長軸 54cm 以上、深さ 59cm、P2 は長軸 72cm 以上、深さ 51cm、P3 は長軸 74cm 以上、深さ 59cm、P4 は長軸 50cm、短軸 29cm、深さ 16cm である。P1 ~ P3 とも径が大きく、深さもあることから主柱穴と推測される。P1 ~ P3 の組み合わせから 5 本柱もしくは 4 本以上の主柱穴をもつ住居構造と推定される。炉等の施設は検出されなかった。

遺物 (図 13・14、図版 12)

2 号住居跡からは縄文土器 214 点、磨石 1 点、土器片円盤 1 点が出土した。出土遺物についてはまとめて出土する状況は確認されず、堆積土・床面から散在的な出土が認められた。

図 13 - 1 は外反しながら立ち上がり頸部で最大径をもち、内湾して口縁部に至る。口縁は 4 単位の緩やかな波状を呈する。口縁部文様帯には 1 条の沈線が施され、その沈線下位には楕円形区画が巡る。胴部には波状・U 字状の区画が沈線で描出されている。胴部下半には 1 条の波状沈線が巡らされている。4・5 は口縁部資料である。4 は口唇部に 1 条、口縁部に 2 条の沈線が巡り、その下に波状沈線が施される。5 は隆帯下に刺突が見られる。6 は沈線で、7 は断面三角形の隆線で U 字状区画が施されている。8 は口縁部無文帯を沈線で区画し、沈線の下位には縦位撚糸を施文している。9 は隆線で曲線状のモチーフを描いており、内外面が赤彩されてい

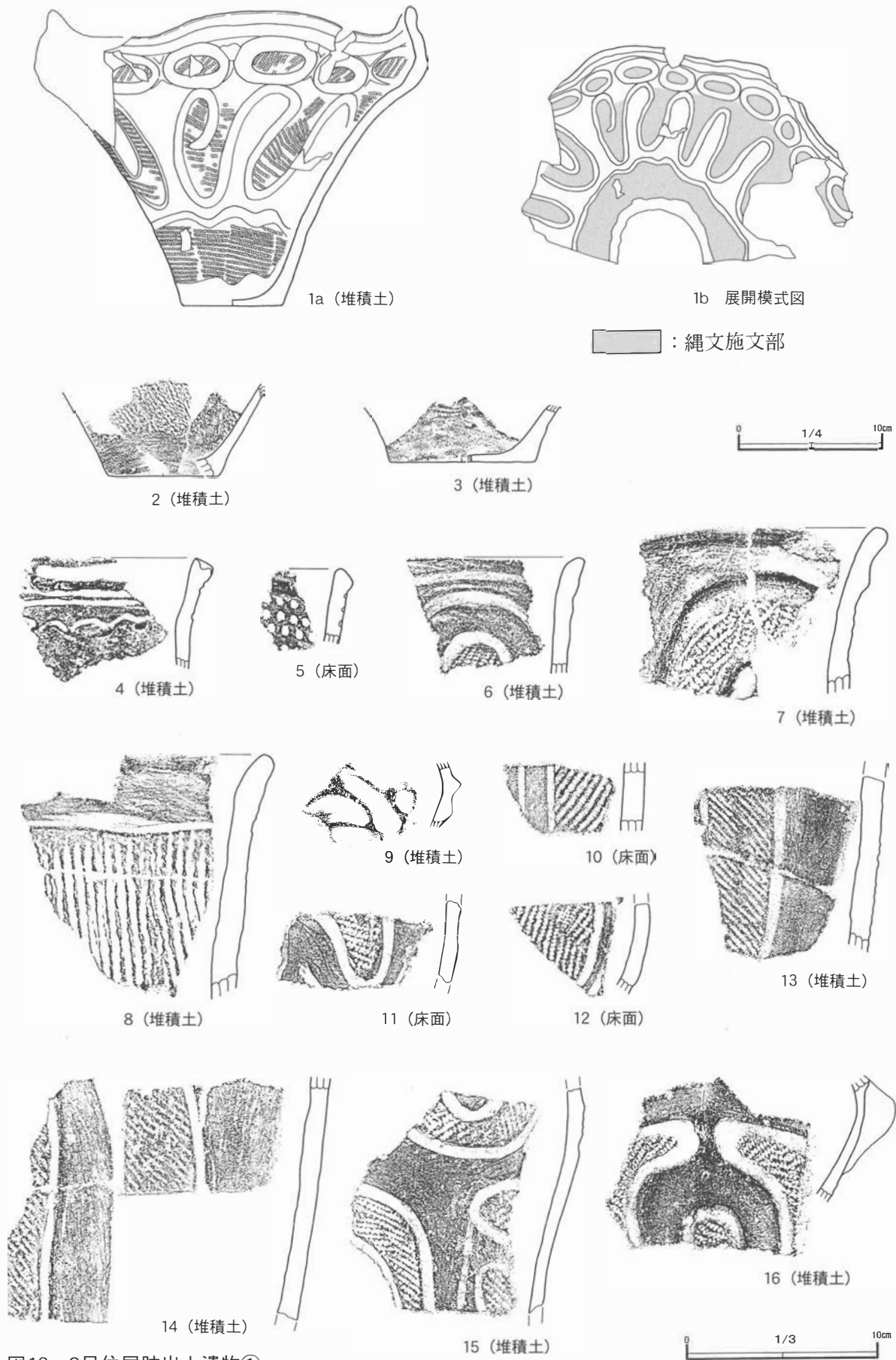


图13 2号住居跡出土遺物①

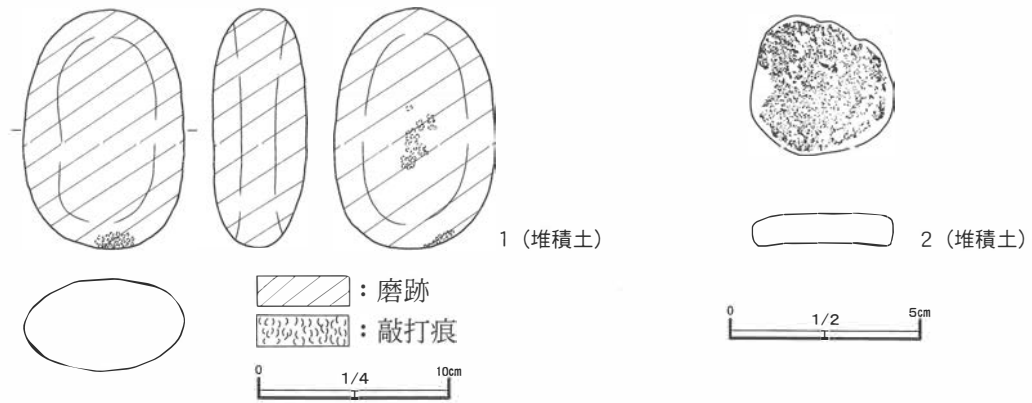


図14 2号住居跡出土遺物②

る。10・13・14は沈線による帯状区画が見られる。11・15は沈線で曲線状モチーフが描出されている。12は2条の沈線が垂下している。16は小突起が付され、隆帯ならびに隆帯に沿う沈線でU字状区画が施されている。

図13-4はI群、12はII-2類、1・5～7・9・11・15・16はIII-2類、10・13・14はIII群、2・3・8はV群である。

図14-1は全面に磨跡が認められる磨石で、敲打痕も観察される。石材は花崗斑岩である。2は無文の胴部破片を用いた上器片円盤である。

ま と め

本住居跡は、堆積土から大木10式の完形土器である図13-1が出土しており、他にも大木10式期所産の土器が多く出土することから、大木10式期に構築されたと考えられる。

3号住居跡 (SI03)

遺 構 (図15、図版5)

SI01の西側、SI02の東側で検出された。本住居跡は東側でSI01に、西側でSI02に切られているため掘込面が確認できなかったが、SI01・02のプランの外側で複式炉が検出されたことから、複式炉の周囲には住居が構築されていたと判断した。

堆積土は、暗褐色土であり、10cm前後の層厚をもって堆積している。床面は明確な貼床ではなく、LIV Aを床とし、北から南に向かい若干傾斜しており、全体的に締まりがある。

本住居からはピットを3基 (P1～P3) 確認した。P1・P3は壁際で検出したため完掘できなかった。P1は他のピットに比べ、やや大型で長軸52cm、深さ23cmを測る。P1～P3が柱穴であったかについては判断できない。

複式炉は長軸91cm、短軸68cmを測る楕円形に近い平面形を呈する。長軸方向は北東-南西であり、北東から土器埋設部・石組部の順に配される。前庭部は確認されなかった。土器埋設部には1個体の深鉢形土器が正位の状態で埋められていた。埋設土器内部には炭化物・焼土粒を若干含む黒色土 (図15 SI03 炉 1・2) が堆積していた。石組部は壊されており、石組部を構成していたと思われる10～20cm前後のレキが数個残されていた。これらのレキの石質は花崗閃緑岩・細粒花崗岩等である。床面から石組部の底面までの深さは10cmである。土器埋設部は熱を受けた痕跡は確認できなかったが、石組部に残されたレキについては一部で熱

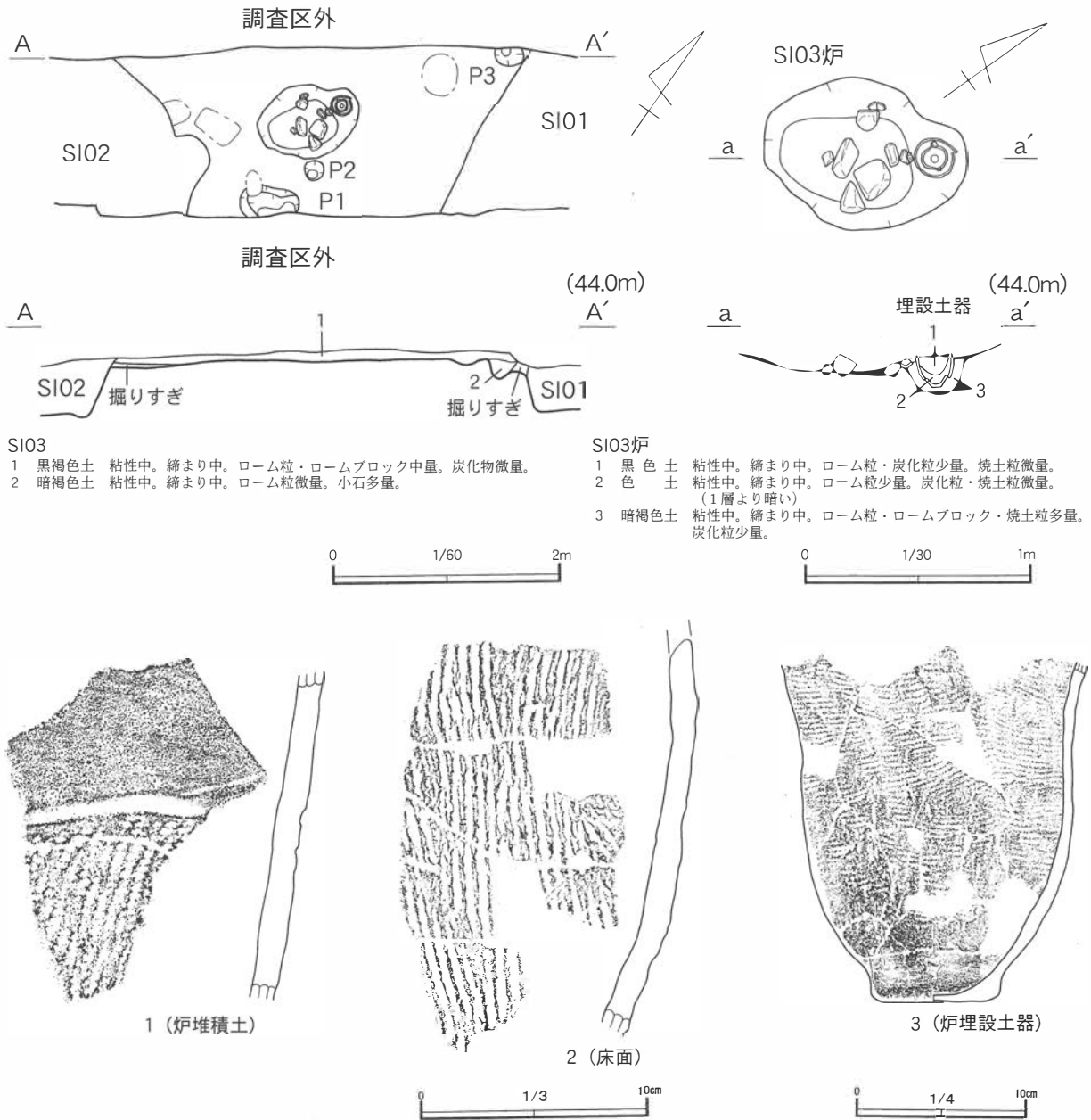


図15 3号住居跡実測図・出土遺物

を受けた痕跡が認められた。遺存状態がよくないため全容は不明であるが、SI03の堆積土の下位で複式炉が確認されたことから、複式炉は住居廃絶に伴い破壊されたと推測される。

遺物 (図15、図版12)

3号住居跡からは縄文土器11点が出土した。出土遺物についてはまとまって出土する状況は確認されず、床面・炉等から散在的な出土が認められる。

図15-1は口縁を沈線で区画している。2は縦位撚糸が施文されている。3は炉埋設土器である。胴部上半で外反する器形で、LR縄文が施されている。図15-1~3はV類である。

まとめ

本住居跡は、大木10式期に構築されたと推測される1号・2号住居跡に切られていることから、大木10式期以前に構築されたと考えられる。

4号住居跡 (SI04)

遺 構 (図 16、図版 6)

後述する SI05 の西側に位置する。検出面は L IV A であるが、北壁で確認する L III C からの掘り込みが確認できる。SI07 の上位に構築され、SK01 に切られている。重複関係を整理すると、構築順序は古い順から SI07 → SI04 → SK01 となる。西側でカクランにより壊されているため、平面プラン・規模は不明である。

堆積土は黒褐色土を主体としており、堆積土の主体が暗褐色土の他の住居と比較すると明確な違いが認められる。堆積土には、埋土の堆積等が観察されないことから自然堆積と考えられる。住居の東側では L IV A を床面とし、西側ではロームブロックを多量に含む暗褐色土 (図 16 SI04 l 11) で貼床面を構成している。床面は全体的に締まりがあるが、東から西に向かって若干傾斜している。住居東側では周溝を確認した。周溝はカクランより北側では住居の壁からやや離れて巡っている。L III C から床面までの掘り込みの深さは 15cm で、やや緩やかに立ち上がっている。

本住居からはピットを 3 基 (P1 ~ P3) 確認した。すべて壁際での検出であったため完掘できなかった。P3 は周溝の外側で確認されたが、堆積土が本住居跡の堆積土に極めて類似して

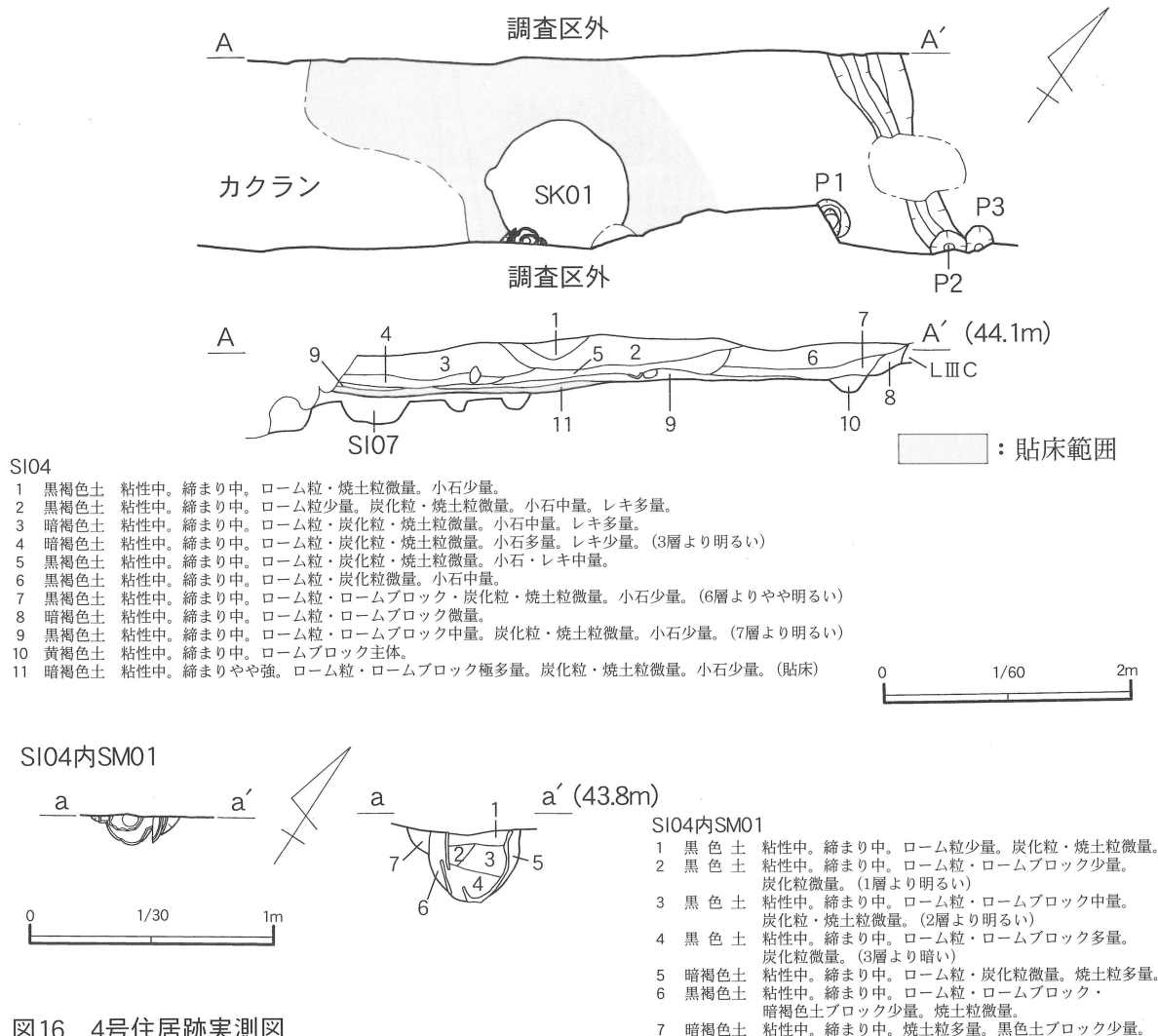


図 16 4号住居跡実測図

いることから、本住居に伴うと判断した。P1は、長軸34cm以上、深さ51cmを測る小型のピットであるが、深さがあることから支柱穴の可能性も考えられる。

南壁際で埋設土器(SI04内SM01)を検出した。南壁断面で確認したところ、土器はSI04の貼床面を掘り込んで埋設されていることが確認されたが、SK01に切られているため詳細については言及できない。

遺物(図17～19、図版13)

4号住居跡からは縄文土器759点、土器片円盤1点が出土した。他の住居跡と比較すると多量の縄文土器が出土しているが、図16 SI04 l 4～6からの出土土器が特に多いと言える。遺物の出土地点の堆積土上層は概ね図16 SI04 l 1～3に、中層はl 4～6に、下層はl 7～10に相当する。

図17-1・2は直線的に立ち上がる器形である。1は口縁を沈線区画し、磨消縄文による蕨手文・列点状沈線を施文している。2は口縁に小突起が付され、貫通孔・盲孔が施されている。口縁部を沈線で区画し、胴部には曲線状のモチーフを磨消縄文で描出している。3は蛇行沈線が垂下している。4は埋設土器である。胴部中央が膨らみ、一旦括れ、胴部上半に向かい直線的に立ち上がる器形で、LR縄文が施されている。

図17-1・2はIV-2類、3はIV群、4・5はV群である。

図18-1～3は内湾する口縁部である。1は隆沈線で、2は隆帯で渦巻文が描出されている。3は沈線による楕円形区画が施されている。4は波状口縁で、楕円形・三角形・台形状の区画が、5は三角形の区画が施され、刺突ならびに縄文が充填されている。6は刺突が施されている隆帯で、7は隆帯で口縁部無文帯を区画している。9は口縁部にT字状の区画が、11は口縁部に盲孔・三角状の区画が認められる。10は注口土器で貫通孔・両端に盲孔を持つU字状の沈線が、12は貫通孔・盲孔が施されている。13・14は口縁部を沈線で区画している。15は櫛描文が施文されている。

図18-1はII群、2・3はIII-1類、4～7・9はIV-1類、10・11はIV-2類、8・12はIV群、13～15はV群である。

図19-1はカマボコ状隆線でクランク状文が描かれている。2・4は断面三角形の隆線により曲線状のモチーフが、3は沈線により帯状区画が施されている。5は半円状・帯状に区画され、刺突ならびに縄文が充填されている。6～9は曲線状のモチーフを磨消縄文で描出し、6・7には盲孔が施されている。10は沈線が、11は沈線・列点状沈線が垂下している。12は底部に網代痕が認められる。14は土器片円盤でRL縄文が施された胴部破片が用いられている。

図19-1はII群、2・4はIII-2類、3はIII群、5はIV-1類、6～9はIV-2類、10・11はIV群、12・13はV群である。

まとめ

堆積土中層(図16 SI04 l 4～6)を中心に大型破片を含む綱取Ⅱ式の土器が多量に出土しており、本住居跡は綱取Ⅱ式期には廃棄され堆積土の流入が始まっていたと推測されることから、構築時期は綱取Ⅱ式以前と考えられる。

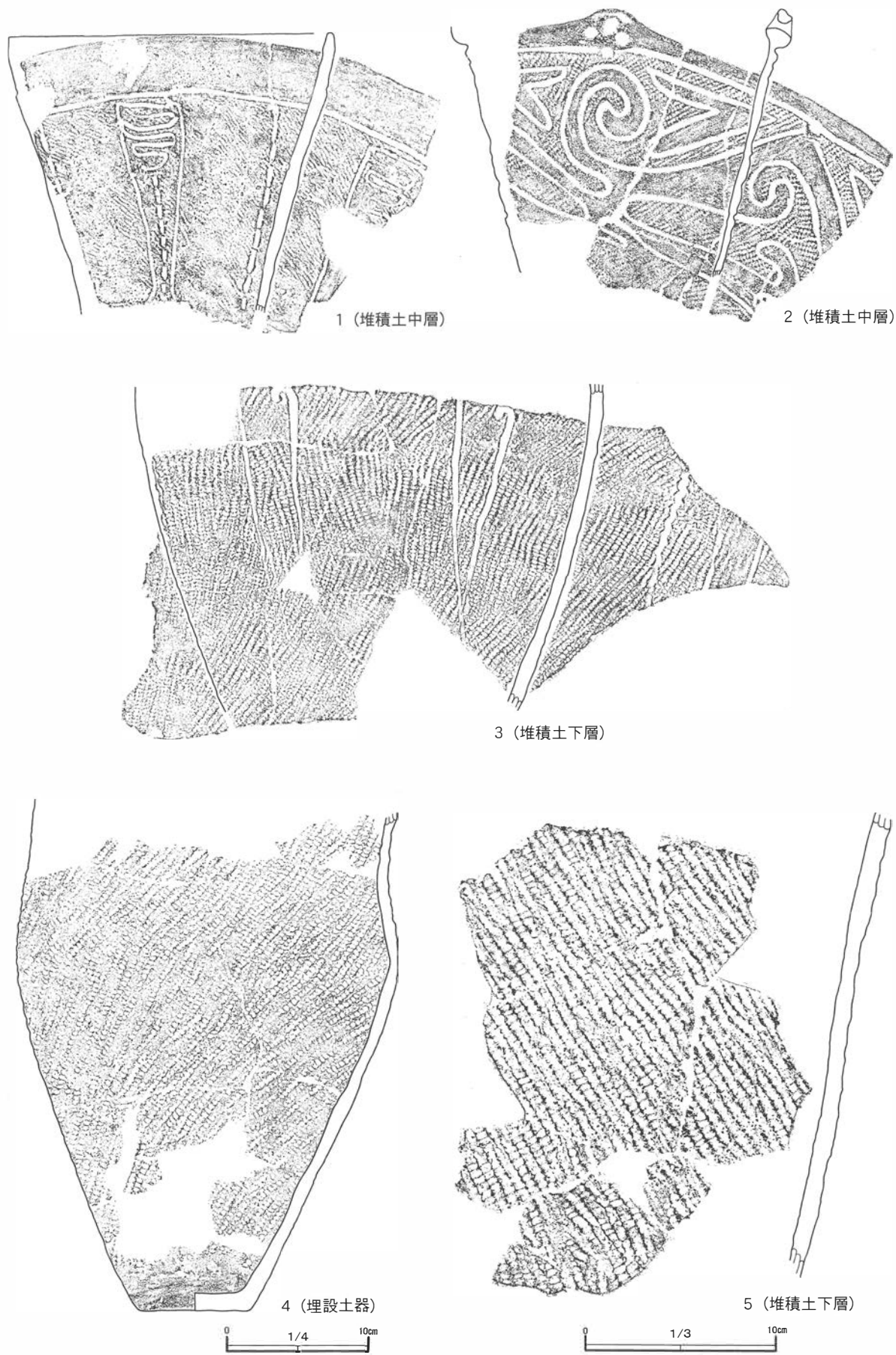


図17 4号住居跡出土遺物①

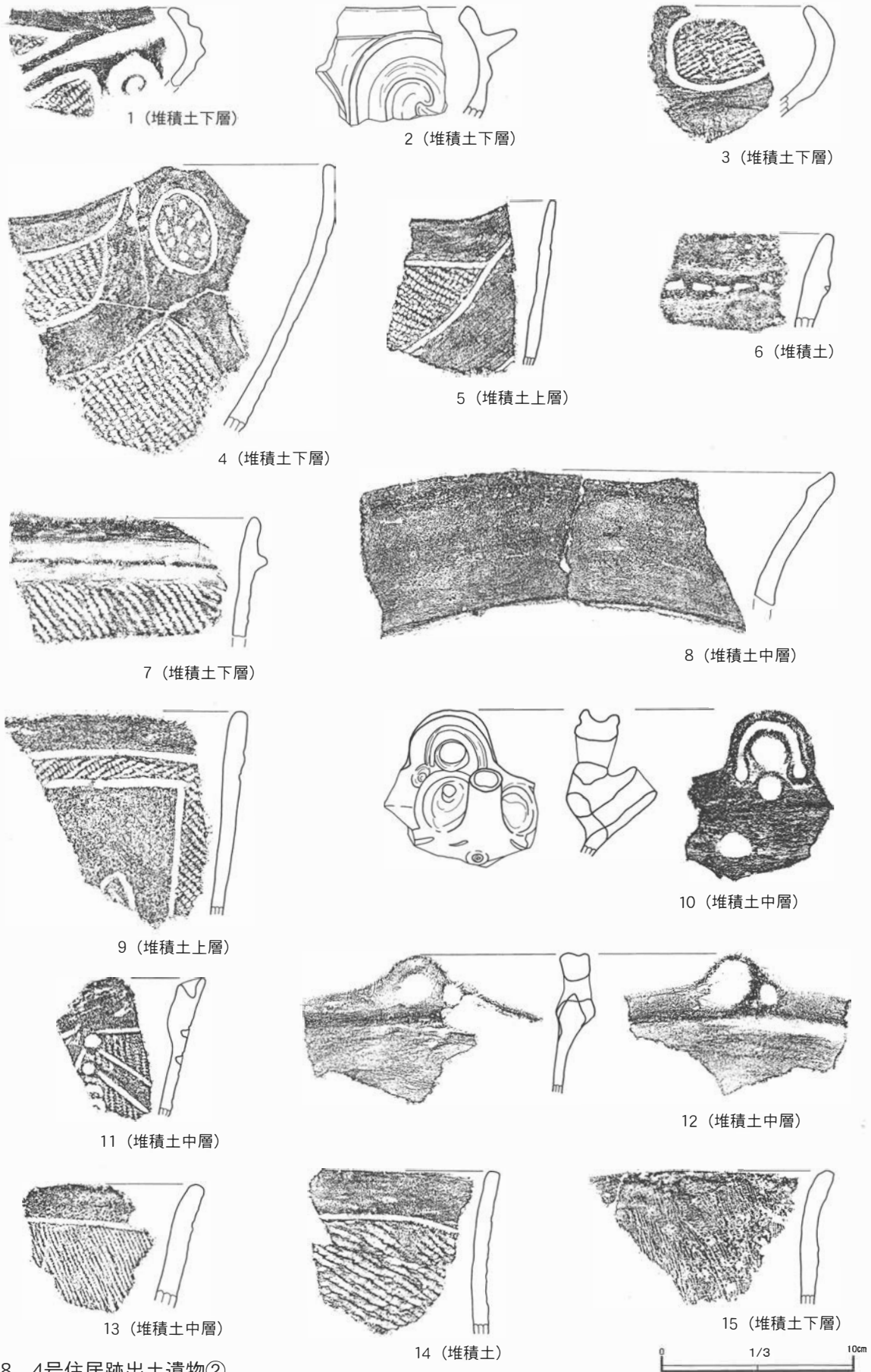


图18 4号住居跡出土遺物②

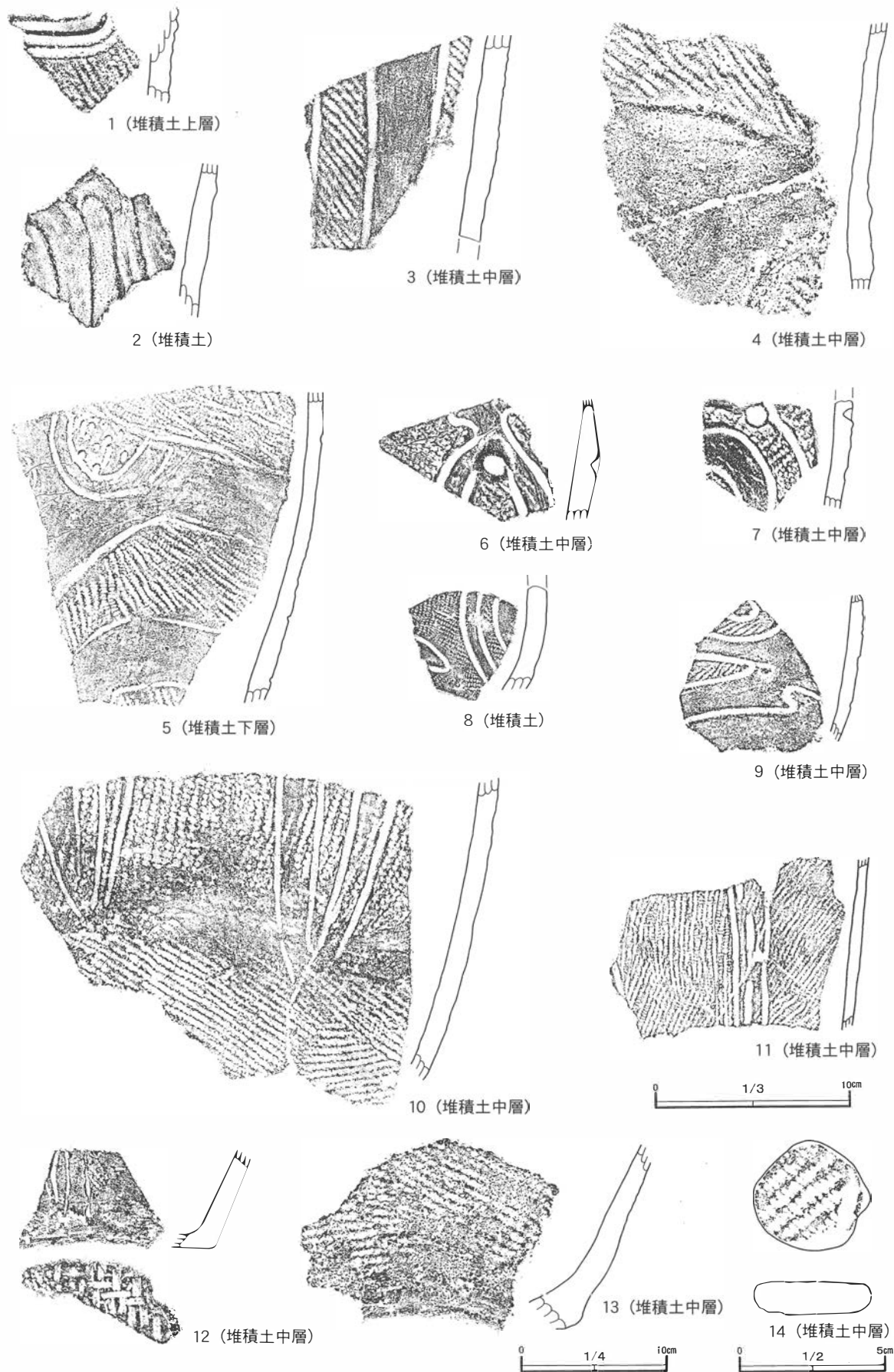


图19 4号住居跡出土遺物③

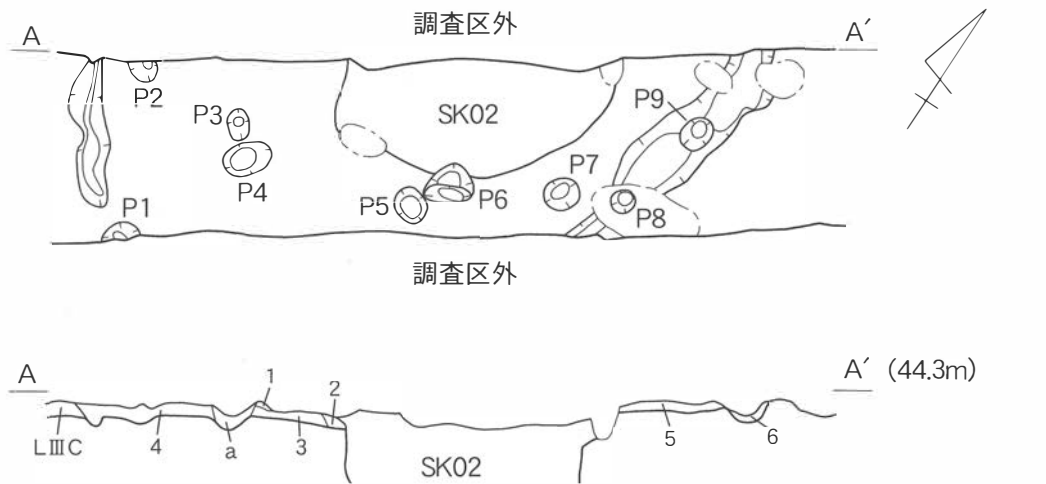
5号住居跡 (SI05)

遺 構 (図 20、図版 5)

調査区ほぼ中央で検出された。遺構確認時にはプランを確認できなかったが、北壁断面で東西壁の立ち上がりを確認したこと・東西両側で周溝が検出されたことから住居跡と判断した。検出面はLⅣAであるが、調査区北壁断面を観察すると、住居西側ではLⅢCからの掘り込みが認められる。また、本住居の堆積土を切ってSK02が構築されていることが確認できることから、構築順序はSI05 → SK02 となる。

平面プランは大部分が調査区外に延びているため不明であるが、検出部分から推測すると円形に近い形状と考えられ、検出部分での最大径は5.4mである。床面は明確な貼床ではなくLⅣAを床とし、若干中央に向かって窪んでいる。床面に硬化した痕跡は認められない。北壁断面で確認すると、周溝は壁に沿って巡っていることが認められる。壁高は東側で周溝底部から18cm でやや緩やかに立ち上がる。

本住居からは9基のピット (P1 ~ P9) を確認した。これらのピットはSI05の堆積土中では検出されなかったこと、P1 ~ P9の堆積土がSI05の堆積土に極めて類似していることからSI05に伴うものと推測した。P1・P2は壁際で検出したため完掘できなかった。これらのピットは径20 ~ 39cm、深さ15 ~ 28cmを測る。P1は西側周溝の一部あるいは壁柱穴の可能性がある、P8・P9は壁柱穴の可能性はある。炉跡等の施設は検出されなかった。



SI05

- a 黒褐色土 粘性中。締まり中。ローム粒少量。ロームブロック中量。(縄文ピット)
- 1 暗褐色土 粘性中。締まり中。ローム粒少量。ロームブロック多量。
- 2 暗褐色土 粘性中。締まり中。ローム粒・ロームブロック中量。小石少量。
- 3 暗褐色土 粘性中。締まり中。ローム粒・ロームブロック・小石少量。(3層より暗い)
- 4 暗褐色土 粘性中。締まり中。ローム粒・ロームブロック多量。
- 5 暗褐色土 粘性中。締まり中。ローム粒中量。ロームブロック・小石少量。
- 6 暗褐色土 粘性中。締まり中。ローム粒多量。ロームブロック中量。小石少量。(6層より明るい)

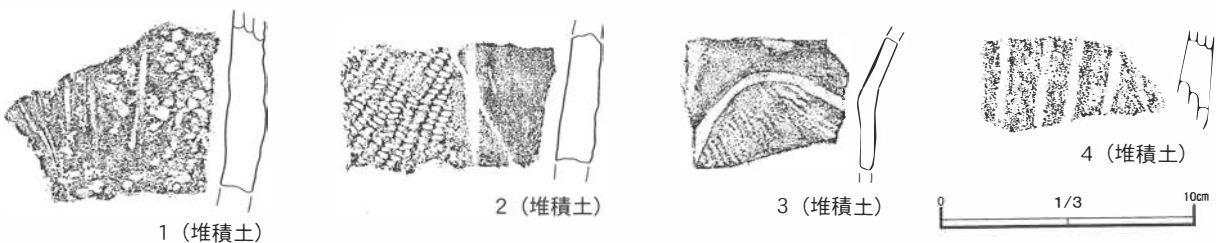
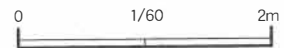


図20 5号住居跡実測図・出土遺物

遺物 (図 20、図版 14)

5号住居からは8点の土器が出土している。出土遺物についてはまとめて出土する状況は確認されず、堆積土・床面から散在的な出土が認められる。

図 20 - 1・2・4は縦位に沈線が施され、2は帯状に区画されている。3は沈線により曲線的なモチーフが描出されている。1～4はⅢ群である。

まとめ

本住居跡は明確に時期を特定できる遺物は出土していないが、出土遺物から中期後葉～末に構築されたと考えられる。

6号住居跡 (SI06)

遺構 (図 21、図版 7)

LⅢAの下位、SI02東側上面で複式炉を検出した。調査区南壁・北壁の断面および平面を観察したが、住居の掘込面・床面・周溝等の痕跡は確認できなかったものの、複式炉が検出されたことから複式炉の周囲には住居が構築されていたと判断した。本複式炉が縄文後期前葉の遺物包含層と推定されるLⅢAの下位に検出され、大木10式期に構築されたと推測されるSI02の堆積土を掘り込んでいることから、SI06は中期末以降に構築されたが、後期前葉の段階ではすでに壊されていたと考えられる。

複式炉は長軸157cm、短軸73cm以上を測り、平面形は石組部から土器埋設部にかけて括れをもつ形状である。長軸方向は北東-南西であり、北東から土器埋設部・石組部の順で配される。前庭部は確認されなかった。土器埋設部は大小の深鉢形土器2個体が入れ子状になって正位の状態で埋められ、土器の周囲には10～20cm前後のレキを配している。石組部は、土器埋設部とその反対側に人頭大のレキをほぼ直立に立て、両側壁に拳大～人頭大のレキが敷き詰められている。底面にはレキは配されていないが、ピット状の掘り込みが確認できる。土器埋設部の掘方ならびに石組部のレキに熱を受けた痕跡が確認されるが、埋設土器・石組部底面には熱を受けた痕跡は認められない。炉構築材としてのレキは、安山岩・花崗閃緑岩が約7割を占め、その他には細粒花崗岩・石英粗面岩等が使用されている。

遺物 (図 21、図版 14)

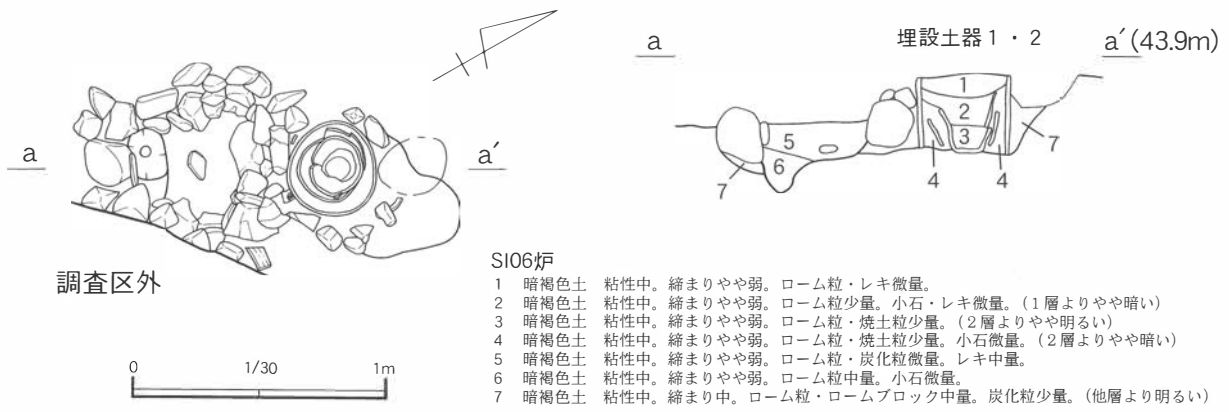
土器埋設部ならびに石組部内堆積土から縄文土器13点が出土している。

図 21 - 1は胴部中央が若干膨らみ、一旦括れてから直線的に胴部上半に向かう器形である。沈線で区画した無文帯で文様を描出している。また、無文帯に切り合いが認められる。2・3は炉埋設土器である。2は底部から外傾しながら胴部下半へ至り、胴部下半から胴部上半へは直線的に立ち上がる器形である。RL縄文が施されている。3は胴部中央が膨らみ、若干括れてから胴部上半へ向かう器形と考えられる。縄文が施されている。

図 21 - 1はⅢ-2類、2・3はV群である。

まとめ

本住居跡は石組部の堆積土より図 21 - 1が出土していることから、大木10式期に構築されたと考えられる。



- 1 暗褐色土 粘性中。締まりやや弱。ローム粒・レキ微量。
- 2 暗褐色土 粘性中。締まりやや弱。ローム粒少量。小石・レキ微量。(1層よりやや暗い)
- 3 暗褐色土 粘性中。締まりやや弱。ローム粒・焼土粒少量。(2層よりやや明るい)
- 4 暗褐色土 粘性中。締まりやや弱。ローム粒・焼土粒少量。小石微量。(2層よりやや暗い)
- 5 暗褐色土 粘性中。締まりやや弱。ローム粒・炭化粒微量。レキ中量。
- 6 暗褐色土 粘性中。締まりやや弱。ローム粒中量。小石微量。
- 7 暗褐色土 粘性中。締まり中。ローム粒・ロームブロック中量。炭化粒少量。(他層より明るい)

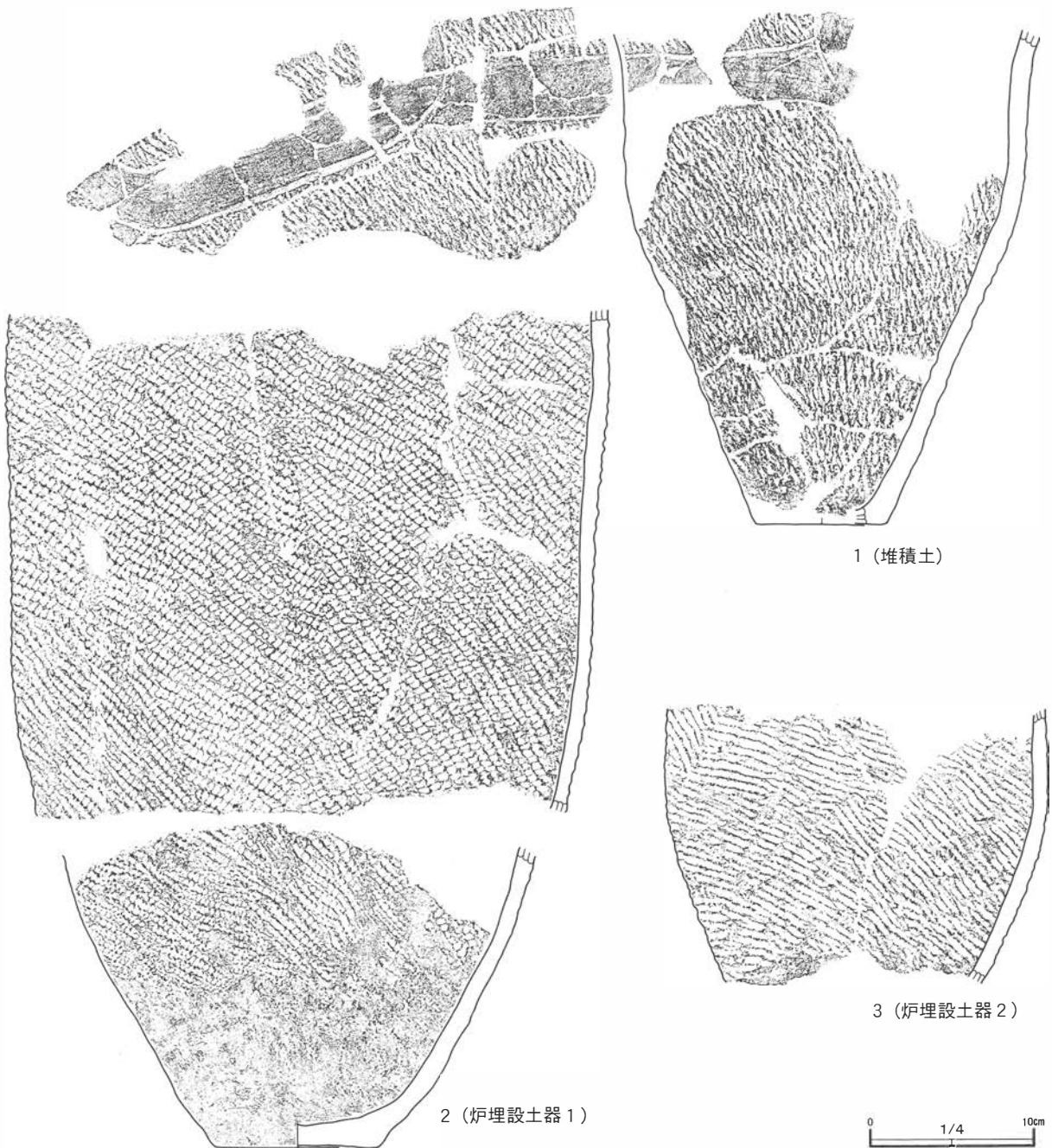


図21 6号住居炉跡実測図・出土遺物

7号住居跡 (SI07)

遺 構 (図22、図版8)

SI04の貼床の下位から検出された。掘込面はLIV Aである。大部分が調査区外に延びているため平面プランは不明であるが、検出部分から推測すると円形と考えられる。検出部分での最大径は5.1mである。床面は明確な貼床面ではなく、LIV Aを床面とし、ほぼ平坦で全体的に締まりがある。堆積土は暗褐色を基調としている。東西両側で周溝が認められる。東側では周溝を2条確認したが、途切れており重複していないため前後関係は不明である。壁高は東側で13cmを測りやや緩やかに立ち上がる。

本住居からはピット11基 (P1 ~ P11) を確認した。P3・P4・P10は壁際で検出したため完掘できなかった。P1・P2には重複が認められる。P1は長軸62cm、短軸54cm、深さ48cm、

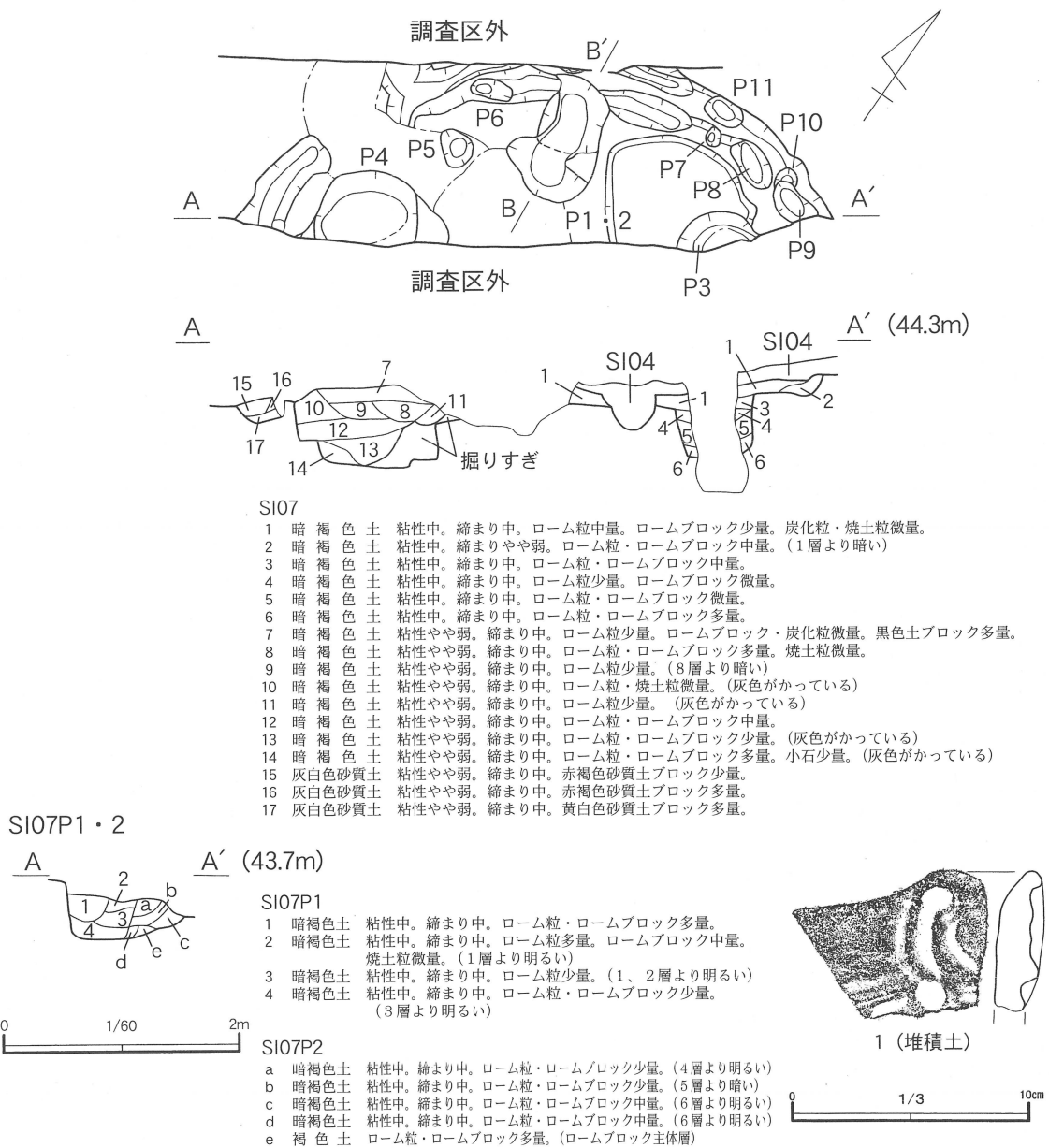


図22 7号住居跡実測図・出土遺物

P2は長軸73cm、短軸42cm以上、深さ48cm、P3は長軸70cm以上、深さ50cm、P4は長軸108cm以上、深さ53cmを測る。P5～P11は長軸17～47cm、深さ5～35cmを計測し、壁際を巡っている。P1～P4は他のピットと比較すると径が大きく深さも深いことから支柱穴と推定される。周溝が2条確認されること・支柱穴と推測されるP1に住居外側へ向かう作り替えが認められることから、拡張した可能性が考えられる。炉跡等の施設は検出されなかった。
遺物(図22、図版14)

出土遺物はピット1から出土した縄文土器1点のみである。

図22-1は口縁部に両端に盲孔を有し、中央に沈溝が施されたノ字状の隆帯が付されている。IV-1類である。

まとめ

本住居跡は、出土遺物が1点のみのため詳細な時期は決定できないが、綱取I式と考えられる土器が出土していること、綱取II式期以前の構築と推定される4号住居跡の下位から検出されていることから、綱取II式期以前に構築されたと推測される。

8号住居跡(SI08)

遺構(図23、図版9)

調査区中央より西側に位置する。住居跡東側の検出面はLIVBである。後述するSI09と西側で重複しているが、調査区南壁の断面を観察すると、本住居跡の堆積土がSI09の堆積土を切っていることが確認されることから、構築順序はSI09→SI08となる。

平面プランは大部分が調査区外に延びているため不明であるが、検出部分から推測すると円形と考えられる。検出部分での最大径は4.6mである。堆積土は暗褐色を基調としており、レ

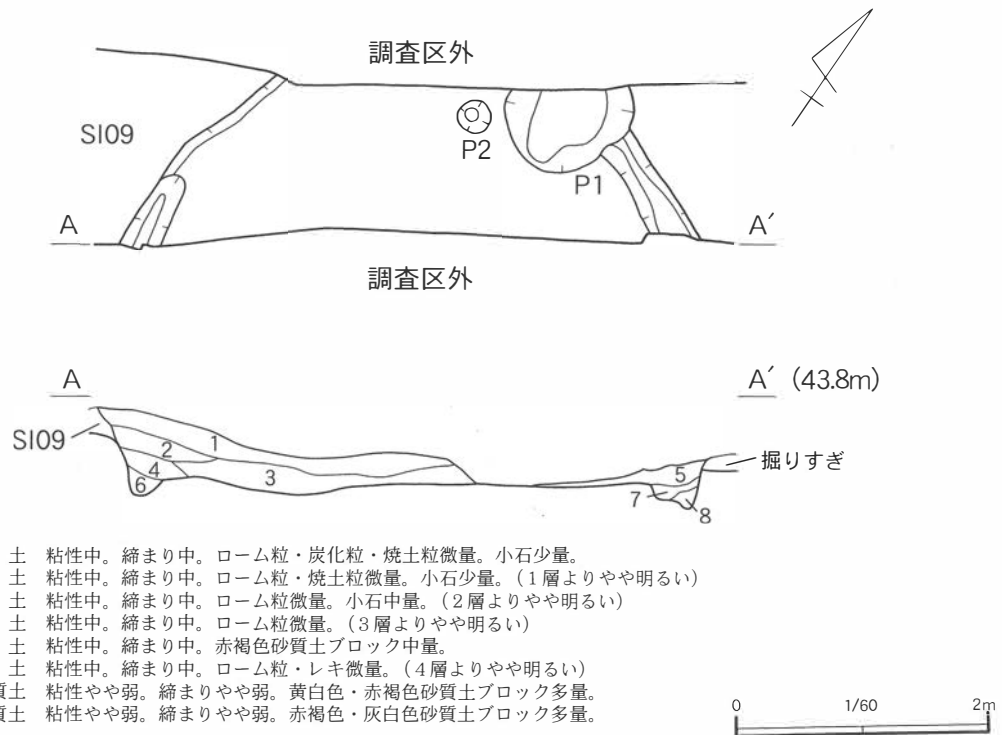


図23 8号住居跡実測図

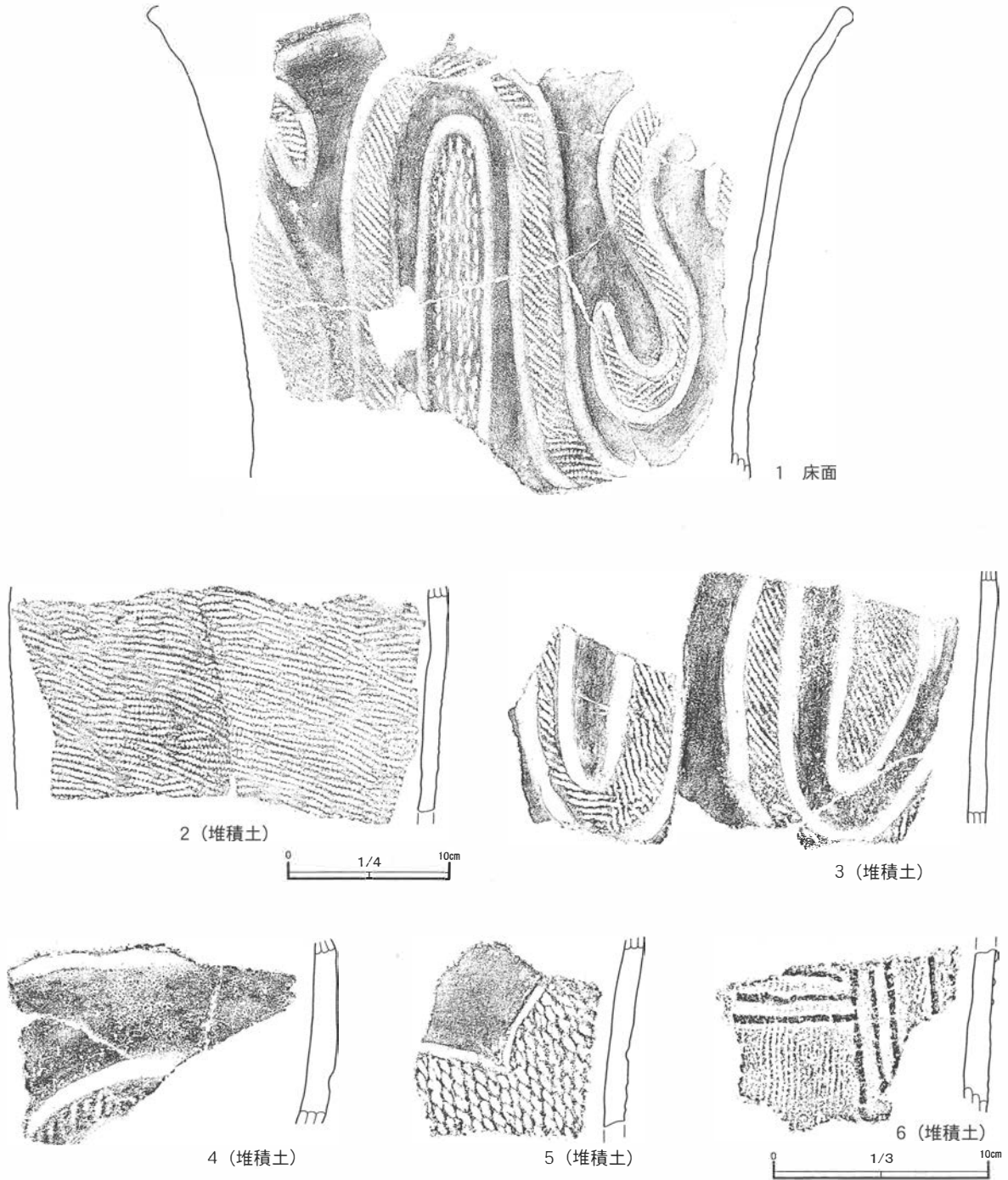


図24 8号住居跡出土遺物

ズ状の堆積が認められることから自然堆積と考えられる。床は明確な貼床ではなく、L IV Cを床面としている。一部では、L IV Cの下位に堆積するレキを多量に含む赤みがかった黒褐色砂質土(L V)を床にしている。床面は全体的に締まりがあり、北から南に向かって若干傾斜している。東西の壁際で周溝が確認できるが、東側の周溝はP 1と重複しており、西側の周溝は北部で途切れている。壁高は、調査区南壁断面で確認すると西側で周溝底部から69cmでやや緩やかに立ち上がる。

本住居からはピットを2基 (P1・P2) 確認した。P1は壁際で検出されたため完掘できなかった。P1は長軸100cm以上、深さ28cm、P2は長軸26cm、短軸25cm、深さ26cmを測る。P1・P2が柱穴であったかについては判断できない。炉跡等の施設は検出されなかった。

遺物 (図24、図版14)

縄文土器98点が出土しているが、そのほとんどが図23 SI08 ℓ 2～4から出土している。

図24-1は床面から出土した土器で、口縁が外反する器形である。S字状・連結U字状・長円状に沈線で区画が施され、区画内には縄文ならび刺突が充填される。2はRL縄文が施されている。3はU字状の沈線区画が認められる。4・5は沈線により曲線状のモチーフが描かれている。6はソーメン状の隆線で直線的なモチーフが描出されている。

図24-6はⅡ群、1・3～5はⅢ-2類、2はⅤ群である。

まとめ

本住居跡は床面から図24-1が出土していること、堆積土から大木10式期所産の土器が多く出土していることから、大木10式期に構築されたと考えられる。

9号住居跡 (SI09)

遺構 (図25、図版10)

SI08の西側で検出された。本住居跡は遺構東側でSI08に、西側でカクランに切られているため掘込面が確認できなかったが、南壁際で炉跡と推測される埋設土器を確認したことから、埋設土器の周囲に住居跡が構築されていたと判断した。

堆積土は、やや砂質の暗褐色土であり、10cm前後の層厚をもって堆積している。床面は明確な貼床ではなく、LⅣBを床面としてほぼ平坦である。床面には、硬化している痕跡は認められない。

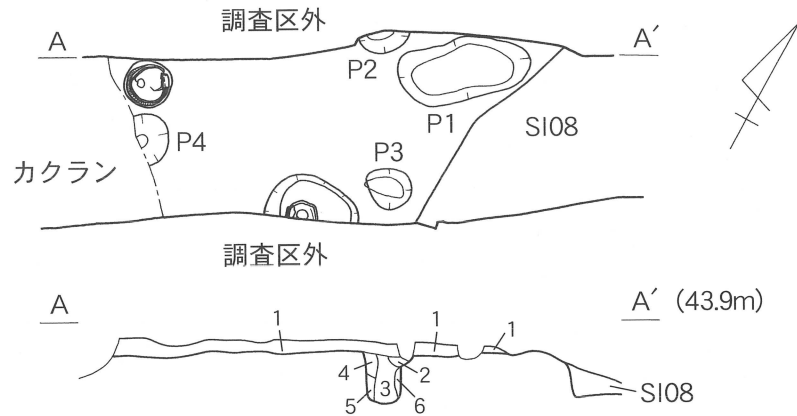
本住居からはピット4基 (P1～P4) 確認した。P2は壁際で検出されたため完掘できなかった。また、P4は西側でカクランに切られている。P1は長軸106cm、短軸49cm、深さ24cm、P2は長軸40cm以上、深さ41cm、P3は長軸37cm、短軸34cm、深さ26cm、P4は長軸41cm以上、深さ30cmを測る。図25 SI09 ℓ 3は柱痕跡と考えられることから、P2は主柱穴と推測される。P1・P3・P4については掘り込みが浅く、柱痕跡を確認していないため主柱穴とは判断できない。

南壁ほぼ中央に埋設土器を確認した。平面では熱を受けた痕跡は観察されなかったが、掘方の断面で焼土が一定量認められることから、炉の土器埋設部と推測できる。また、この炉跡の北西には埋設土器 (SI09内 SM01) を確認した。本住居堆積土中から埋設土器の掘方が確認できなかったことから本住居に伴う遺構と考えた。

遺物 (図26、図版14)

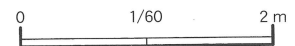
本住居跡からは縄文土器65点が出土している。出土土器については、まとめて出土する状況は確認されず、堆積土・床面から散在的な出土が認められる。

図26-1は、胴部上半に最大径をもち、一旦括れて直立的に立ち上がり口縁へ至る器形である。土器が傾いており、土器全体の大きさと比較すると底部が小型であるため支えるものがなければ倒れてしまう。頸部に1条の沈線を巡らして口縁部無文帯を区画し、沈線下には

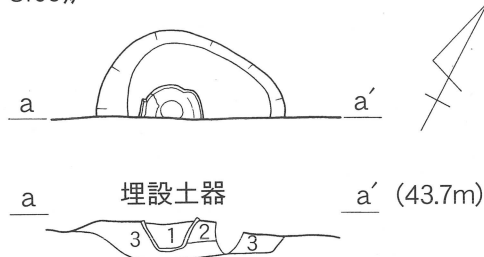


SI09

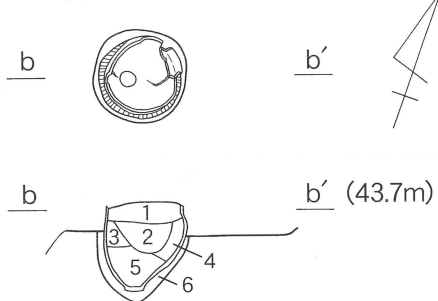
- 1 暗褐色土 粘性中。締まり中。ローム粒・ロームブロック多量。炭化粒・焼土粒微量。
- 2 暗褐色土 粘性中。締まり中。ローム粒・焼土粒微量。
- 3 暗褐色土 粘性中。締まり中。ローム粒・ロームブロック少量。(2層よりやや明るい)
- 4 暗褐色土 粘性中。締まり中。ローム粒中量。ロームブロック少量。(3層より明るい)
- 5 暗褐色土 粘性中。締まり中。ローム粒・ロームブロック中量。(4層よりやや明るい)
- 6 黄褐色土 粘性中。締まり中。ロームブロック主体。



SI09炉



SI09内SM01



SI09炉

- 1 暗褐色土 粘性中。締まり中。ローム粒・炭化粒・焼土粒微量。
- 2 暗褐色土 粘性中。締まり中。ローム粒・ロームブロック・焼土粒少量。炭化粒微量。
- 3 暗褐色土 粘性中。締まり中。ローム粒・焼土粒中量。ロームブロック少量。炭化粒微量。

SI09内SM01

- 1 暗褐色土 粘性やや弱。締まり中。ローム粒・焼土粒微量。
- 2 暗褐色土 粘性やや弱。締まり中。ローム粒少量。ロームブロック・炭化粒・焼土粒微量。
- 3 暗褐色土 粘性やや弱。締まり中。ローム粒微量。(3層に類似)
- 4 暗褐色土 粘性やや弱。締まり中。ローム粒微量。(3層に類似)
- 5 暗褐色土 粘性やや弱。締まり中。ローム粒・ロームブロック微量。
- 6 にぶい褐色土 粘性やや弱。締まり中。ローム粒・ロームブロック多量。

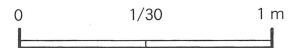


図25 9号住居跡実測図

条線文が施されている。2は炉埋設土器で、底部より直線的に立ち上がる器形で、RL縄文が施文されている。3は外反する口縁で、沈線により曲線的なモチーフが描出されており、4・5は沈線で帯状の区画が施されている。

図26-3はⅢ-2類、1はⅢ-3類、4・5はⅢ群、2はV群である。

まとめ

本住居跡は図26-3が出土していることから大木10式期に構築されたと考えられる。

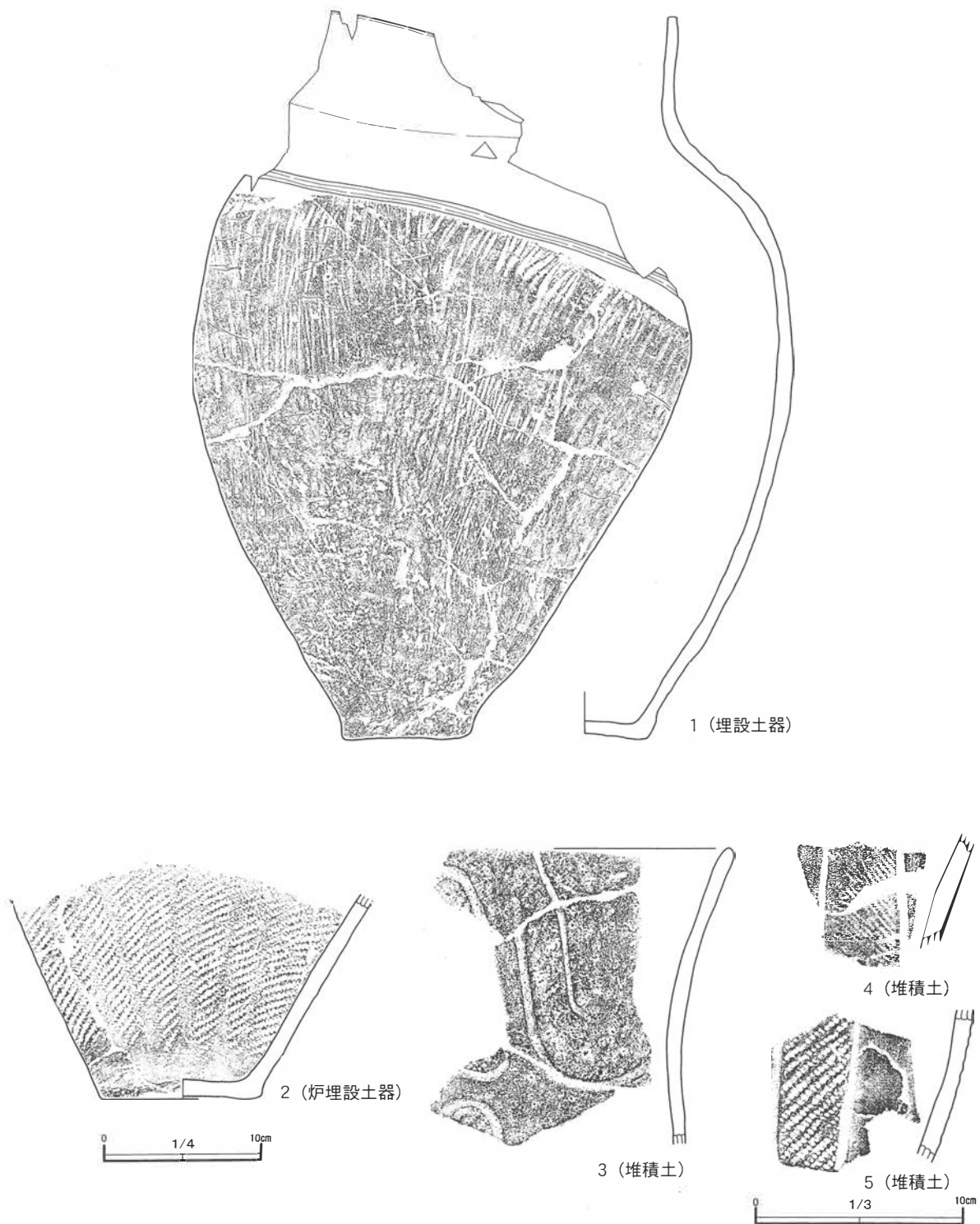


図26 9号住居跡出土遺物

第3項 土 坑

1号土坑 (SK01)

遺 構 (図 27、図版 11)

調査区中央よりやや西側に位置し、SI04 に重複するが SI04 の貼床面を切っていることから、構築順序は SI04 → SK01 となる。



図27 1号土坑実測図・出土遺物

平面プランは円形を呈し、断面形は若干フラスコ状を呈する。長軸 122cm、深さ 19cm を測る。堆積土は黒褐色を基調とし、レンズ状の堆積が認められることから自然堆積と考えられる。出土遺物 (図 27、図版 15)

本土坑からは縄文土器が 59 点出土している。出土土器についてはまとめて出土する状況は確認されず、堆積土から散在的な出土が認められた。

図 27 - 1 は底部から直線的に立ち上がり口縁が外反する器形で、口縁部無文帯を沈線で区画し、沈線下に RL 縄文が施文されている。2 も底部から直線的に立ち上がる器形で、LR 縄文が施されている。3 は沈線で、4 は隆帯で口縁部無文帯を区画している。5 は入組状文が、6・7 は曲線的なモチーフが磨消縄文により描出されている。

図 27 - 4・6 は IV - 1 類、5・7 は IV - 2 類、1 ~ 3 は V 群である。

ま と め

本土坑は図 27 - 5 ~ 7 が出土していること、綱取Ⅱ式以前の年代が与えられている SI04 の貼床面を切っていることから綱取Ⅱ式期に構築されたと考えられる。

2号土坑 (SK02)

遺 構 (図 28、図版 11)

調査区ほぼ中央の北壁際に位置し、SI05 と重複するが本土坑の堆積土が SI05 堆積土を切っていることから、構築順序は SI05 → SK02 となる。

大部分が調査区外に延びているため平面プランは不明であるが、検出部分から推測すると円形あるいは不整形円形と考えられる。検出部分の最大径は 223cm で、深さは 157cm を測り、断

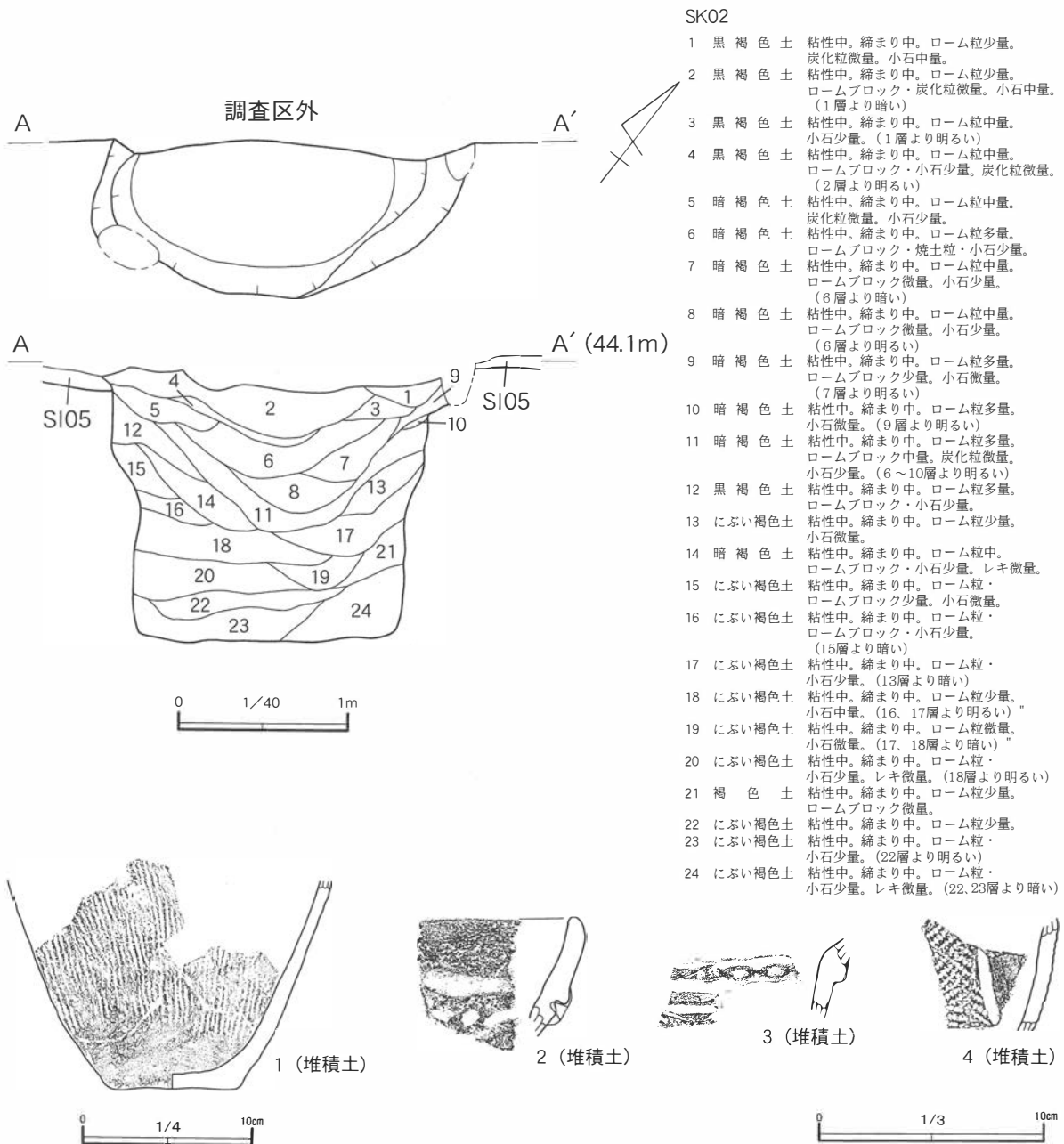


図28 2号土坑実測図・出土遺物

面形は円筒状を呈する。堆積土は暗褐色を基調とし、レンズ状の堆積を確認できることから自然堆積と考えられる。

遺物 (図28、図版15)

本土坑からは27点の縄文土器が出土している。出土遺物についてはまとめて出土する状況は確認されず、堆積土から散在的な出土が認められる。

図28-1は底部から直線的に立ち上がる器形で、縦位の撚糸文が施文されている。2は横位の隆帯と隆帯に沿って巡る沈線で口縁部無文帯を区画し、隆帯には刺突・盲孔を施している。3は刺突の加えられた横位隆帯ならびに隆帯に沿った沈線が巡っている。4は沈線による带状区画が見られる。

図28-3はⅡ群、4はⅢ群、2はⅣ-1類、1はⅤ群である。

まとめ

綱取I式期の土器が出土しているものの、小破片で少量であることから、構築時期を示しているとは言い切れないため、本土坑は綱取I式期以前の構築と考えておきたい。

第4項 遺物包含層

1. 分布と層序

B地区ではほぼ全面にわたり遺物包含層が確認される。この遺物包含層は、黒褐色・暗褐色を呈しており、3層(LⅢA～C)に区分される。LⅢA～Cの堆積状況については、第1節基本土層で簡単に触れたが、ここで改めて確認しておく。

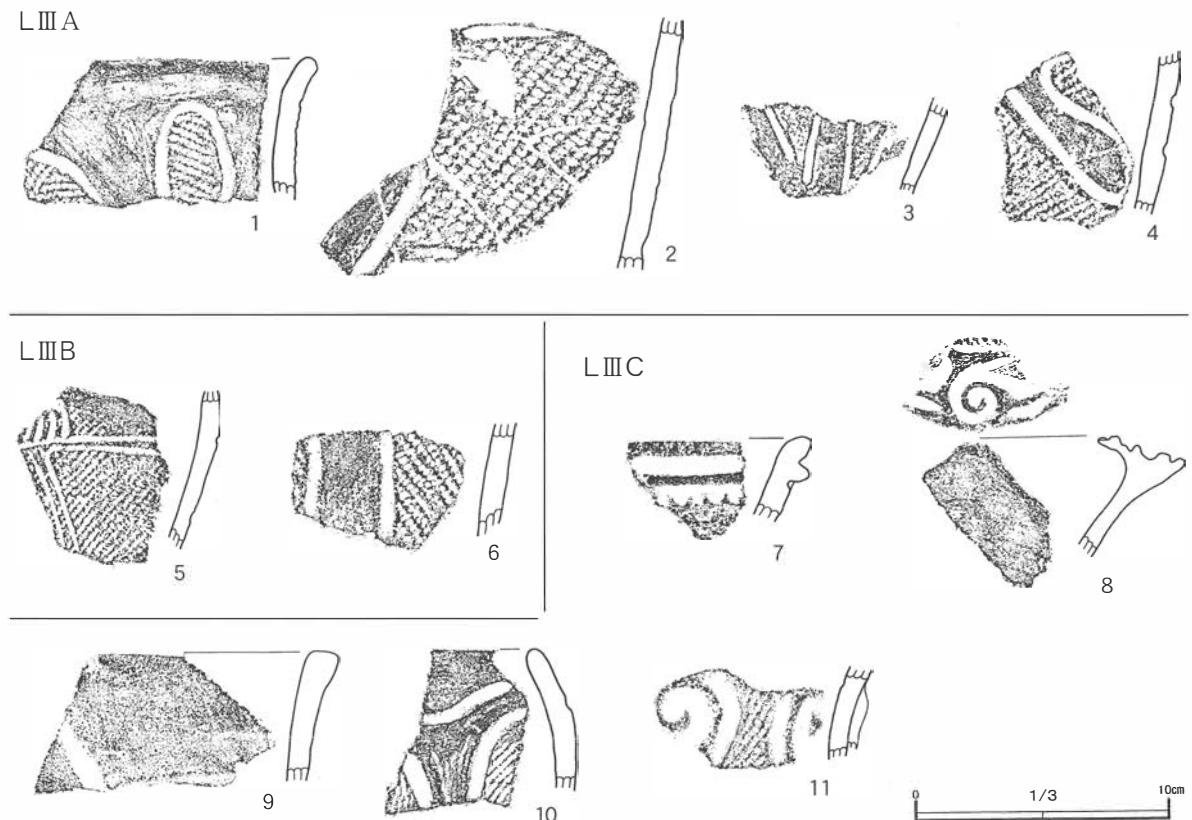


図29 遺物包含層出土遺物①

L III A は、B 地区東部から中央部にかけての広範囲にわたって堆積する黒褐色土で、縄文中期末～後期前葉の遺構ならびに遺物包含層の L III B、基盤層である L IV A の上位に、断続的ではあるが約 26m の範囲に層厚 10～20cm をもって堆積している。L III A からは縄文土器 86 点、石核 1 点が出土している。

L III B は、調査区西側に堆積する暗褐色砂質土で、L III A ならびに遺構と重複していないことから前後関係は不明である。無遺物層である L III D、基盤層である L IV C の上位に約 7m の範囲で層厚 10～30cm をもって堆積している。L III B からは縄文土器 28 点が出土している。

L III C は調査区中央部に堆積している暗褐色土で、縄文中期末～後期前葉の遺構ならびに遺物包含層の L III A の下位、基盤層である L IV A の上位に堆積している。遺構に切られているため断続的ではあるが、約 9m の範囲で層厚 10～20cm をもって堆積している。L III C からは縄文土器 41 点が出土している。

L III A～C から出土した土器については、まとめて出土する状況が確認されず、復元率が極めて低く、完形・半完形の土器も出土していないことから、これらの土器は廃棄行為等に伴うものではなく、B 地区北側の斜面上位からの流れ込んだものと推測される。

2. 出土遺物 (図 29・30、図版 15)

L III A～C からは土器 155 点、石器 1 点の合計 156 点の遺物が出土したが、前述したとおり土器については大部分が小破片だったため、図示できたのは石器を含めて 12 点である。図 29-1～4 は L III A、5・6 は L III B、7～11 は L III C から出土した土器で、図 30-1 は L III A から出土した石器である。

図 29-1 は外反する口縁で、沈線により楕円形に区画され、区画内には縄文が充填されている。2・4 は曲線的なモチーフが沈線により描出されている。3 は沈線が垂下している。5 は横走る沈線の上下に集合沈線が施されている。6 は沈線で帯状の区画がなされている。7 は横走る隆帯に沿って沈線・刺突が巡らされている。8 は浅鉢の口縁部で隆沈線により渦巻文が描かれている。11 は隆沈線で渦巻文が描出されている。9 はやや肥厚した口縁で、沈線が施されている。10 は内湾する口縁で沈線により曲線的なモチーフが描かれている。

図 29-1・7・8・11 は III-1 類、10 は III-2 類、2・6・9 は III 群、4・5 は IV-2 類、3 は V 群である。

図 30-1 は石核で、全面に剥離痕が確認できる。石材は玉髓である。

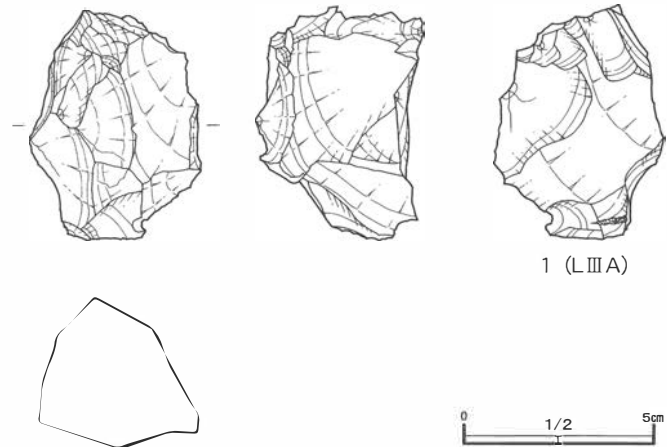


図30 遺物包含層土遺物②

第5項 遺構外出土遺物（図31～34、図版15・16）

ここでは、L I、カクランから出土した遺物について述べることにする。L I、カクランからはⅢ－2類～Ⅳ－2類までの土器を中心に、縄文中期前葉から後期前葉までの多種多様の遺物が多量に出土している。

図31－1は沈線で長方形の区画が施されている。2はソーメン状隆線による波状文が施文されている。3は横位にカマボコ状の隆線が認められる。4はカマボコ状の隆線で渦巻文が描出されている。また、櫛歯状工具で条線文が施文されている。5は断面が三角状の隆線により楕円形に区画され、縄文ならびに刺突が充填されている。6～14は口縁部資料である。6は沈線で、7は隆沈線でU字状区画が施されている。8は隆沈線で、11は沈線で曲線状のモチーフが描かれている。9は楕円状に、12は楕円状・三角状に沈線で区画している。10は幅広の沈線が横走している。13・14は同一個体である。口縁部に長方形の区画を施し、区画の間には突起が付けられている。

図31－1はI群、2～4はII群、5・6・8はⅢ－1類、7・9・11・13・14はⅢ－2類、10はⅢ群、12はⅣ－1類である。

図32は沈線・隆線・隆沈線で区画されている胴部・底部資料である。1～5・8は帯状の区画が、6は楕円形区画が、7・9はU字状区画がそれぞれ沈線により描出されている。10は隆沈線で、11は断面が三角状の隆線でU字状区画が施文されている。12は断面が三角状の隆線で曲線状の文様モチーフが描かれている。13は外反しながら立ち上がる胴部である。沈線によりU字状・楕円形区画が施され、縄文が充填されている。14は直線的に立ち上がる底部で、沈線により楕円形区画が施され、縄文が充填されている。

図32－14はⅢ－1類、10～13はⅢ－2類、1～9はⅢ群である。

図33－1は8字状の把手が付く口縁である。把手には両端に盲孔を有するC字状・ノ字状の沈線が、口縁部には盲孔を有する沈線が巡っている。2・3は口縁部の突起である。2は正面にS字状の沈線が、左右には楕円形の沈線が施されている。3は楕円形沈線を施文した後に円形浮文が付けられている。4は口縁部に貫通孔・小型の橋状把手が認められる。橋状把手の下には縦位隆帯ならびに横位沈線が施文され、円形浮文が付けられている。5は口縁部から両端に盲孔を有し、中央に沈溝をもつ縦位隆帯が垂下する。また、横位隆帯で口縁部を区画している。6は胴部に膨らみをもち、一旦括れてから若干外傾して口縁に至る器形である。口唇部に貫通孔・盲孔が見られ、沈線が巡る。横位沈線で口縁部を区画し、胴部には盲孔・列点状沈線・曲線状のモチーフが施されている。7・8・11・12は沈線で口縁部を区画している。7は蛇行する沈線施文後、円形浮文を付している。8は直線的な区画を施してから盲孔を付している。11は磨消縄文による蕨手文が描かれている。12は口唇部に横位沈線が施文されている。9・10は曲線状の文様モチーフが磨消縄文で描出されている。

図33－5・9・10はⅣ－1類、1～4・11・12はⅣ－2類である。

図34－1～7は磨消縄文により曲線状の文様モチーフが描かれている胴部破片である。1はモチーフの基点に盲孔が施されている。6は蕨手文が、7は入組文が描出されている。8は曲線状の集合沈線が施文されている。9は2条の沈線を施文した後に横方向からの刺突を加えて

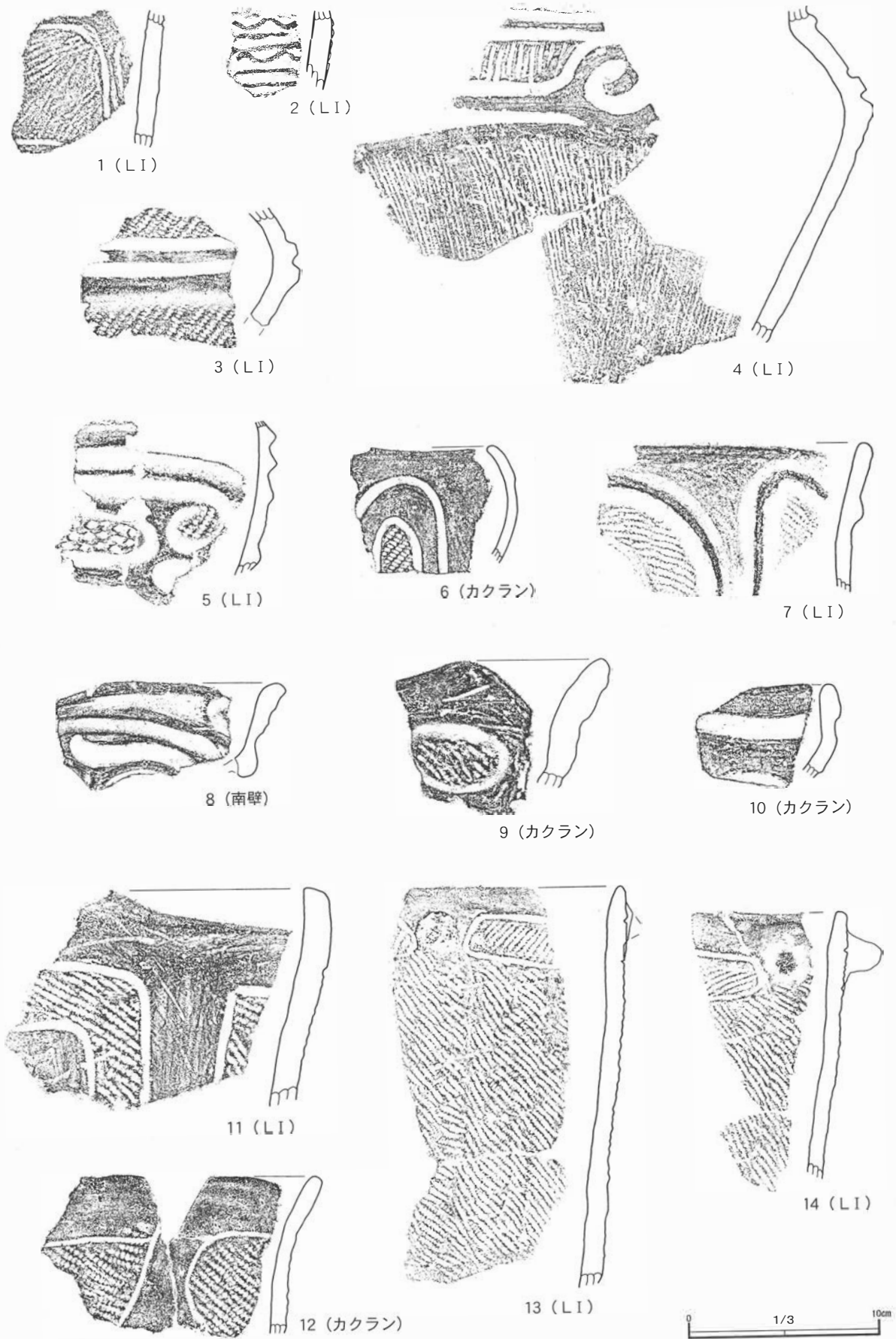


図31 遺構外出土遺物①

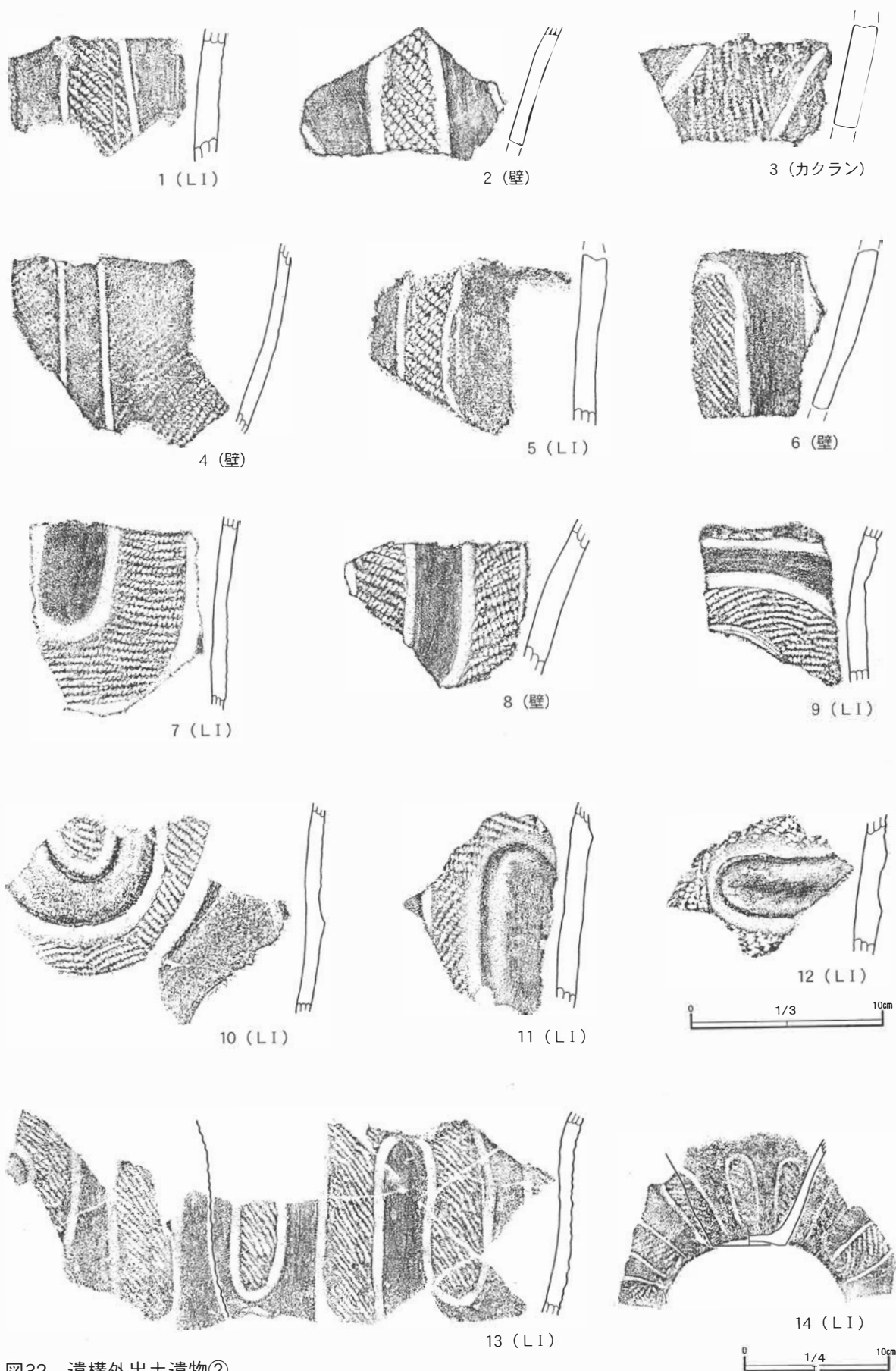


図32 遺構外出土遺物②

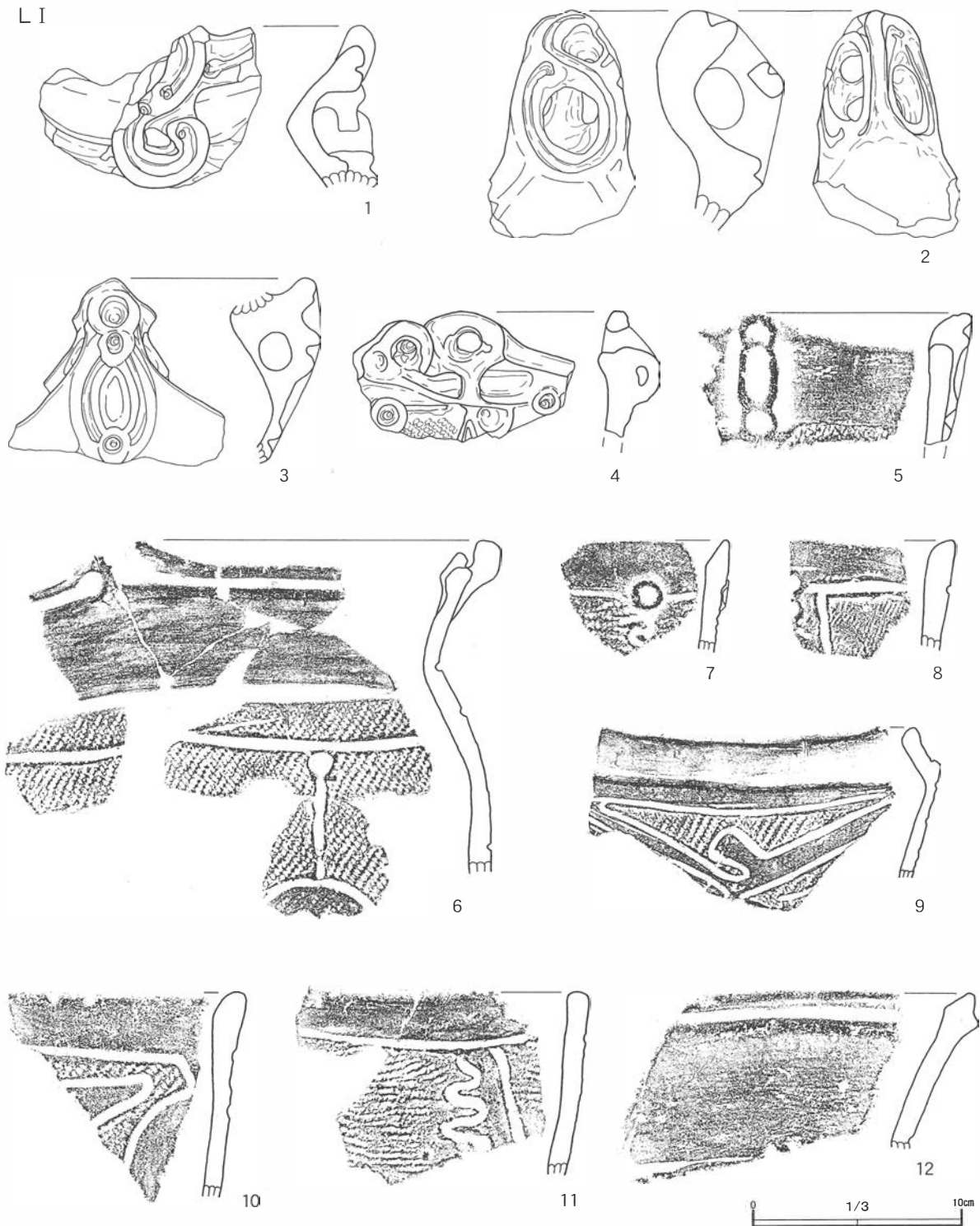


図33 遺構外出土遺物③

いる。10・11は注口土器である。10は短い注口部が作り出されている。11は注口部から断面が三角形状の隆線が横走している。12は土器片円盤である。磨消縄文により曲線状の文様モチーフが描出されている胴部を使用している。

図34 - 10・11はⅢ群、1～4・7・8はⅣ-2類、9はⅣ-4類、5・6はⅣ群である。

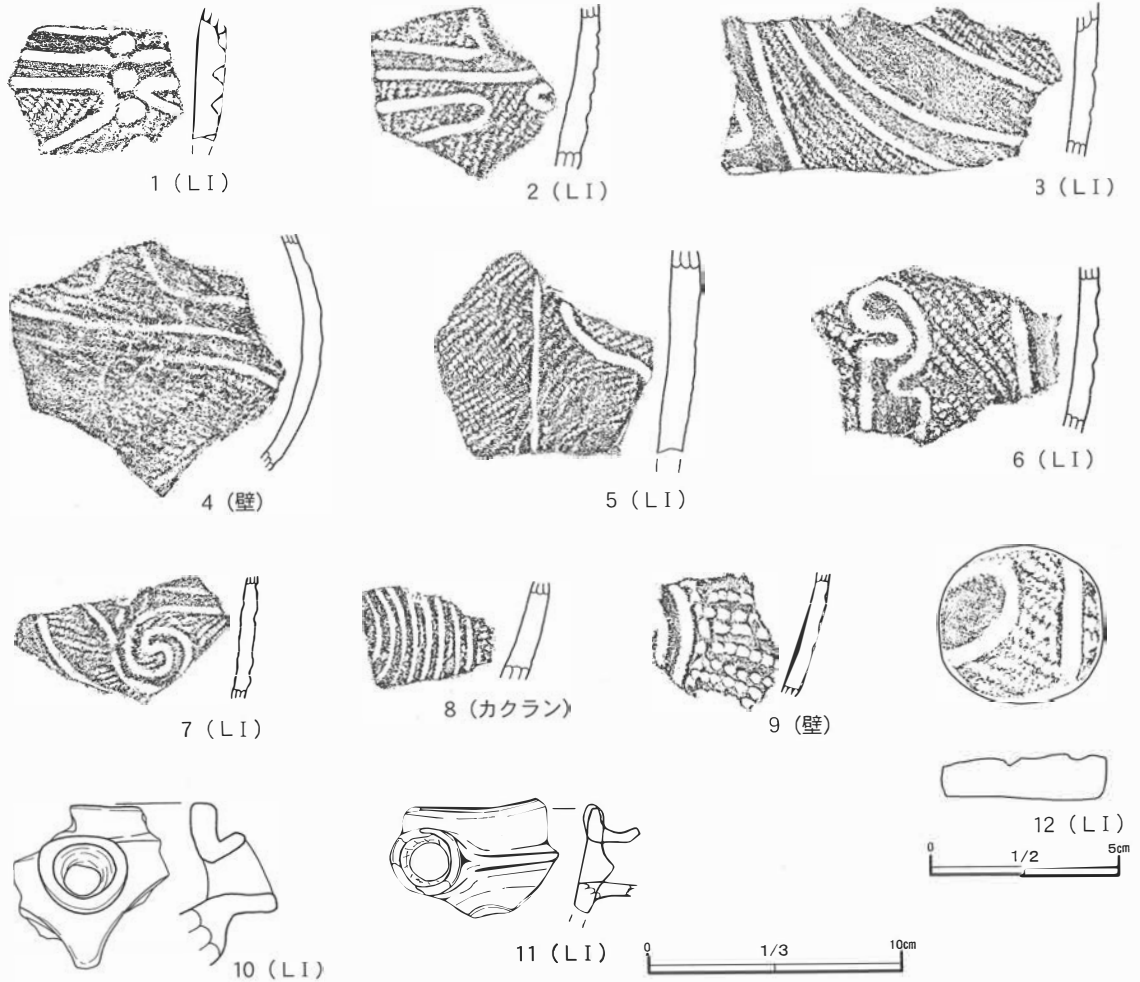


図34 遺構外出土遺物④

第IV章 試掘調査について

平成17年に実施した大田和広畑遺跡の試掘調査については、『南相馬市埋蔵文化財調査報告書第3集』で概要を報告したが、出土遺物については未整理だったことから未報告であったので報告していきたい。

第1節 調査成果

試掘調査は、県道中ノ内・小高線改良工事に伴い、平成17年11月14日から12月7日にかけて実施された。開発予定地の隣接地を中心に道路法線に直交するかたちで調査区(8～13トレンチ、1～3グリット)を設けて調査をおこなった。トレンチ番号は、平成16年に実施した調査のトレンチ番号の続き番号で付けた。以下に調査成果を述べていく。

8～13トレンチは、本調査地点のB地区から距離があるため堆積土の記述に使用するアルファベットを小文字にして区別した。また、1～3グリットは、B地区の範囲内に設定した調査区であるため堆積土の記述は第3章第1節で述べた基本土層の記述を用いることにする。

8T：開発予定地のほぼ中央部に設定した3m×7mの南北トレンチである。深さ1.5mの地点で基盤層であるロームを確認したが、数点の縄文土器が出土したものの、明確な遺構は検出されなかった。



図35 トレンチ・グリット配置図

- 9T：8トレンチの北東約21mの地点に設けた2m×7mの南北トレンチである。深さ約1.9mで地山と考えられる暗褐色土を確認し、トレンチ南端では、暗褐色土下に堆積する白黄色粘土を確認した。数点の縄文土器が出土したものの、明確な遺構は確認されなかった。
- 10T：9トレンチの北東約23mの地点に設けた4m×5mの南北トレンチである。断面図を図36に示した。深さ約1.3～1.6mの地点で暗褐色土(LⅢa)の堆積を確認した。内容確認のため10cm程度掘削して、縄文後期前葉の土器が出土することを確認したことから、LⅢaは当該期の遺物包含層と考えられる。また、LⅢaを掘り込む埋設土器を検出した。工事による掘削が埋設土器の検出レベルまで及ばないため、調査を行わずに埋め戻した。
- 11T：10トレンチの北東約16mの地点に設けた2m×5mの南北トレンチである。深さ約1.3mで黒褐色土(LⅢb)の堆積を確認した。内容確認のため約10cm程度掘削して、縄文後期前半の土器が出土することを確認したことから、LⅢb当該期の遺物包含層の可能性が高いと考えられる。
- 12T：11トレンチの北東約23mの地点に設けた2m×5mの南北トレンチである。断面図を図36に示した。深さ約1.0mで黒色土(LⅡa)の堆積を確認した。内容を把握するためにサブトレンチを設定して調査をおこない、基盤層であるローム(LⅣa)まで掘削した。黒色土は3層(LⅡa～c)に大別することができるが、LⅡaから最も多く遺物が出土し、LⅡb・LⅡcと下位にいくにしたがい遺物の出土量が減少する。LⅡc下には暗褐色土(LⅢc・LⅢd)が約20cmの厚さをもって堆積している。LⅡa～c、LⅢcからは縄文後期前葉の土器が出土していることから、LⅡa～c、LⅢcは当該期の遺物包含層と考えられる。

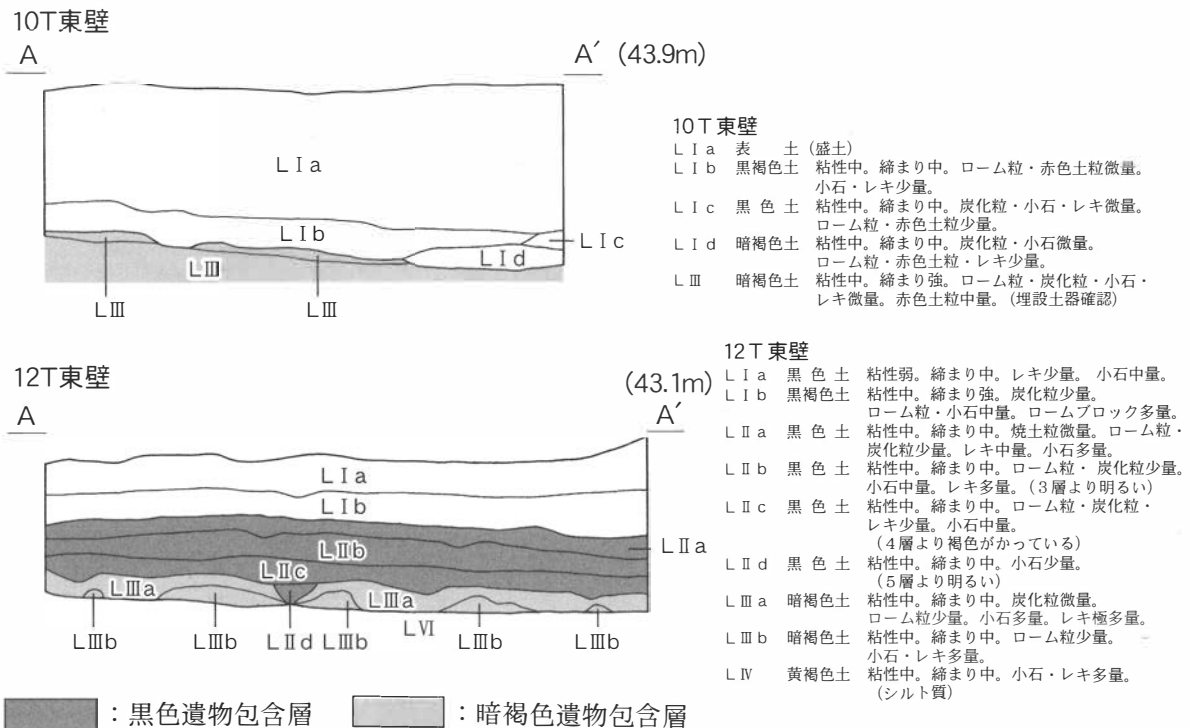


図36 10・12トレンチ断面図

- 13T：12 トレンチの北東約18mの地点に設けた2m×5mの南北トレンチである。深さ約1.2mでややシルト質の黒色土(LⅡe)の堆積を確認した。工事による掘削がLⅡeの堆積する深さまで及ばないことから調査はおこなっていないが、上面からは多数の縄文後期前半の土器が出土していること、12 トレンチで検出したLⅡaに類似していることから、縄文後期前半の遺物包含層と推測される。
- 1G：本調査区は4 トレンチの南西約35mの地点に設けた1m×2mの南北トレンチである。表土下約20cmで黒褐色土(LⅢA)の堆積を確認した。遺物の出土状況を確認するためLⅢAを約10cm程度の掘削をおこない、縄文後期前半の土器が出土したことから、当該期の遺物包含層と推定している。
- 2G：本調査区は1 グリットの南西約9mの地点に設けた1m×2mのグリットである。1 グリットと同様に、表土下約20cmで黒褐色土(LⅢA)の堆積を確認した。遺物の出土状況を確認するためLⅢAを約10cm程度の掘削をおこない、縄文後期前半の土器が出土したことから、当該期の遺物包含層と推定している。
- 3G：本調査区は2 グリットの南西約20mの地点に設けた1m×1mのグリットである。表土(LⅠ)を約40cmの深さまで掘削したが依然としてLⅠの堆積が認められたことから、LⅠの厚さを確認するために検土杖によるボーリング調査をおこない50cm以上堆積していることを確認した。LⅠの堆積が厚いこと、調査区の幅が狭いことからこれ以上の掘削はおこなわなかった。

第2節 出土遺物 (図37～45、図版17～20)

図37は、10・11 トレンチで検出されたLⅢa・bならびにLⅢa・b上面から出土した土器で、1～10は10 トレンチから、11～15は11 トレンチから出土している。

図37-1は口縁部の内外に盲孔、口縁部隆帯区画、縦位隆帯が認められる。2は2条の沈線が施文されている。3は口縁部無文帯を沈線で区画後、盲孔が施されている。4は口唇部を面取りし、磨消縄文で横位の帯状区画を施文している。5・6・8・9は磨消縄文で曲線状のモチーフが描出されている。10は口縁部にキザミが施されている。11は断面三角の隆帯で口縁部を区画しており、補修孔が穿たれている。12は口縁部から刺突の施された隆帯が垂下している。13は2条の沈線で口縁部を区画している。14は断面三角の隆帯で区画をおこなっており、隆帯下には櫛描文が施文されている。15は横位・縦位の沈線が認められている。

図37-10はI群、1・2・11・12・14はIV-1類、3～5・8・9・13・15はIV-2類、6・9はIV類である。

図38～43-1～17は12 トレンチから出土した土器である。図38-1・2はLⅠ、3～13はLⅠ～Ⅱa、図39～42はLⅡa、図43-1～11はLⅡb、12～16はLⅡc、17はLⅢcから出土している。また、図43-18・19は13 トレンチLⅠ～Ⅱeから出土した土器である。

図38-1は沈線で口縁部無文帯を区画し、磨消縄文で楕円状のモチーフを描いている。2は沈線による口縁部区画と口縁から垂下する2条の隆帯の交点に盲孔が施されている。3は口

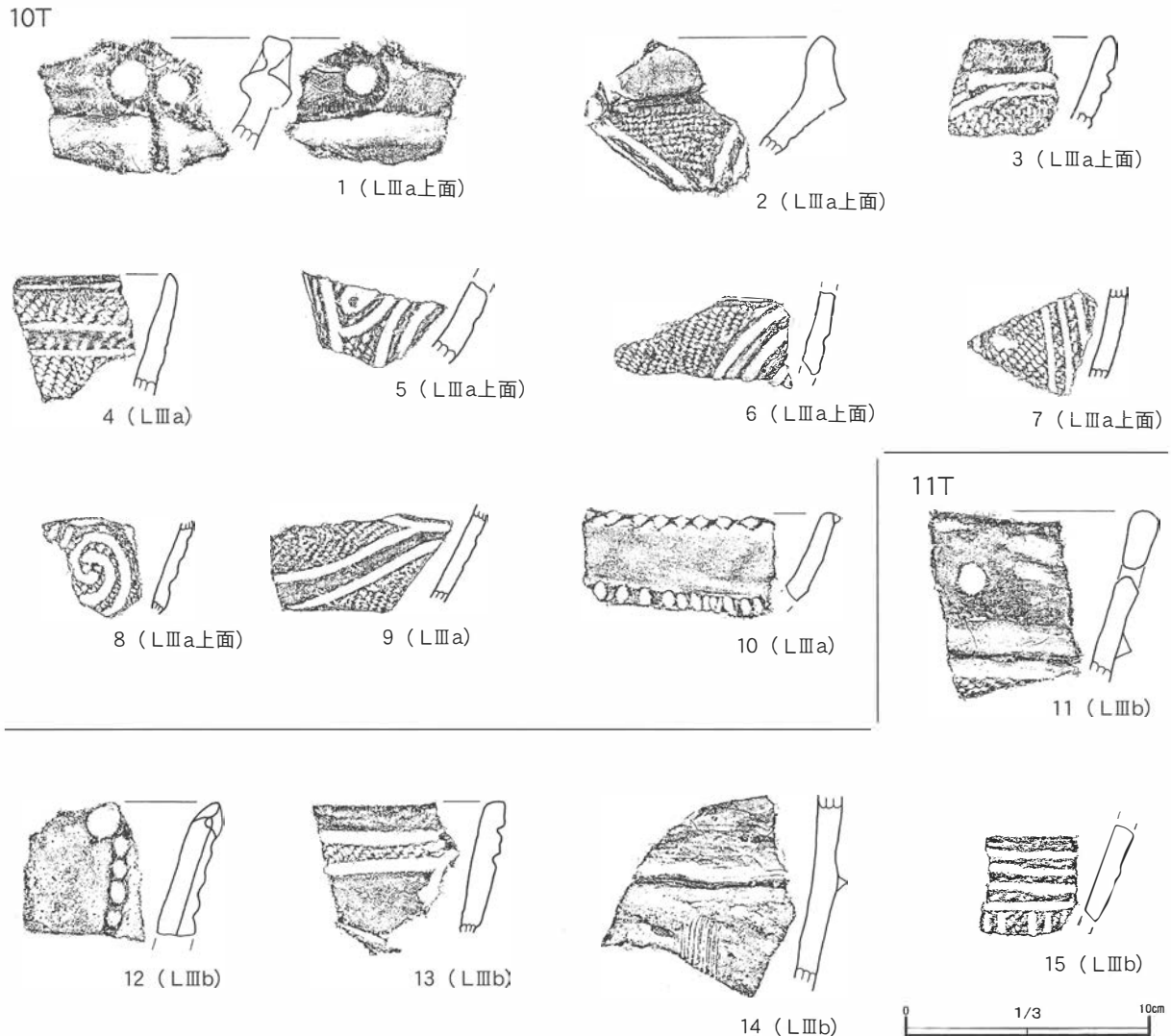


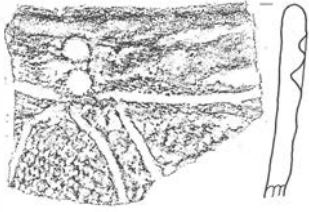
図37 10・11トレンチ出土遺物

縁部に貫通孔が施され、貫通孔下に施される隆沈線によって半円状の区画が認められ、その下位には押しつぶされたようなJ字文が施文されている。4は内外面に盲孔が認められ、沈線により曲線状のモチーフが描かれている。5は内外面に盲孔が見られ、内面には沈線が巡っている。6は沈線による口縁部区画下に磨消縄文で曲線状のモチーフを描出している。7は沈線で、9～13は磨消縄文で曲線状のモチーフを描いている。7はモチーフの中に刺突を加えている。11・12は同一個体である。8は横位沈線施文後、盲孔を施している。

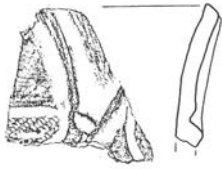
図38－7はIV－1類、1～4・6・8・13はIV－2類、5・9～12はIV類である。

図39－1は横位・縦位に刺突が施された隆帯が付けられている。2は両端に盲孔を有し、中央に沈溝が施されるノ字状の隆帯が口縁から垂下している。3は口縁部無文帯の区画を沈線でおこない、両端に盲孔を有し、中央に沈溝をもつノ字状の隆帯が施されている。4は口縁部に盲孔・沈線が、5は口縁部に沈線が施文されている。6は口縁部に沈線・貫通孔・盲孔が認められ、盲孔下部に2条一対の隆帯が付されている。7は外面に2個一対の盲孔・2条の沈線が、内面に盲孔・沈線が施されている。8は口縁部に貫通孔・盲孔が、貫通孔下部には沈線が

12T LI

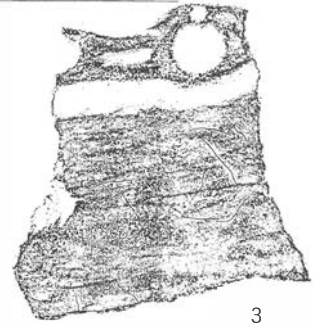
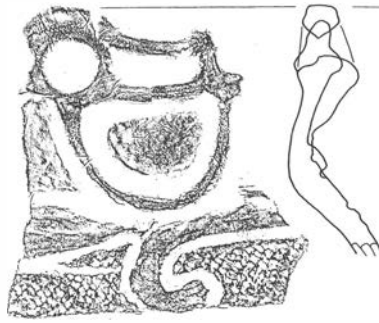


1

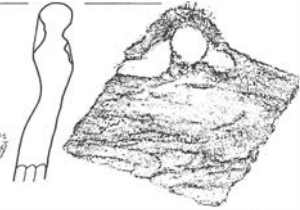
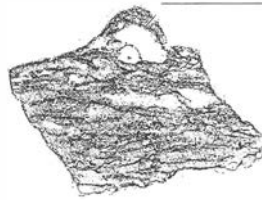


2

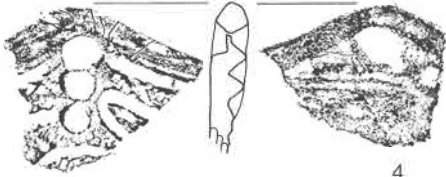
12T LI・IIa



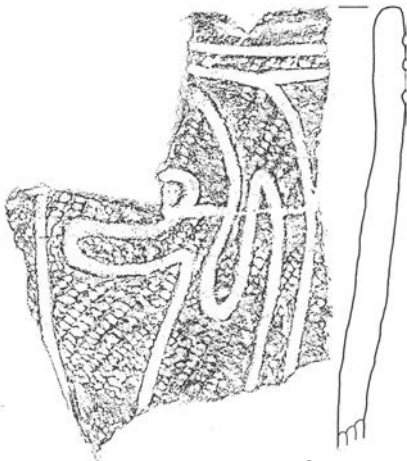
3



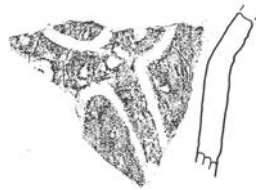
4



5



6



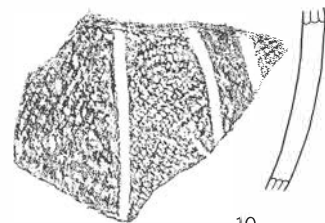
7



8



9



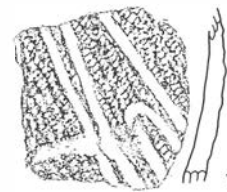
10



11



12



13

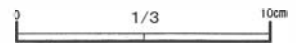


図38 12トレンチ出土遺物①

12T LIIa

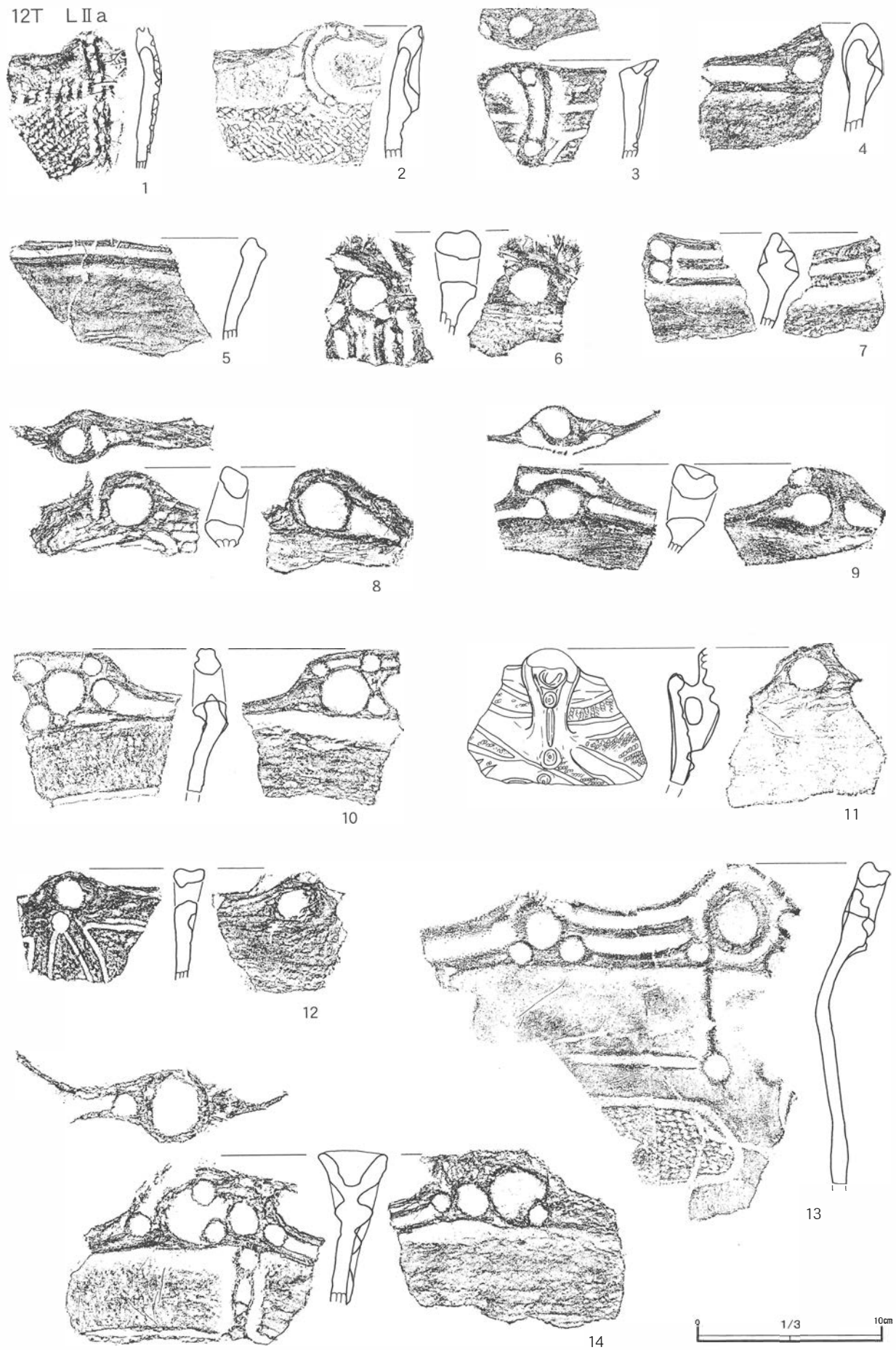


図39 12トレンチ出土遺物②

認められる。9は貫通孔、内外面に両端に盲孔を有する沈線が施文されている。10は貫通孔の周囲の外面に盲孔、内面に盲孔を両端にもつ沈線が施されている。11は盲孔・沈線を有する橋状把手が付けられている。また、磨消縄文で曲線状のモチーフが描かれている。12は貫通孔が認められ、磨消縄文により描出された曲線状のモチーフの交点に盲孔が施文されている。13は口縁が外傾する器形で、口縁部に周囲に沈線が巡る貫通孔・両端に盲孔を有する沈線が施されている。胴部には沈線で楕円状の文様が描かれている。14は口縁部に貫通孔・盲孔を両端に持つ沈線が施文され、刺突の施された隆帯が垂下している。

図39-1・2はIV-1類、3~14はIV-2類である。

図40-4・5・8は若干内湾し、6は外傾する器形である。1~3は磨消縄文で蕨手文が描出されており、2・3は区画沈線と蕨手文の交点に盲孔が施されている。4・5は磨消縄文で曲線状のモチーフが描かれている。6・7は沈線が横走している。

図40-1~5・8はIV-2類、6・7はV群である。

図41-1は沈線により帯状の区画が施されている。2・3は横位に走る隆沈線により区画し、その下部には磨消縄文で文様を描出している。4は隆帯施がされている。5~19は磨消縄文により曲線状のモチーフが描かれている。6~8は盲孔が認められ、9は刺突が施された隆帯が垂下している。10・17・18は蕨手文が描出されている。20は縦位の集合沈線間に波状集合沈

12T LIIa

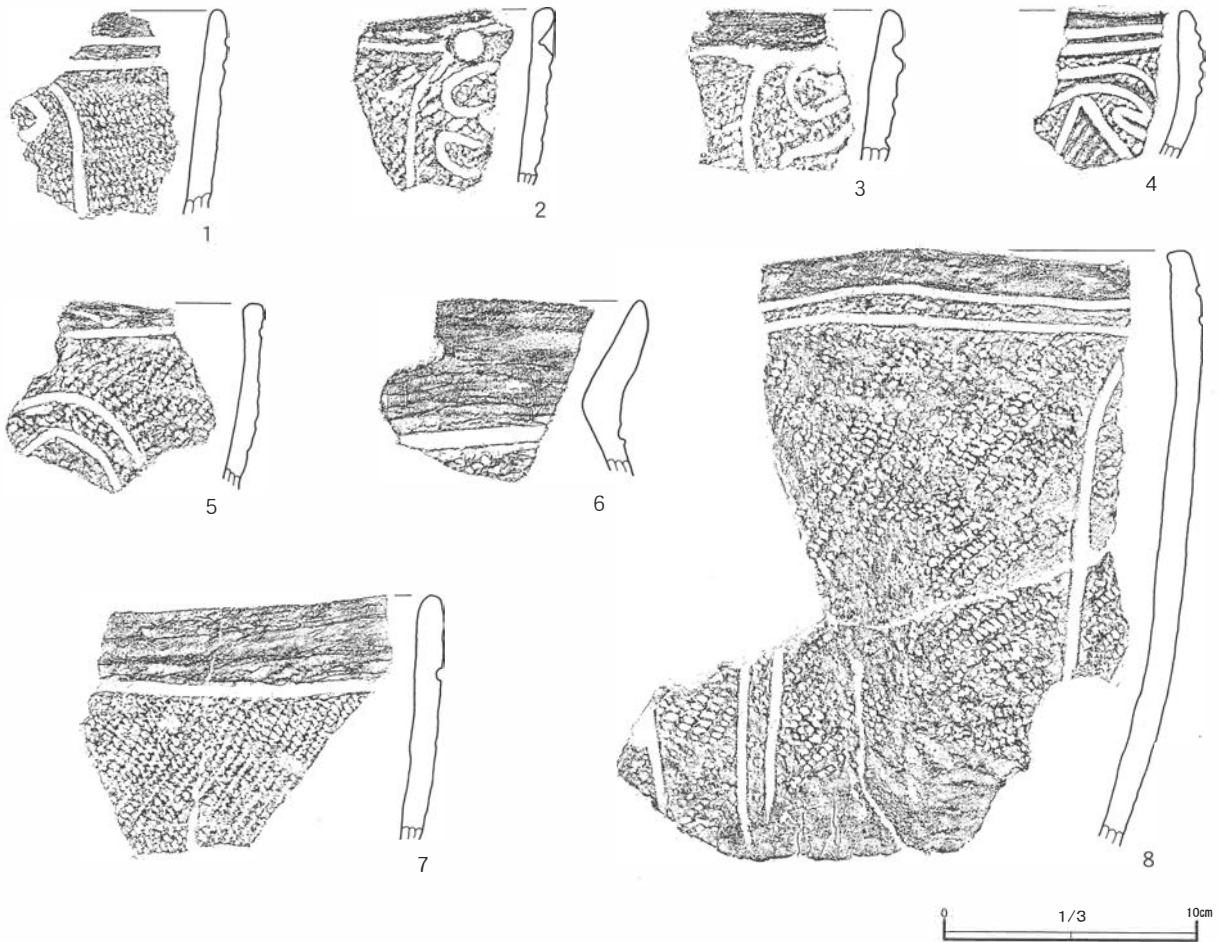


図40 12トレンチ出土遺物③

12T LIIa

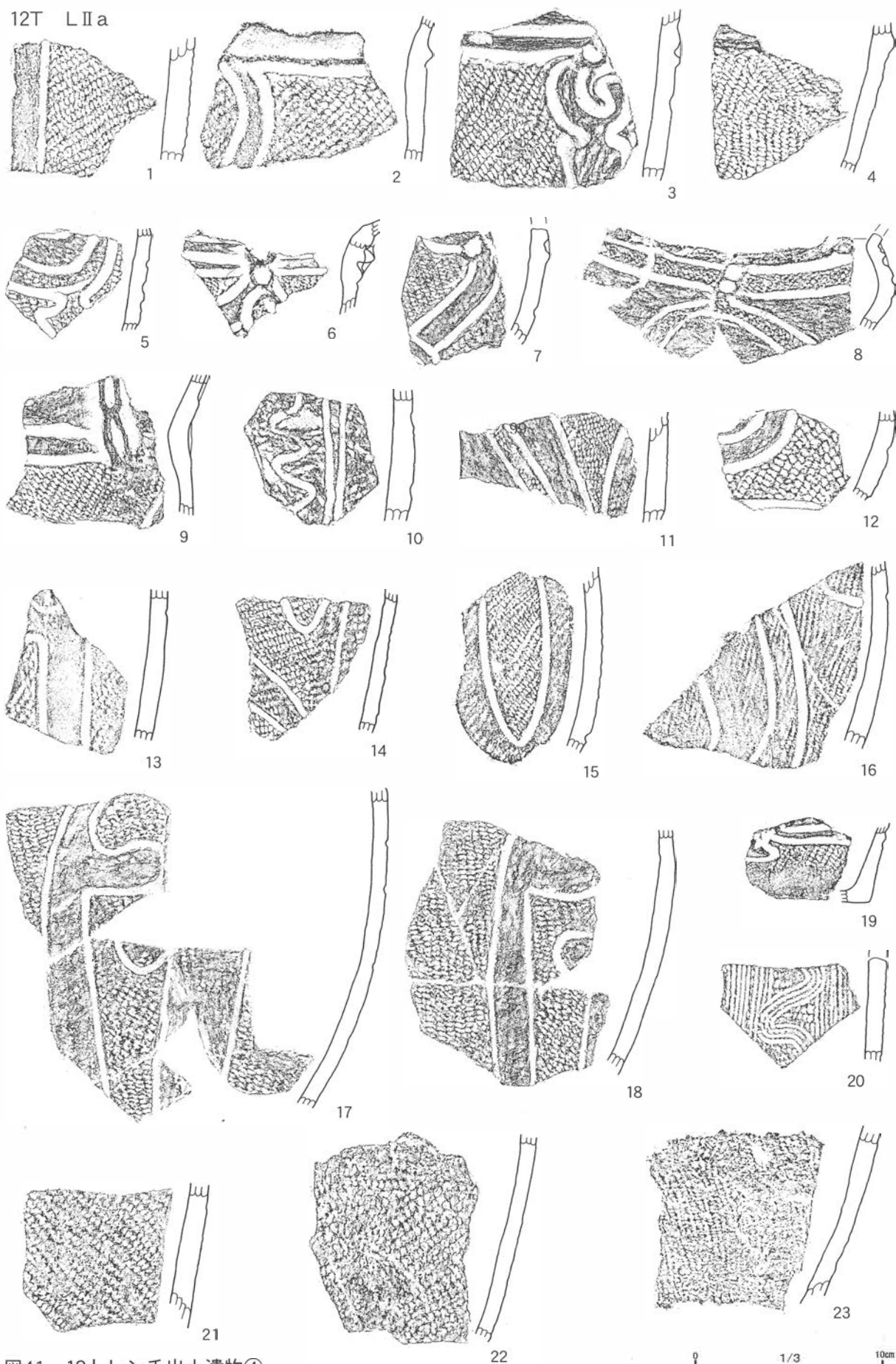
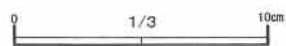


図41 12トレンチ出土遺物④



12T LIIa

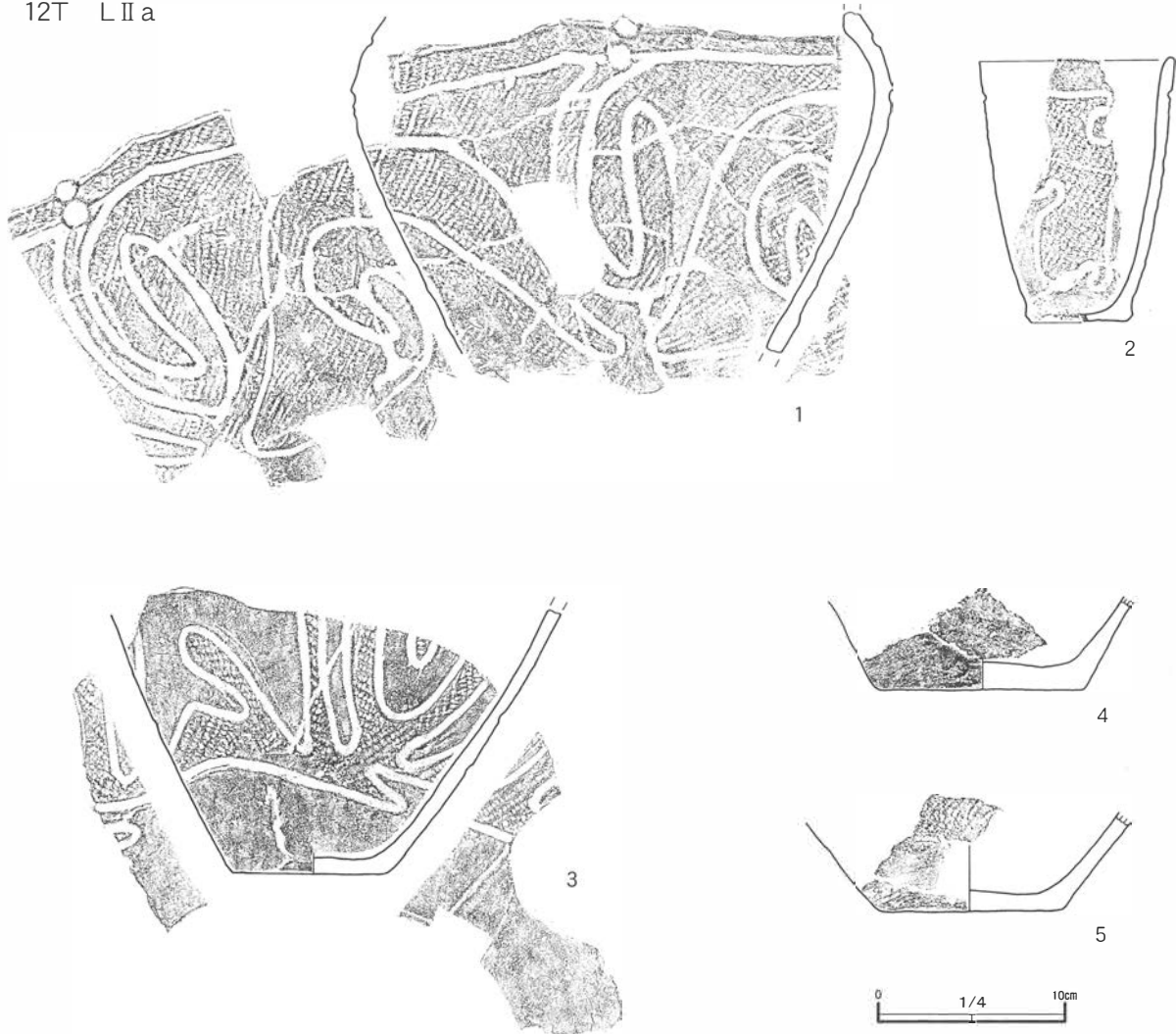


図42 12トレンチ出土遺物⑤

が描かれている。21～23はLR縄文が施文されている。

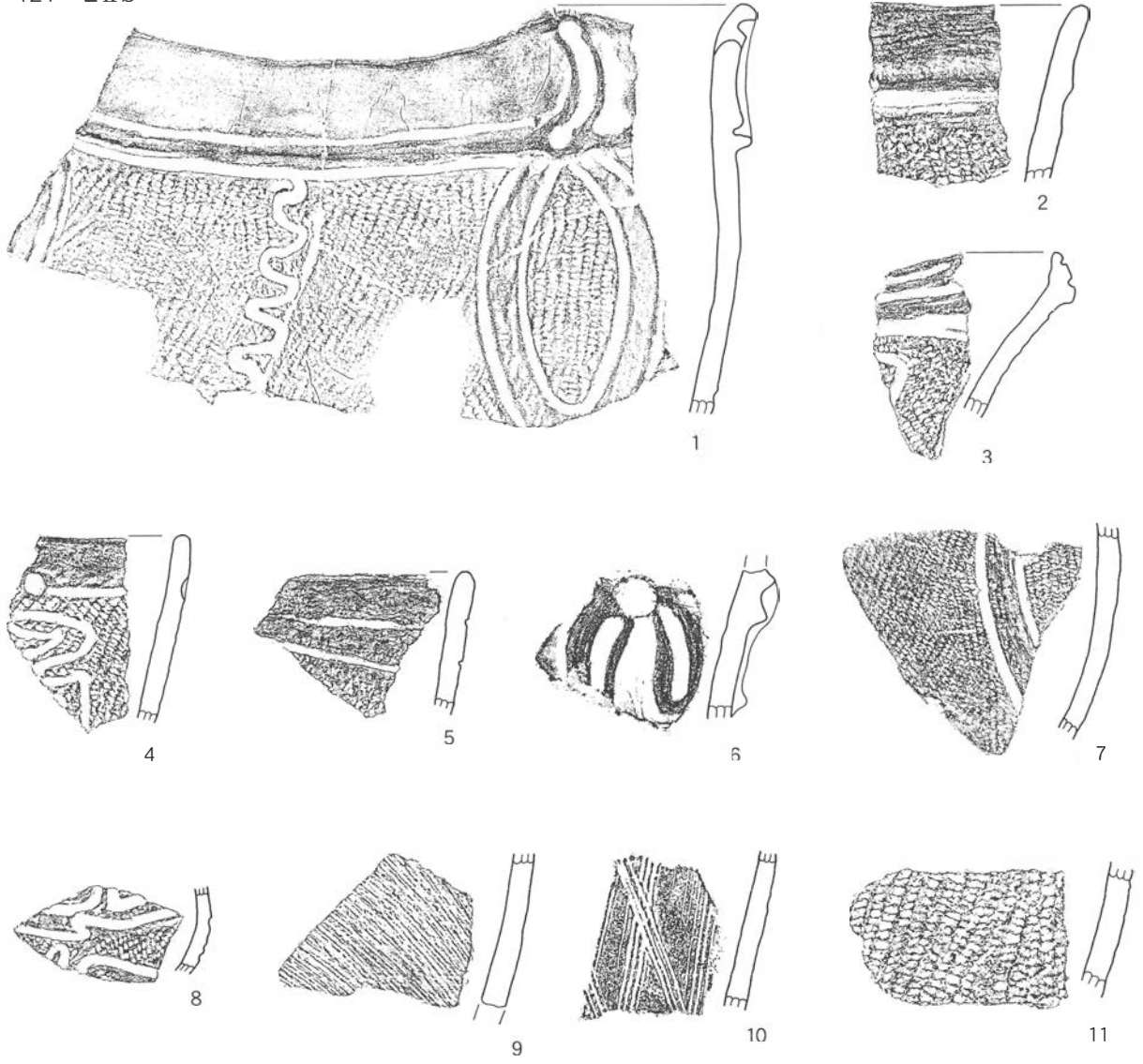
図41-1はⅢ群、2～4はⅣ-1類、6～9・19はⅣ-2類、20はⅣ-3類、5・10～18はⅣ群、21～23はⅤ群である。

図42-1～3は磨消縄文により曲線状のモチーフが描かれている。1は胴部上半が膨らみ、一旦括れる器形で、J字状のモチーフと横走する沈線の交点に2個一対の盲孔が施されている。2は底部から直線的に立ち上がる小型の土器で、口縁部を沈線で区画している。3は曲線状のモチーフが横位に連結している。4は無文で、5はLR縄文が施文されている。

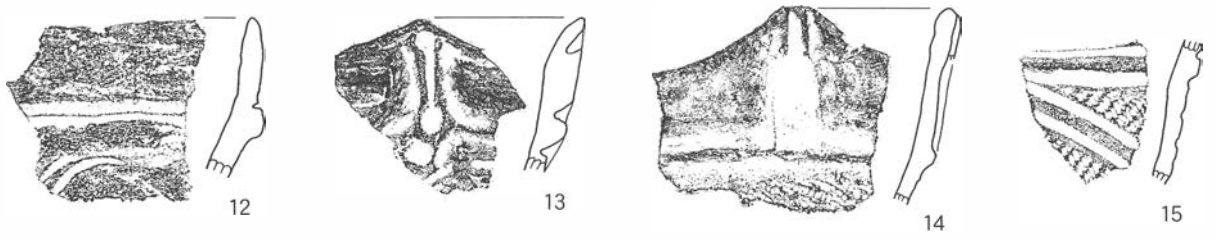
図42-1～3はⅣ-2類、4・5はⅤ類である。

図43-1は口縁部から両端に盲孔を有し、中央に沈溝をもつ隆帯が垂下しており、横走する隆沈線と交わる。この交点から楕円状のモチーフが磨消縄文で描かれている。隆沈線下には蛇行沈線が縦走している。2は隆帯で口縁部無文帯を区画している。3は口縁部・胴部に沈線が認められる。4は口縁部無文を沈線で区画し、盲孔を施している。胴部には沈線で曲線状のモチーフが描かれている。5は沈線が横走している。6は盲孔・沈溝をもつ隆帯が施されている。

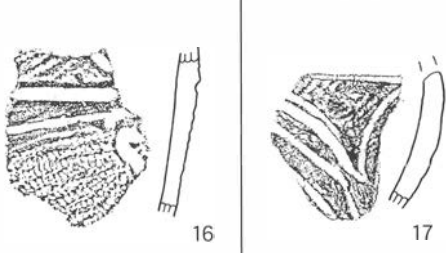
12T LIIb



12T LIIc



12T LIIIa



13T LI・IIe

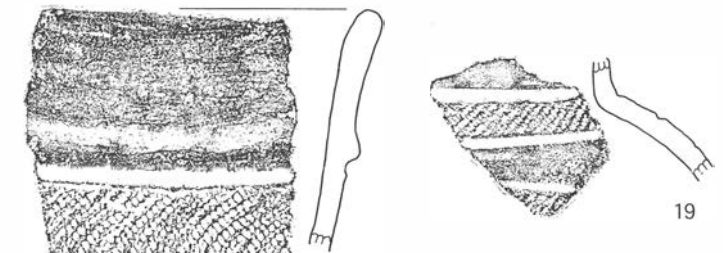
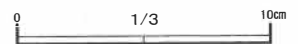


図43 12・13トレンチ出土遺物



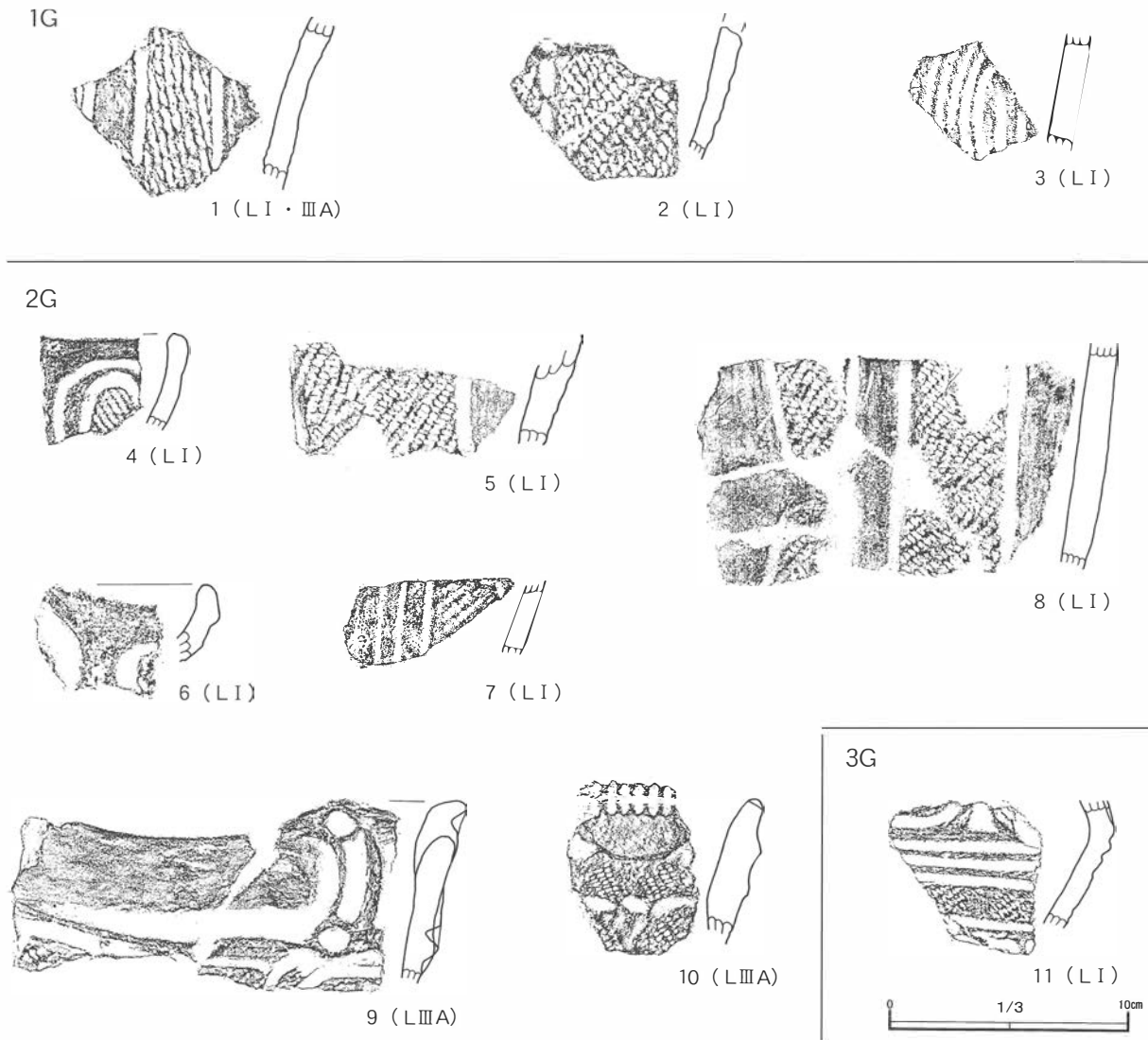


図44 1・2・3グリット出土遺物

7・8は磨消縄文で曲線状のモチーフを描出している。9・10は条線文が施されている。11はRL縄文が施文されている。12・13は隆沈線で、14は隆線で口縁部が区画されている。12は隆沈線下に沈線が施され、13は両端に盲孔を有し、中央に沈溝をもつ隆帯が付けられている。14は沈溝をもつ隆帯が垂下している。15は隆沈線が施文されている。16は磨消縄文で文様を描出している。17は磨消縄文で曲線状のモチーフを描出している。18は隆沈線により口縁部無文帯の区画をおこなっている。19は沈線で横位の帯状区画が施されている。

図43 - 19はⅢ群、1～3・12～15・18はⅣ - 1類、4・8・16・17はⅣ - 2類、6・7はⅣ群、5・9～11はⅤ群である。

図44 - 1～3は1グリット、4～10は2グリット、11は3グリットから出土した土器である。1は沈線で帯状区画が施されている。2は円形浮文・列点状沈線が認められる。3は集合沈線で文様を描出している。4は2条の沈線で楕円状区画が、5・7・8は沈線よる帯状区画が、6は沈線で曲線状区画が施されている。9は口縁部から両端に盲孔を有し、中央に沈溝をもつ隆帯が垂下して横走る隆帯と交わる。10は把手と考えられ、上部にキザミ・隆線が施されて

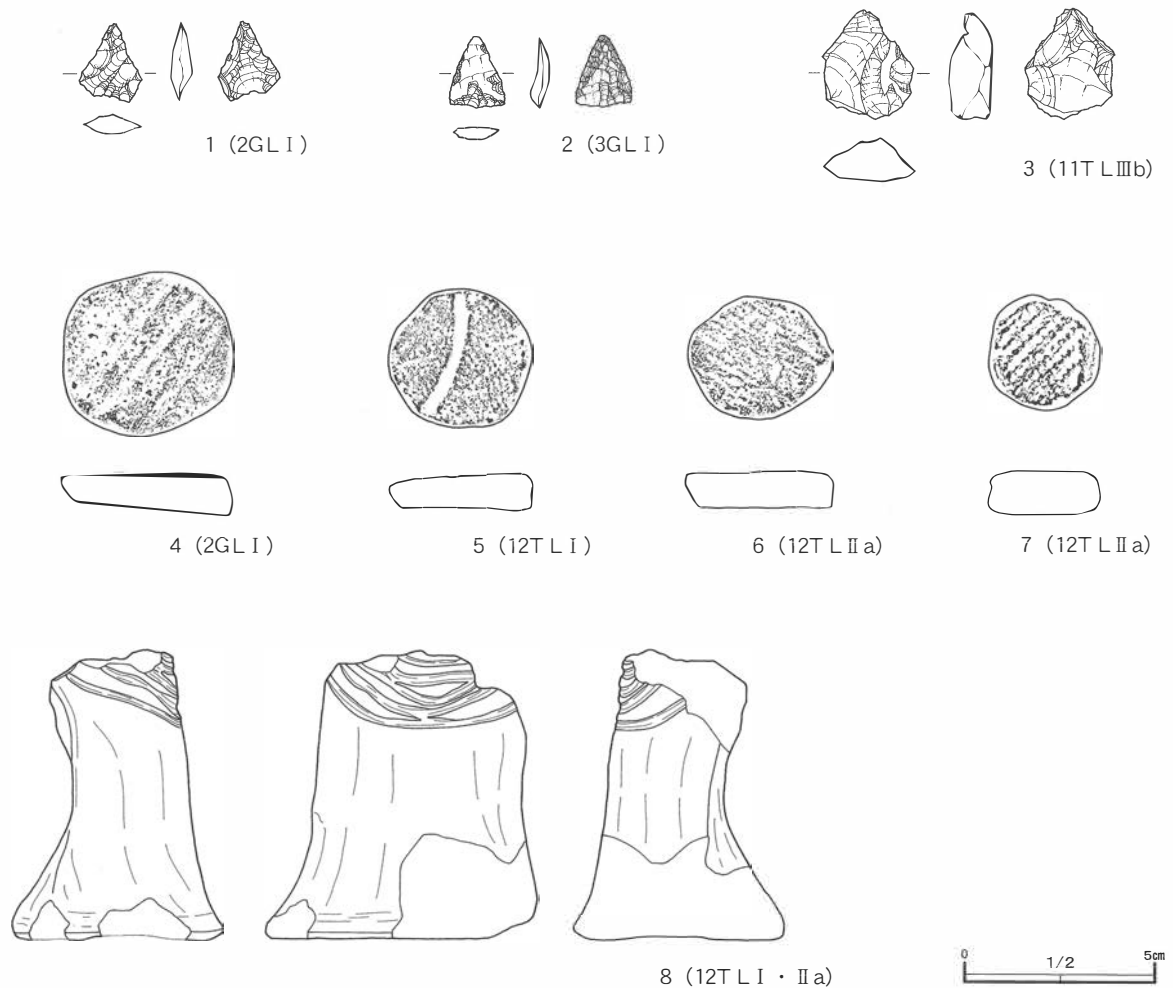


図45 石器・土製品

いる。11は隆沈線で区画し、区画下には沈線が横走している。

図44-11はⅡ群、4・7・8はⅢ-1類、10はⅢ-2類、1・5・6はⅢ群、9はⅣ-1類、3はⅣ-2類、2・10はⅣ群である。

図45には試掘調査で出土した石器・土製品を図示した。石器・土製品の出土量は土器の出土量と比較すると少なく、図示できたのは石器で3点、土製品で6点のみである。1・2は無茎石鏃である。1は2グリットL I、2は3グリットL Iから出土した。1・2は明確な挟りは認められない。両面に剥離痕が認められ、特に刃部については丁寧な剥離調整がなされている。石材は1が玉髄、2が鉄石英である。3は4トレンチL III bから出土した剥片である。両面に剥離痕が認められるが、刃部の作り出し等の細かい剥離調整はおこなわれていない。石材は鉄石英である。4～7は土器片円盤で、すべて胴部が用いられて製作されている。5は沈線が施されている。4は2グリットL I、5～7は12トレンチL II aからの出土である。8は12トレンチL I・IIから出土した。破損しているため全体の形状は不明であるが、土偶の脚部と考えられる。上半部に半円状の5条の沈線が施文されている。

第V章 まとめ

第1節 遺物について

B地区の調査では縄文中期前葉（I群）～後期中葉（IV群）までの縄文土器が出土している。I群・II群土器に伴う遺構は検出されなかったためか、I群の土器は出土量が少量で小破片のみの出土であり、II群の土器は出土量が若干増加して大型破片が少量ながら出土するようになるものの、III・IV群土器の出土量と比較すると極めて少量である。III・IV群土器は出土量が増加するが、特に竪穴住居跡等の遺構検出に伴いIII-2類、IV-1・2類土器が主体的に出土している。

SI01・02・08・09からは、縄文帯により曲線状のモチーフを描くIII-2類土器が出土している（図10-1、図11-1・2・6・7、図13-1・6・7・11・15・16、図24-1・3・4、図26-3）。SI06炉からは、沈線で区画された無文帯で文様モチーフを描き、無文帯同士が切り合うIII-2類土器が出土している（図21-1）。これらの土器は、前者が本間氏の古段階に、後者が新段階に相当する（本間1990）。無文帯同士が切り合う土器が縄文帯で文様モチーフを描出する土器に後続する資料であるということは、すでに多くの研究者によって提示されている変遷案であるが、無文帯が切り合う図21-1が出土するSI06炉が、縄文帯で文様モチーフを描出する土器（図13-1等）が出土するSI02の堆積土を切って構築されているという層位的な裏付けから、本遺跡においてもIII-2類土器は従来唱えられていた変遷に沿っていることが認められた。

SI04からは出土している図18-4・5は口縁が波状を呈し、沈線による三角形・台形状のモチーフが描出されており加曽利E式の影響が看取できる。本遺跡では、これらの土器を位置付ける良好な層位関係は確認されなかったが、福島市愛宕原遺跡（武田1989）20号焼土遺構と1号住居跡との重複関係や旧本宮町（現本宮市）高木遺跡（大河原2003）の遺構の検出状況から、図18-4・5に類似する土器群はIII-2類に後続するものと判断される。また、三春町越田和遺跡（福島1996）23号住居跡では、図18-4・5と同段階の土器が綱取I式の前段階とされる土器と共半していることから、図18-4・5は綱取I式の前段階の土器と考えられる。本報告ではIV-1・2類土器が主体的に出土するSI04から出土したためIV-1類土器として扱ったが、これらの土器群については未だに型式設定がされておらず今後の課題である。

図18-4・5以外にも他地域の特徴をもつ土器が出土している。SI09の埋設土器（図26-1）は、頸部に幅広の沈線を横走させて口縁部無文帯を区画し、沈線下に条線文を施している。この土器は、大木式土器の文様施文方法とは異なり曾利式の影響を受けた土器と考えられる。大田和広畑遺跡から北西に約2.4km離れた大富西畑遺跡（吉田1991）からも条線文を持つ曾利系の土器が出土しており、縄文中期中葉～後葉に位置付けられている。これら曾利系の土器は、縄文中期中葉～後葉にかけて他地域との関係性が窺われる資料である。また、図34-9は2条の沈線施文後に横方向からの刺突が施されており、三十稲場式に比定される土器である。遺構外から出土したため相伴関係は不明である。三十稲場式土器は、大田和広畑遺跡の周囲に

所在する浦尻貝塚ならびに大富西畑遺跡からも出土しており、浜通り地方北部の縄文後期前葉段階においては北陸系の土器が一定量出土することが指摘できる。

今回の調査では多量の土器が出土したものの、これらを位置付けるために必要な遺構の重複関係・遺物の出土状況等の層位的事例が乏しかったため、詳細な土器変遷・共伴関係を把握することはできなかった。大田和広畑遺跡における詳細な土器変遷・共伴関係については、今後の調査事例の増加を待って検討していきたい。

第2節 遺構について

調査区の幅が約2mという狭さのため全容を捉えられたものがなく個々の住居については不明な点が多いが、ここで改めて住居の重複関係・出土土器から前後関係を整理する。

調査区東側では、SI01の堆積土上位にSI03の床面等の痕跡は確認されないことからSI01の方が新しいと考えられる。また、SI03の堆積土はSI02に切られており、SI02の堆積土はSI06炉に切られている。SI01とSI02は直接的な重複関係はないが、出土遺物はともに縄文帯により曲線状のモチーフを描出するⅢ-2類の土器が中心であることから、SI01・SI02とも同時期に属すると推測される。これらのことから構築順序を古い順に整理すると、SI03→SI01・02→SI06炉となる。

調査区西側では、SI09の堆積土を切ってSI08が構築されていることから、構築順序はSI09→SI08となる。ただし、SI08・09からは沈線で曲線状のモチーフが描かれるⅢ-2類土器が出土しており、土器からみた時期差は認められない。また、SI01・02から出土したⅢ-2類土器と文様モチーフ・文様の表現方法に共通する点が認められることから、SI08・09はSI01・02と同時期に属すると考えられる。

調査区中央では、SI07の上面にSI04が構築されていることから構築順序はSI07→SI04となる。SI04・07からはⅣ群土器が出土していることから後期前葉に属すると考えられる。ただし、SI04については出土遺物が堆積土からⅣ-1類の土器1点しか出土しておらず、上位に構築されたSI04の影響が考えられることから、後期前葉に所属するとは断定できいためSI07の所属時期が遡る可能性がある。SI05は他の住居跡と重複関係がなく、詳細な時期を決定できる遺物も出土していないが、Ⅲ群土器が出土することから中期後葉～末に属すると推測される。

以上のことから、本調査で検出された住居跡については3時期に大別できる。すなわち、縄文帯で曲線状のモチーフを描出するⅢ-2類の時期に属するA期、A期の土器に後続する沈線による無文帯で文様を描出し、無文帯同士に切り合いが認められるⅢ-2類の時期に属するB期、Ⅳ群土器（後期前葉）の時期に所属するC期である。各住居跡の時期については、A期以前にSI03、A期にSI01・02・08・09、B期にSI06炉、A期以前～B期にSI05、C期以前にSI07、C期にSI04となる。

次に住居の柱構造について考えてみたい。SI01・02・07・09で主柱穴を確認したが、SI01・07・09は柱構造については今回の調査成果からは言及できない。SI02については主柱穴の配置状況から5本柱もしくは4本以上の柱をもつ構造と推測される。また、SI03・04・05・08

は明確な支柱穴が確認されない。SI05については周溝中（壁際）からピットが検出されていることから壁柱穴をもつ構造である可能性が指摘できる。

続いて複式炉について触れてみたい。SI03・06から複式炉が検出された。両複式炉とも長軸方向が北東－南西で同一方向である。SI03炉は壊されているため詳細な構造は不明であるが、残存状況からは、土器埋設部ならびに石組部で構成され前庭部をもたない構造と判断される。SI06炉については、飯館村上ノ台A遺跡（山内1990）の報告に示されている複式炉の形態の変遷に照らし合わせて考えてみたい。SI06炉は土器埋設部と石組部で構成されており前庭部をもたない。平面形は石組部から土器埋設部にかけて括れを有する。このような複式炉は山内氏の示した変遷図のⅢ～Ⅵ段階に認められるが、SI06炉は埋設土器の周囲にレキが配置されていることからⅥ段階の複式炉と考えられる。山内氏はこのⅥ段階の複式炉に伴う土器として細い沈線に縁取られた無文帯同士の切り合いが認められる土器を挙げている。SI06炉からは図21-1に示した沈線で縁取られた無文帯が切り合う土器が出土しており、山内氏の観察と符合していることから、大田和広畑遺跡においても上ノ台A遺跡の複式炉の変遷と同様に変遷していた可能性が考えられる。

最後に今回の調査成果から大田和広畑遺跡における縄文縄文時代の時期別の状況をまとめてみたい。遺構は検出されなかったが大木7b式土器が出土していることから、中期前葉段階で活動が開始されたと推測される。中期中葉～後葉段階についても前段階と同様に遺構は確認されていないものの、大木8a～9式の土器が出土しており継続的に活動していたと考えられる。大木10式の前半段階（A期）になると、竪穴住居が構築されて集落が形成される。竪穴住居数は他の時期と比較すると多く、さらに住居同士の重複が認められる。大木10式の後半段階（B期）から綱取式段階（C期）にかけては竪穴住居の数を減少させながらも継続して集落が営まれる。綱取Ⅱ式段階には、遺物包含層であるLⅢAが遺構上面に堆積していることから、本調査地点における集落の形成は綱取Ⅱ式段階以前に終焉を迎えたと推察される。

本調査地点では、検出された遺構の全てにおいて重複関係が認められ、遺構が集中的に分布する状況が確認されている。このことから、縄文中期末から後期前葉にかけては継続的に同一地域に遺構を構築していたと推測され、集落の中心地であった可能性が指摘できる。また、本調査地点の南側は沖積地になっており、段丘の縁辺部に縄文中期末～後期前葉の集落が形成されていたことが明らかとなった。

引用・参考文献

- 新井達哉 2004 『和台遺跡 2』 飯野町埋蔵文化財報告書第 6 集 飯野町教育委員会
大河原勉ほか 2003 『阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告 3 高木・北ノ脇遺跡』
福島県文化財調査報告書第 402 集 福島県教育委員会ほか
- 大竹憲治 1990 『船引・堂平遺跡』 船引町文化財調査報告第 8 冊 船引町教育委員会
大竹憲治 1992 『矢大臣（新田）遺跡』 小野町教育委員会
大竹憲治 1993 『矢大臣遺跡Ⅱ』 小野町埋蔵文化財調査報告第 5 冊 小野町教育委員会
大竹憲治 1994 『矢大臣遺跡Ⅲ』 小野町埋蔵文化財調査報告第 7 冊 小野町教育委員会
大竹憲治 1997 『矢大臣遺跡Ⅳ』 小野町埋蔵文化財調査報告第 8 冊 小野町教育委員会
大竹憲治 1998 『大越・岡平遺跡』 大越町埋蔵文化財調査報告第 17 冊 大越町教育委員会
- 押山雄三ほか 2005 『町 B 遺跡』 郡山市教育委員会
門脇秀典ほか 2003 『馬場前遺跡（2・3 次調査）』『常磐自動車道遺跡調査報告 34』
福島県文化財調査報告書第 398 集 福島県教育委員会ほか
- 川田強 2006 『浦尻貝塚 2』 南相馬市埋蔵文化財調査報告書第 1 集 南相馬市教育委員会
佐川久ほか 2006 『南相馬市内胃液発掘調査報告書 2』 南相馬市埋蔵文化財調査報告書第 3 集
南相馬市教育委員会
- 志賀敏行 1992 「東北地方南部における縄文時代中期末の土器様相」『史峰 17』 新進考古学同人会
鈴鹿良一ほか 1984 「上ノ台 A 遺跡（第 1 次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告 V』
福島県文化財調査報告書第 128 集 福島県教育委員会ほか
- 鈴鹿良一 1986 「複式炉と敷石住居跡」『福島の研究 1（地質考古篇）』 清文堂
鈴鹿良一ほか 1990 「上ノ台 D 遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告 X V』 福島県文化財調査報告書第 231 集
福島県教育委員会ほか
- 鈴木源 1994 「綱取 I 式土器再編」『史峰 20』 新進考古学同人会
鈴木源 1995 「大木 10 式土器覚書」『史峰 21』 新進考古学同人会
鈴木源 1997 「綱取 II 式土器覚書」『史峰 23』 新進考古学同人会
武田耕平 1989 『愛宕原遺跡』 福島市埋蔵文化財報告書第 31 集 福島市教育委員会ほか
西戸純一ほか 2003 『和台遺跡』 飯野町埋蔵文化財報告書第 5 集 飯野町教育委員会
丹羽茂 1981 「大木式土器」『縄文文化の研究 4』 雄山閣
丹羽茂 1989 「中期大木式様式」『縄文土器大観 1』 小学館
能登谷宣康ほか 2001 「馬場前遺跡（1 次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告 25』
福島県文化財調査報告書第 378 集 福島県教育委員会ほか
- 福島雅儀ほか 1985 「小田口 D 遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告 18』 福島県文化財調査報告書第 147 集
福島県教育委員会ほか
- 福島雅儀ほか 1989 「柴原 A 遺跡」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告 2』 福島県文化財調査報告書第 289 集
福島県教育委員会ほか
- 福島雅儀ほか 1991 「仲平遺跡（第 3 次）」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告 4』
福島県文化財調査報告書第 254 集 福島県教育委員会ほか
- 福島雅儀ほか 1993 「四合内 B 遺跡」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告 7』 福島県文化財調査報告書第 289 集
福島県教育委員会ほか
- 福島雅儀ほか 1996 「越田和遺跡」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告 8』 福島県文化財調査報告書第 322 集
福島県教育委員会ほか
- 逸見克巳 2000 『後田遺跡』 船引町文化財調査報告書第 26 集 船引町教育委員会
本間宏ほか 1990 「北向遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告 7』 福島県文化財調査報告書第 232 集
福島県教育委員会ほか
- 本間宏ほか 1993 「馬場平 B 遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告 20』 福島県文化財調査報告書 291 集
福島県教育委員会ほか
- 馬目順一ほか 1975 『大畑貝塚調査報告』 福島県・いわき市教育委員会
馬目順一 1982 「南東北」『シンボジュウム堀之内式土器資料集』 市立市川考古資料館
目黒吉明 1983 「住居の炉」『縄文文化研究 6』 雄山閣
山内幹夫ほか 1990 「上ノ台 A 遺跡（第 2 次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告 X IV』
福島県文化財調査報告書第 230 集 福島県教育委員会ほか
- 山内幹夫ほか 2002 「鍛冶屋遺跡（3 次調査）」『常磐自動車道遺跡発掘調査 28』
福島県文化財調査報告書第 387 集 福島県教育委員会ほか
- 山岸英夫ほか 1991 「法正尻遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告 11』 福島県文化財調査報告書第 243 集
福島県教育委員会ほか
- 吉田功ほか 1991 「大富西畑遺跡」『請戸川地区遺跡発掘調査報告 I』 福島県文化財調査報告書第 252 集
福島県教育委員会
- 吉田滋夫ほか 2002 「馬場前遺跡（2 次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告 29』
福島県文化財調査報告書第 388 集 福島県教育委員会ほか

写 真 图 版



1 大田和広畑遺跡遠景
(南から)



2 大田和広畑遺跡近景
(南から)



3 A地区全景 (西から)



1 B地区遺構確認状況①（東から）



2 B地区遺構確認状況②（北東から）



3 B地区遺構確認状況③（南東から）



4 B地区全景（東から）



5 B地区北壁断面①（南西から）



6 B地区北壁断面②（南西から）



1 1号住居跡（西から）



2 1号住居跡断面（北西から）



3 1号住居跡遺物出土状況（西から）



4 1号住居跡ピット1（東から）



5 1号住居跡ピット1断面（北西から）



1 2号住居跡（西から）



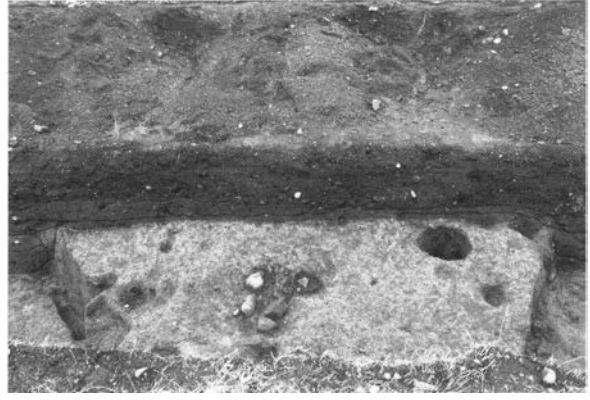
2 2号住居跡断面
（南西から）



3 2号住居跡遺物出土
状況（東から）



1 3号住居跡（南西から）



2 3号住居跡断面（南から）



3 3号住居炉跡（南西から）



4 3号住居炉土器埋設断面（南から）



5 5号住居跡（東から）



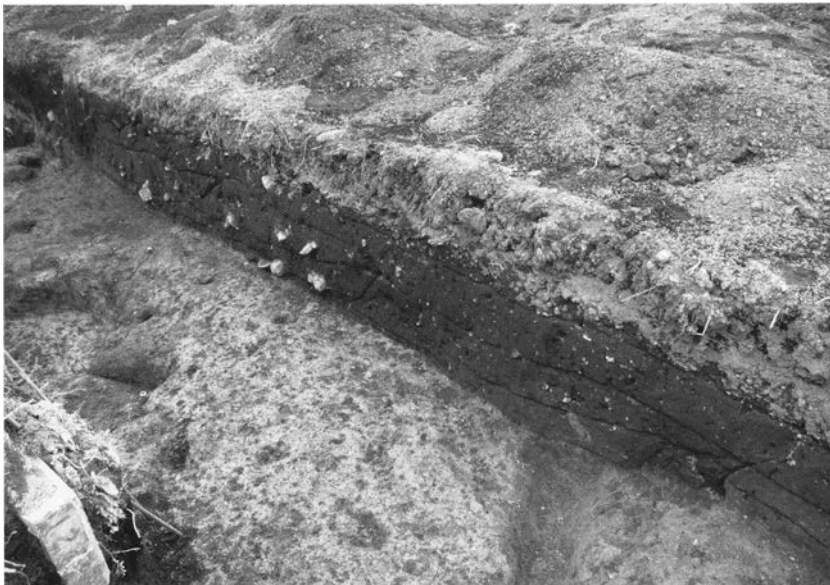
6 5号住居跡断面①（南から）



7 5号住居跡断面②（南から）



1 4号住居跡(北東から)



2 4号住居跡断面
(南東から)



3 4号住居跡埋設土器
断面(北から)



1 6号住居炉跡
(南西から)



2 6号住居炉跡断面
(北西から)



3 6号住居炉跡断割
状況 (北西から)



1 4号・7号住居跡（東から）



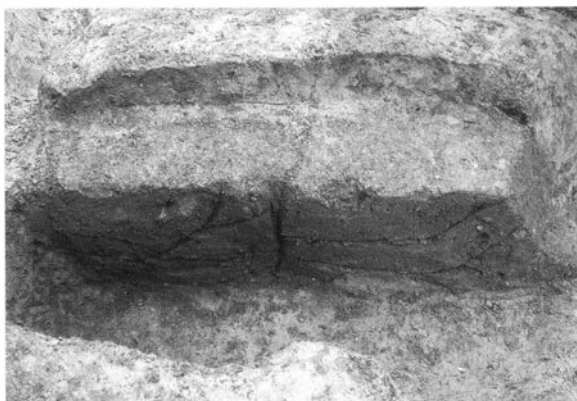
2 7号住居跡（東から）



3 7号住居跡断面（北から）



4 7号住居跡ピット3断面（北から）



5 7号住居跡ピット1・2（東から）



6 7号住居跡ピット1・2断面（西から）



1 8号住居跡（西から）



2 8号住居跡断面
（北西から）



3 8号住居跡遺物出土
状況（南から）



1 9号住居跡（西から）



2 9号住居跡断面（南から）



3 9号住居炉跡断面（北から）



4 9号住居跡埋設土器（南から）



5 9号住居跡埋設土器断面（南から）



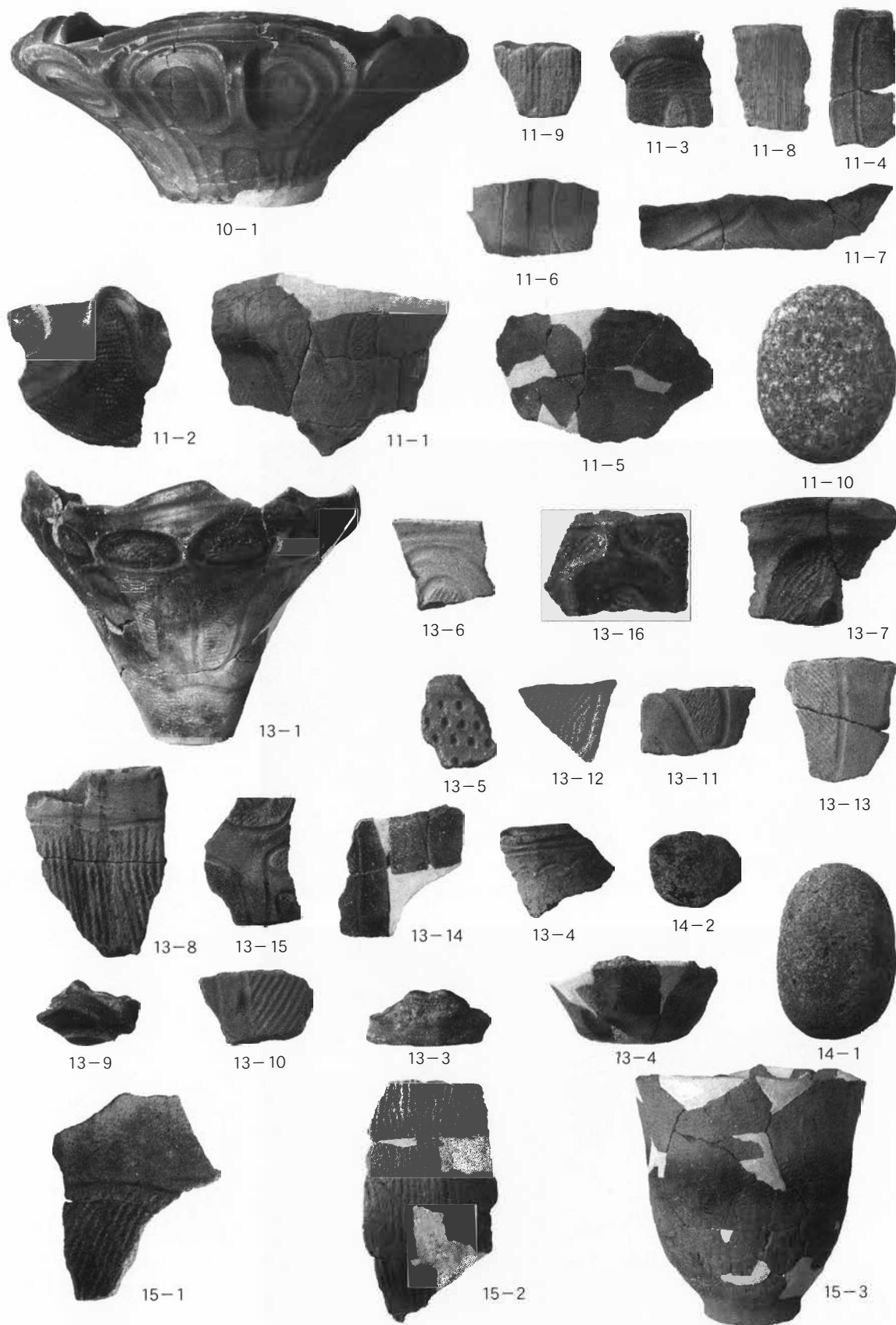
1 1号土坑（北から）



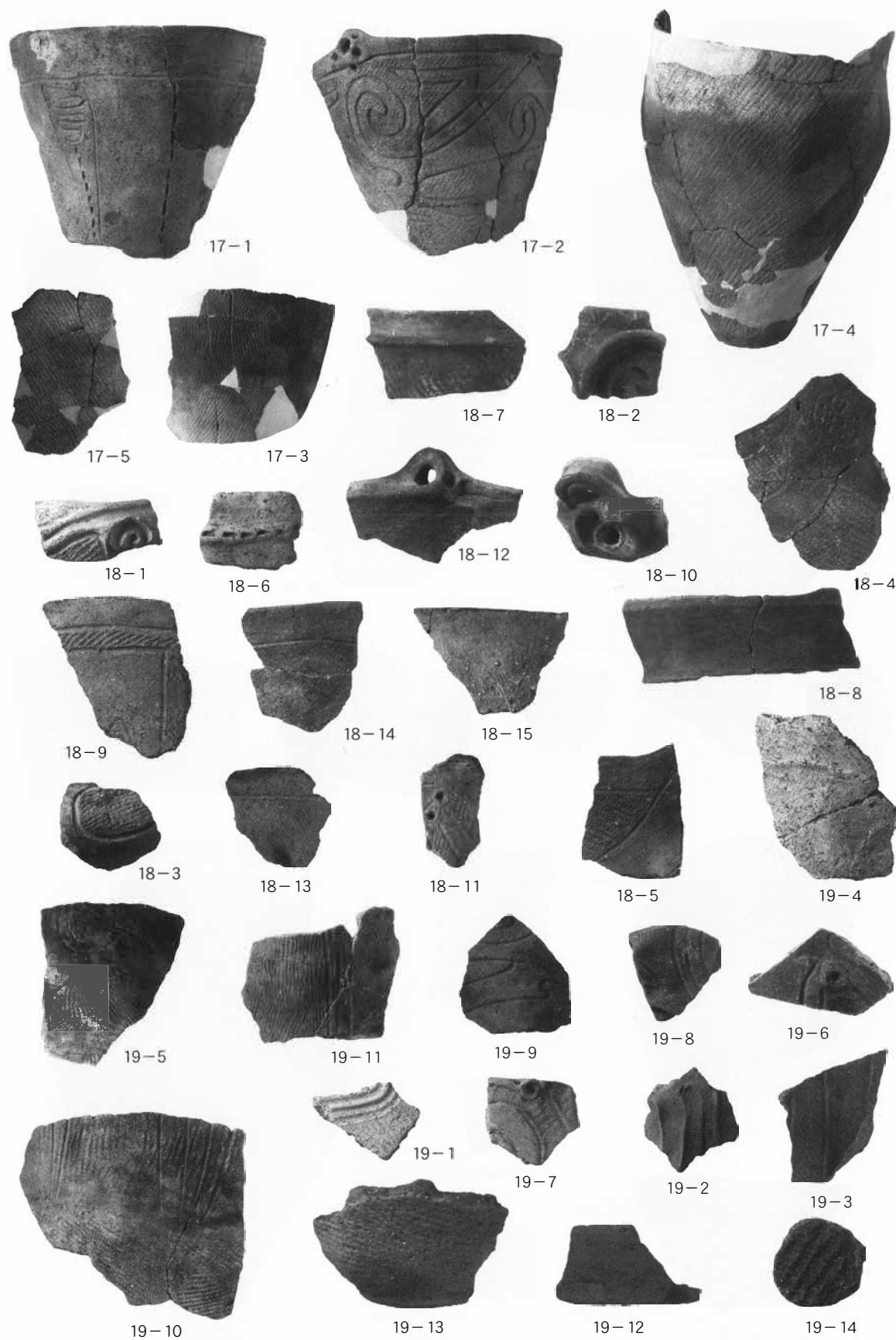
2 1号土坑断面（北から）



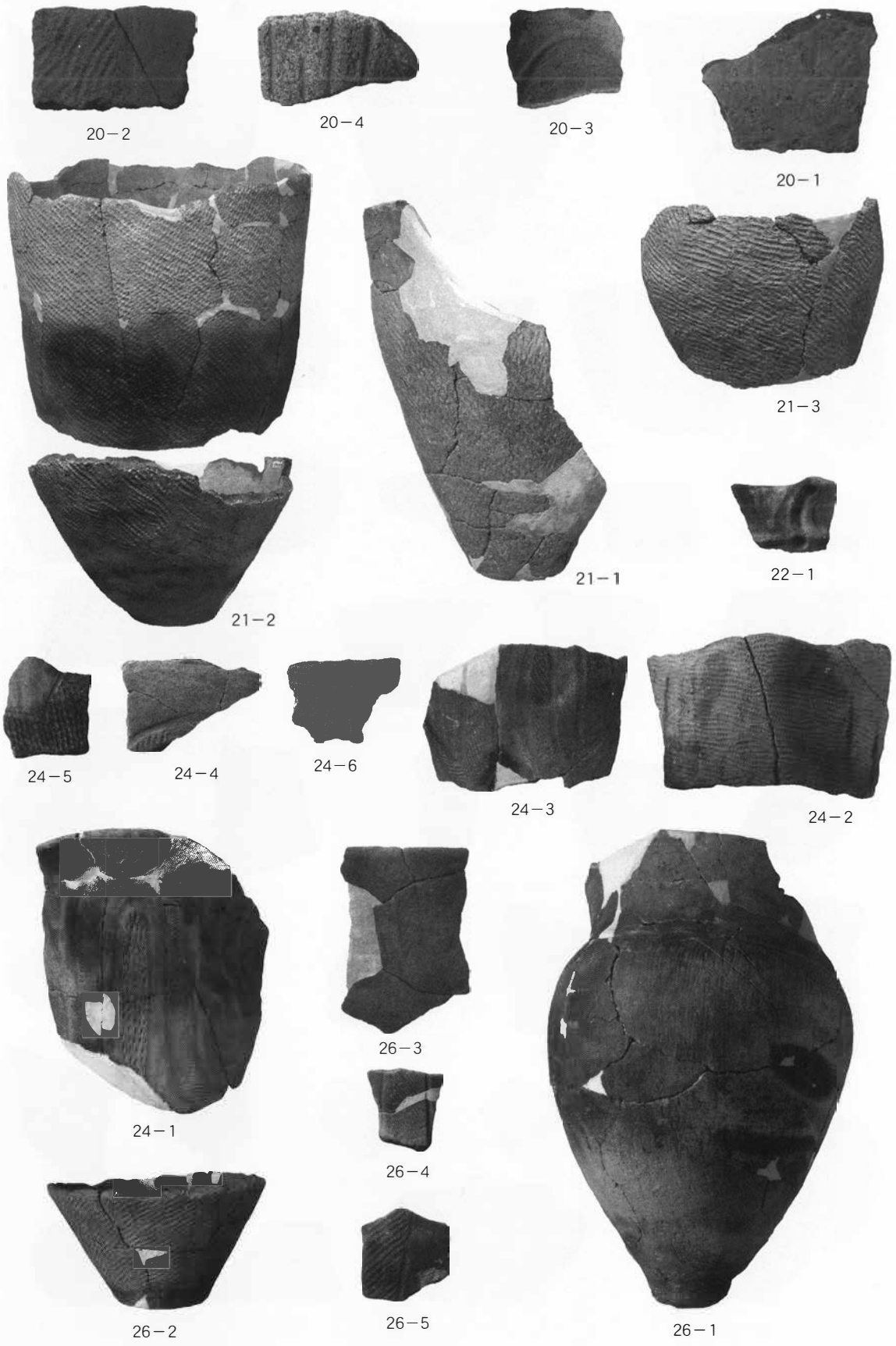
3 2号土坑（南から）



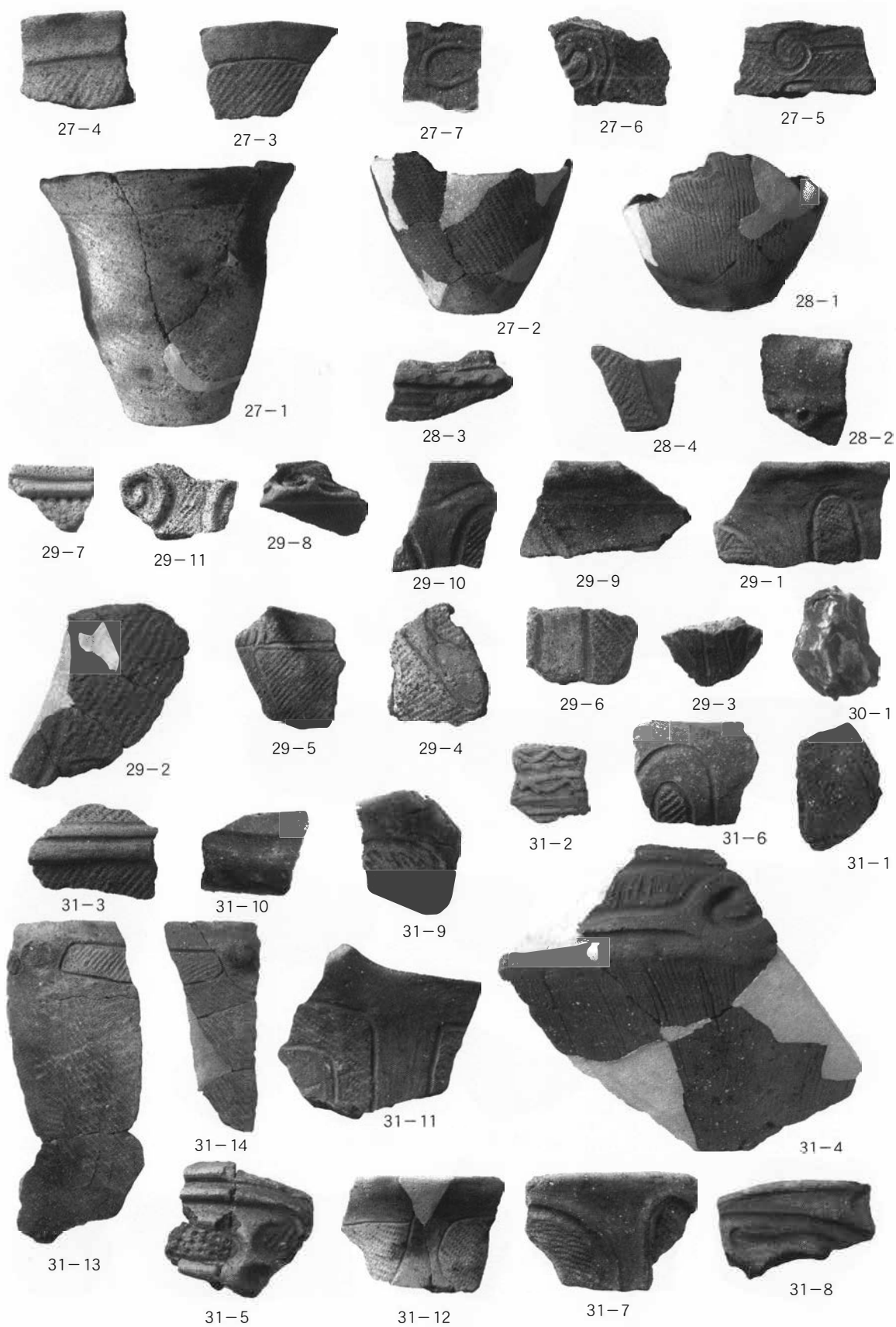
1 ~ 3号住居跡出土土器・石器・土製品



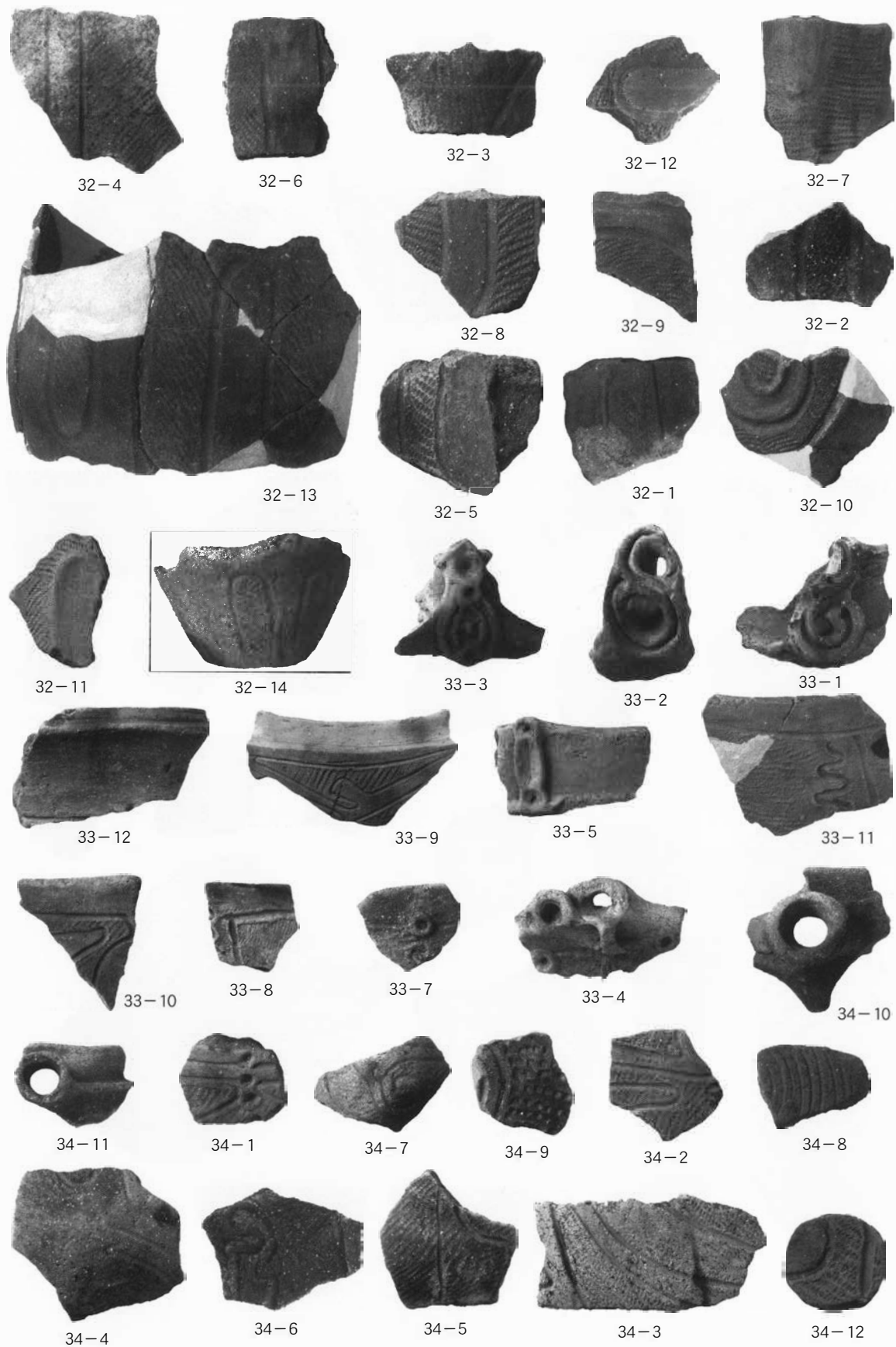
4号住居跡出土土器・土製品



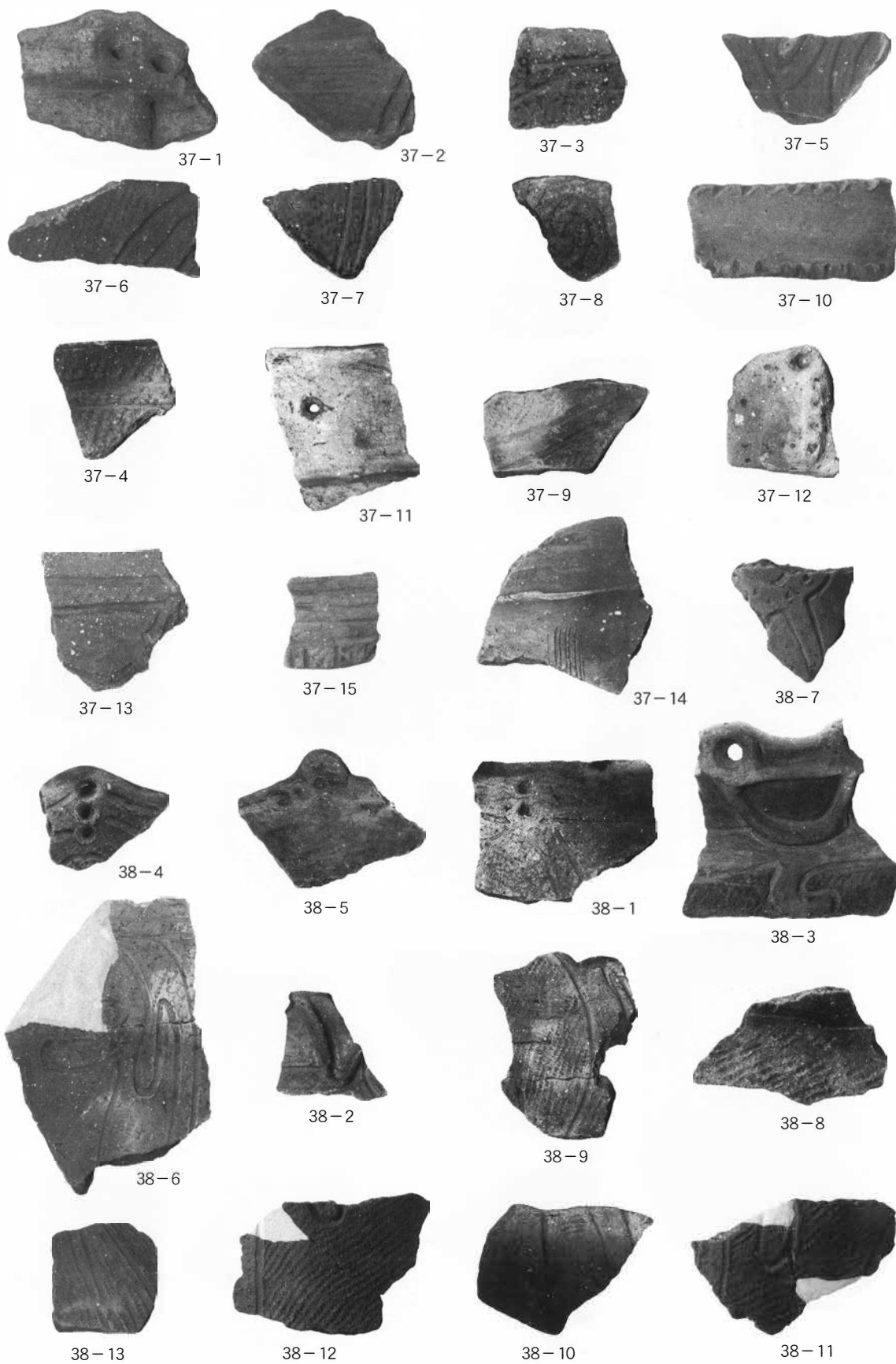
5 ~ 9号住居跡出土土器



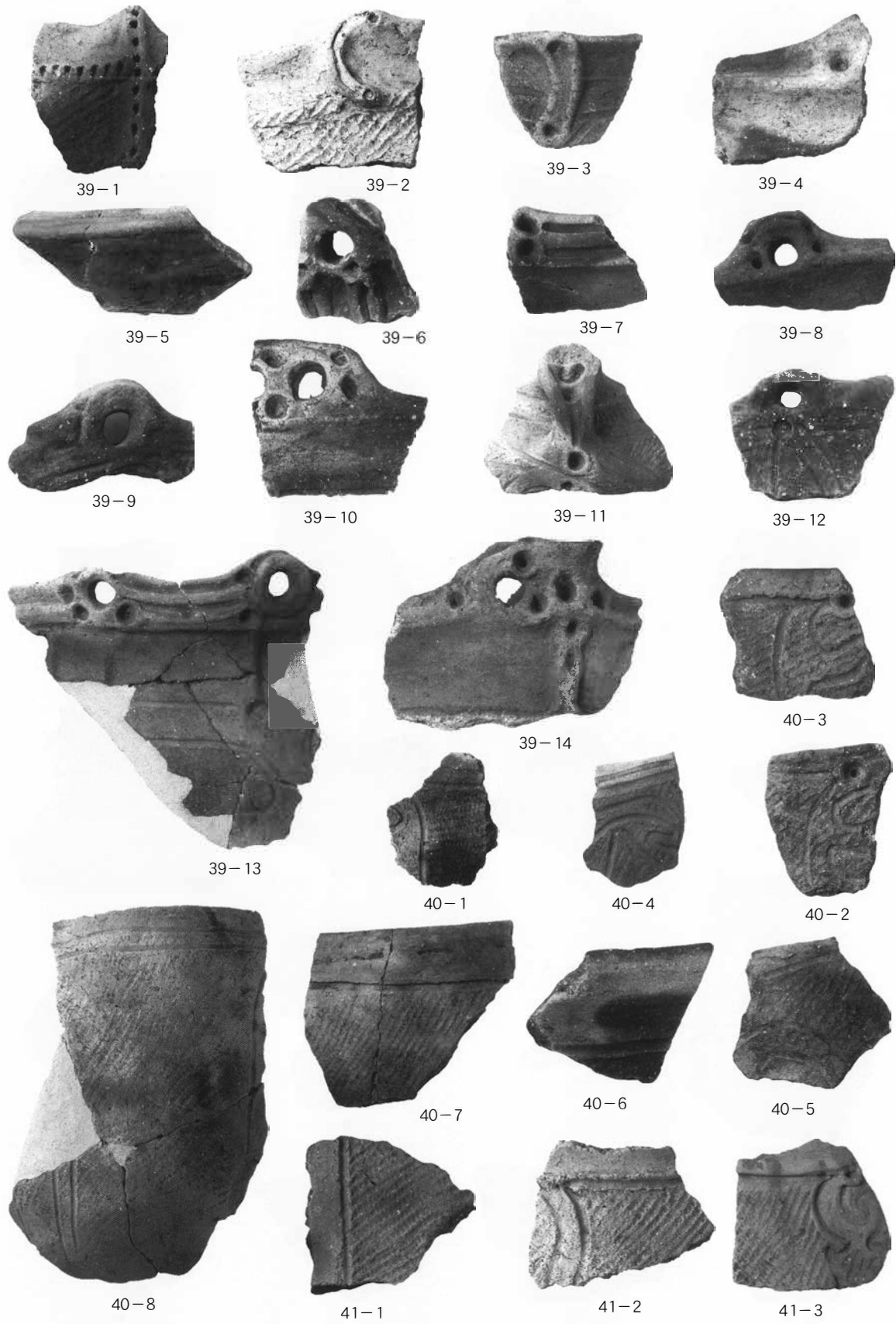
1号・2号土杭、遺物包含層、遺構外出土土器・石器



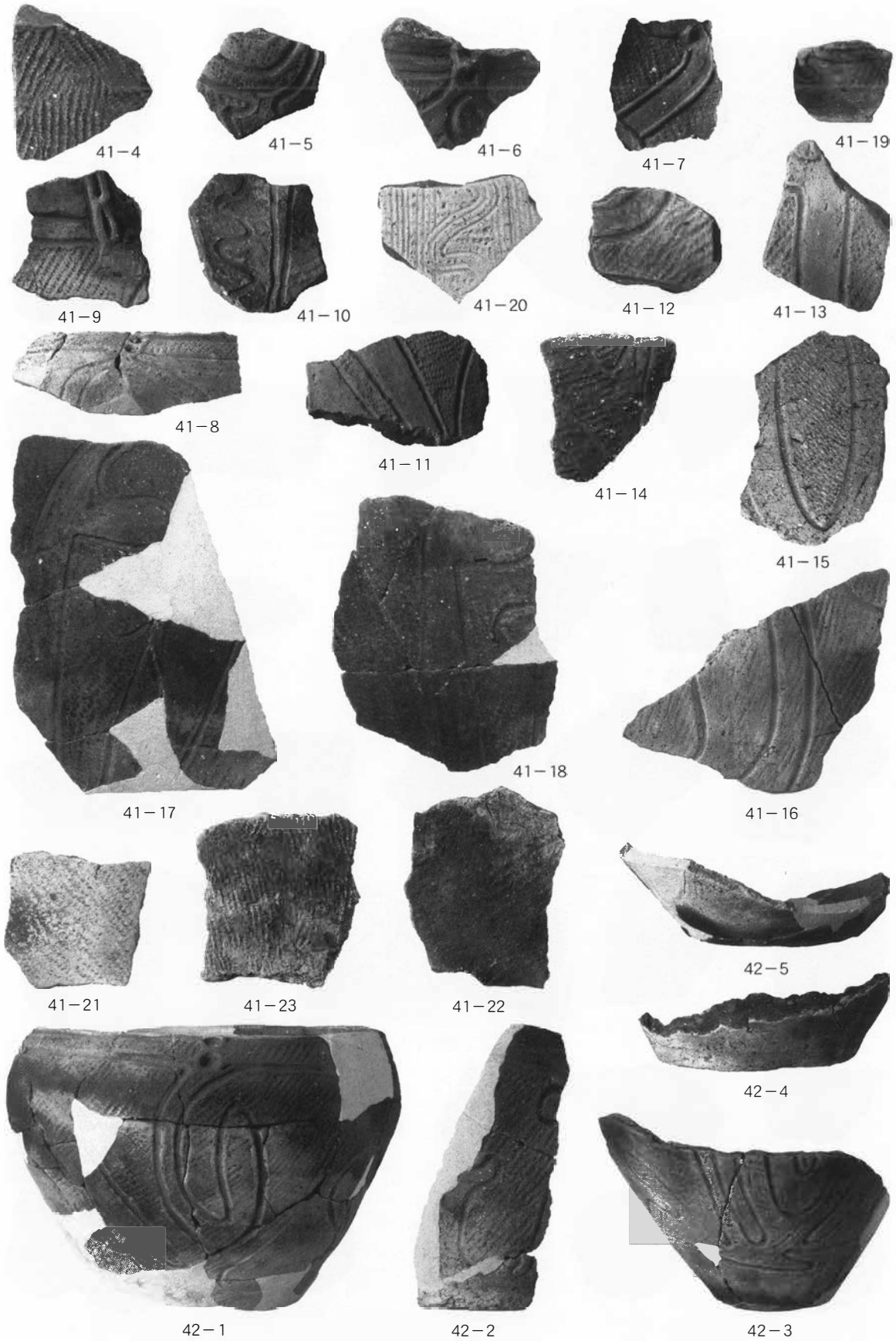
遺構外出土器・土製品



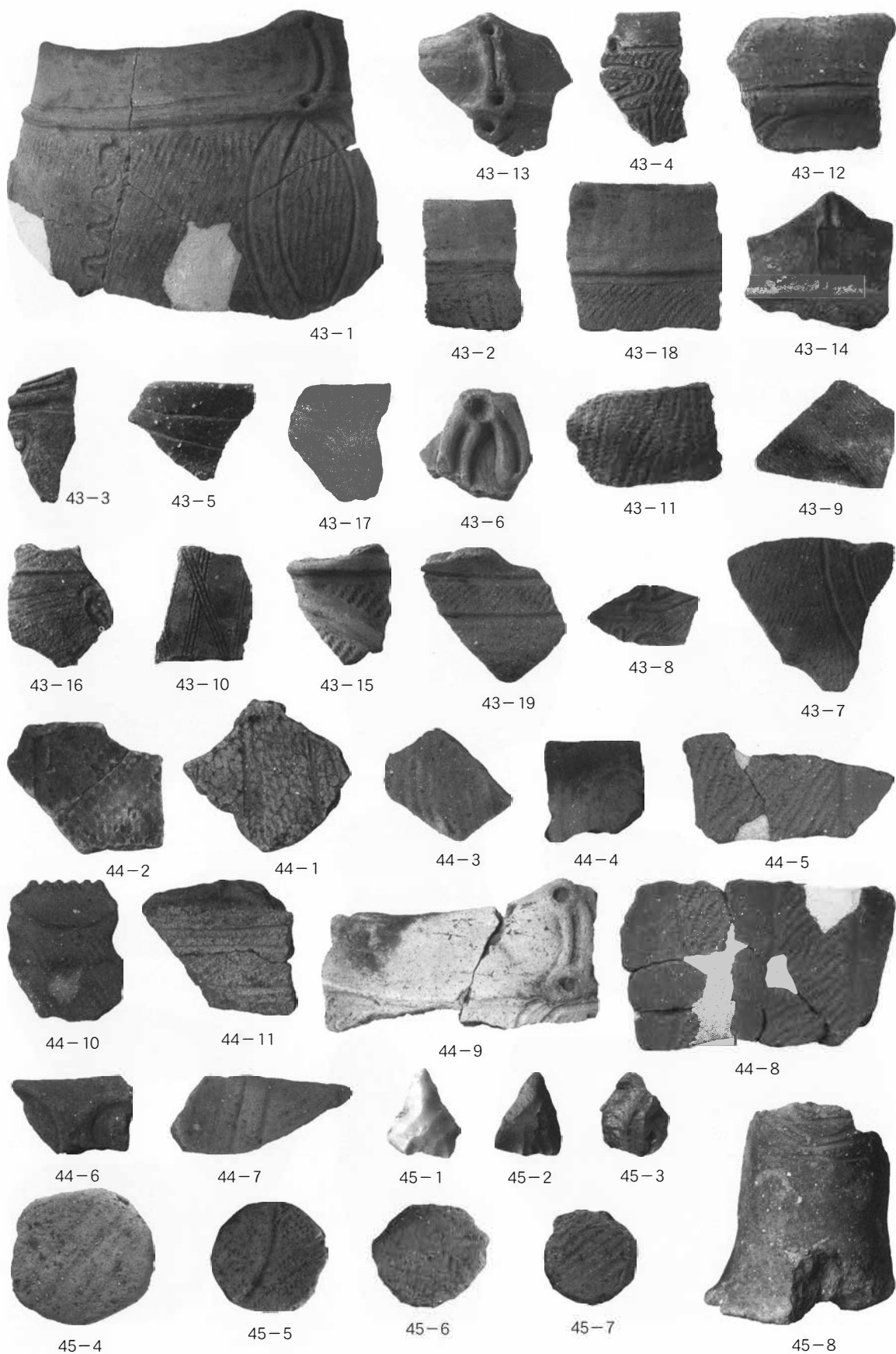
10～12 トレンチ出土土器



12 トレンチ出土土器



12 トレンチ出土土器



10～13トレンチ、1～3グリット出土土器・石器・土製品

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおたわひろはたいせき						
書名	大田和広畑遺跡						
副書名	縄文時代集落跡の調査						
シリーズ名	南相馬市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第7集						
編著者名	佐川 久・川田 強						
編集機関	福島県南相馬市教育委員会文化課						
所在地	〒975-0012 福島県南相馬市原町区三島町二丁目45						
発行年月日	2007. 3. 31						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡				
おおたわひろはたいせき 大田和広畑遺跡	みなみそうまし おだかく 南相馬市小高区 おおたわひろはた 大田和字広畑	072125	24	37° 32' 49"	140° 56' 48"	130	県道中ノ内・小高線整備工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項	
大田和広畑遺跡	集落跡	縄文		竪穴住居・土坑等	縄文土器・石器・土製品	縄文時代中期～後期の集落跡	

南相馬市埋蔵文化財調査報告書 第7集

大田和広畑遺跡

—縄文時代集落跡の調査—

印刷 2007年3月20日

発行 2007年3月31日

編集 南相馬市教育委員会 文化課

発行 南相馬市教育委員会

〒975-0012

福島県南相馬市原町区三島町二丁目45番地

印刷所 株式会社 まつざき印刷

〒979-1525

福島県双葉郡浪江町大字高瀬字根木内100